
ずっと外伝 ユイ

さいけでりっく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ずっと外伝 ユイ

【コード】

N3924H

【作者名】

さいけでりっく

【あらすじ】

一人の男に出逢って人生が変わった。しかしその幸せは永く続かなかった。

ユイ1 (前書き)

本編『ずっと』

http://ncode.syosetu.com/n5484g/

『ずっと外伝イシハラ』

http://ncode.syosetu.com/n3164h/

ユイ1

私は父を探していた。

「パパ！」

3人で言った記憶のある、横浜のお婆ちゃんのところにいるかもしれない。

周囲の人の見様見真似で切符を買って電車に乗った。

電車からの見る車窓は、見覚えがあった。

「パパ……」

「ユイ、パパは天国に行っちゃったのよ」

「どこ？」

「ママもユイも……もうパパには逢えないの」

そんな母の言葉を聞いてから、確かに父とは逢っていなかった。

父はずっと後になって聞いた話だが、法律関係の仕事をしていたという。

小児喘息を患っていた私は、幼少期、入院を繰り返していた。

入院すると必ず、父がプレゼントを持って病院に来てくれた。

その父が急性白血病で天国に逝ったのだった。

私は駅の名前を覚えていた。

改札を出てロータリーに行くと、ビルがいくつか増えており、少し景色が変わっていた。

しかし、いつも乗っていた色のタクシーは、たくさん泊まっていた。

「セントハイツ幼稚園まで」

「お嬢ちゃん、お金あるの?」

「お婆ちゃんのところに行くの」

「はいはい。ドア閉めるよ」

私はタクシーに乗って行き先を告げた。

父母がいつも幼稚園の名前を忘れており、父が道を説明していた。だからお婆ちゃんの近所にある、幼稚園の名前を覚えていた。

「はい、着いたよ。1200円あるかな?」

「はい」

以前と変わらず、お婆ちゃんの家はそこにあつた。

自宅を出てから5時間くらいだろうか。

私は父に探しに、父の実家でもある横浜に来ていた。

「お婆ちゃん!」

返事が無い。

インターホンまでは、私の身長では届かなかつた。

仕方なくお婆ちゃんが帰ってくるのを待っていた。

辺りは薄暗くなってきており、独りで居るのが怖くなっていた。

「もう…お婆ちゃん、早く帰ってきてよ!」

私は独りが嫌いだつた。

病院を出たり入ったりしていれば、友達なんか出来やしない。学校へ行けているうちは、帰宅すると母が友達だつた。

母は自転車の後ろに私を乗せ、どこへでも連れて行ってくれた。休みの日は、私は父にべったりだった。

辺りが真っ暗になると孤独が恐怖心に変わった。

「ユイ…ちゃん？」

「お婆ちゃん！」

私は泣きながら、お婆ちゃんに走っていった。抱きしめられた安心感は、とても大きかった。

お婆ちゃんは、母から私が居なくなつた連絡を受けていたらしい。もしかしてと思い、駅で私を探していた。

「今夜はこつちに泊めるから。警察にも連絡しておきなさい。ちょっと待ってね」

「ユイちゃん、ママが代わってくれて」

「ママ？お婆ちゃんのところにも、パパ来てないって」

受話器の向こうで母が号泣しているのが分かった。

「私からも話してみるから。おやすみ」

その夜、お婆ちゃんと2人でご飯を食べて、お風呂に入り、1つの布団で眠った。

「ユイちゃん、パパはもう帰ってこないんだよ」

「どうして？仕事？」

「パパは病気で天国に行っちゃったの。もう骨になっちゃったんだ」

よ」

「ユイが良い子にすれば、逢える？」

「どうかな？でもパパはずっとユイちゃんを天国から見守ってくれてるよ」

「パパからは見えて、ユイからは見えないんだ」

父の死を受け入れたのは、中学生の頃だろうか。

この頃には喘息も癒え、少しだが友達が出来ていた。

でもその友達が悪かった。

深夜徘徊、バイクにシンナー、マリファナや覚せい剤までやるような人間だった。

女友達は、先輩の溜まり場に行つては、レイプまがいなことをされていた。

男友達は、薬物でおかしくなったり、バイクで事故死したり散々だった。

ただ唯一、私と共通していたことがあった。

独りではいられない、孤独な人間だった。

それが共通点となり、話が合った。

私も例外ではなく、シンナーを吸ったり、薬物をやった。

付き合っていた先輩が、地元では有名な人物だったらしく、周囲に変なことはされなかった。

中学の2年になった頃、初めて家出をした。

付き合っていた先輩の家に泊まっていた。

どこへ行く訳でもなく、彼の家に居た。

最初是一緒に居られるだけで嬉しかった。

しかし短いスカートを履けば怒られ、同級生の男の子と話せば、そ

の子が殴られた。
そんなことが嫌になって、家には帰れずに夜の街を徘徊していたの
だった。

「ユイ、彼のところに帰らなくていいの？」

「もういいよ…。」

「家にも？」

「ううん。今、帰ろうかなって思ってる」

母に罪悪感があった。

いつも私の心配をしてくれて、一緒に居てくれた。
母を困らせるつもりはなかった。

私は家に帰ることにした。

「お母さん、ただいま…」

「ユイ！」

母は少しやつれたように見えた。
やっぱり心配していてくれた。

「お母さん、家出なんかしてごめんね」

「ユイが事故に巻き込まれて死んだら、お母さんも死ぬからね」

母一人、子一人なのだ。

私の行動が軽率だった。

しばらく、その仲間とは付き合っていたが、高校に行きたくなくて、
ちゃんと学校に行った。

自慢できるような学校ではないが、私立と公立の2つの高校に受か
っていた。

「ユイが行きたい方の学校に行きなさい」

私は悩まずに公立の学校に進学した。

そこで長い付き合いをすることになる、先輩に出逢う。

「ねね、あの女優みたいな先輩は誰？」

「この辺りでは超有名でさ、ユミ先輩とユカ先輩っていうのよ」

「キレイで素敵な人だね」

「美人で性格も良くて、すごい人気あるんだから」

得意気になって、話しているのはメグミといい、隣の席で友達になった。

後で知ることになるが、この学校にうちのボスにイタズラした蘭三郎のママも居た。

「ちょっと見て、ユイ！」

「ん？」

ユミ先輩とユカ先輩がこちらに向かって歩いてきた。

もちろん、こちらに向かってきたのは勘違いで、私達の前を通り過ぎただけだった。

「すごいー！」

「メグどうしたの？」

「良い匂いがした！」

「髪？香水かな？」

ユミ先輩が振り返った。

私とメグミの会話が聞こえたらしい。

「香水の香りよ。アトマイザーだけどあげようか」

「いいんですか？」

ユミ先輩とユカ先輩は、本当に良い人だった。

2人の先輩との出会いが、逸れ掛けた私の道を正しい方向へ導いてくれる。

ユイ2

高校に進学して、2人の先輩と出逢った。

しかしバカなことを繰り返してきた私でも入れた学校だ。
ユミ先輩やユカ先輩以外に楽しいことはなかった。

クラスのみんながショットバーに行くという話で盛り上がっていた。
私は興味が無かった。

「ユイ、行かないの？」

「うん、行く気しないな…」

「そのショットバーってさ、ユミ先輩とユカ先輩がバイトしてるんだって」

「先輩が？」

私もショットバーに行くことにした。

結局、怖気付いた人間ばかりで、私とメグミと男の子2人の4人しか参加者は居なかった。

制服ではさすがに入店させてもらえない為、駅のトイレで着替えた。
荷物は2人ずつ、コインロッカーに詰め込んだ。

「いらっしゃいー」

ウェイターがカウンターのイスを引いて座らせてくれた。

カウンター越しに先輩は居た。

「あら…1年生？こんなとこで何してんの？」

「デートなら違う場所にしなさい」

同級生の男の子達は、そそくさと店を出て行った。

「1杯だけ出してあげようか？」

「はい！」

私は、仕事をしている先輩の姿を目で追っていた。カウンターには、先輩目当ての客がたくさん居た。私はメグミと会話することも無く、ずっと先輩を見ていた。

「名前は？」

「ユイです」

「メグミです」

「もう来ちゃダメよ？」

ユミ先輩が内緒話をするように、顔を近付けた。

「私とユカも歳ごまかしてるんだから」

「そうなんですか？」

「アンタ達みたいないな子供に先輩なんて呼ばれてるのがバレたら、私達もバレちゃう」

「ごめんなさい……」

「もうそろそろ上がるから、一緒に帰る。アンタ達だけじゃ危ないから」

「はい」

店を出て5分ほどで、ユミさんとユカさんは出てきた。

「帰るよ」

「はい」

帰りの道中、私達は話していた。

「ユイだっけ？3年の男の子達にずいぶん人気あるわね」

「そうなんですか？」

「今年の1年にすごい可愛い子が入ったって、みんな言ってるわよ」

「彼氏、居るの？」

「居ませんね」

「アンタみたいな子は、うんと年上の方が良いわよ」

「そうですか？」

「ヤンチャ坊主だけはやめなよ。地元で有名なだけとかは論外」

「そうよ。社会に出てみたら、そんなの大したことないんだから」

「勉強になります」

私はそれからユミさんやユカさんと一緒に居る時間が多くなった。

少し大人で2人の先輩と一緒に居るときの背伸びが、妙に心地良かったからだ。

学校に居るときは、制服の着かたを真似した。

私服も同じように真似し、化粧の仕方も教わって真似した。

私のことを可愛がってくれた、ユミさんやユカさんが卒業するとき、私は泣いた。

「先輩、卒業おめでとうございます。やっぱり、寂しいです……」

「ユイ、またどこかで逢えるよ」

「連絡先、教えとくから」

それから私は、学校に居ても居場所が無かった。

後輩は論外、同級生とは合わなかったからだ。

唯一、メグミが話す相手だった。

たまたまに学校へ行くとメグミだけは、私に話し掛けた。

「ユイ、出席日数足りないんじゃないの？」

「このままじゃ、そうかもね」

「そうかもねって、留年や退学に…」

「別にそれでもいいよ」

「ユイ…」

ユミさんやユカさんが居なくなってから、私はまた孤独になった。

学校の男の子達にチャホヤされても嬉しくはなかった。

その態度を見て、女の子達が遠ざかっていった。

そして遅刻や早退を繰り返して、休むことも多くなった。

「ごめんください！」

「はい」

玄関のドアを開けると、見知らぬ若い男が立っていた。

「ユイさんかな？」

「アンタ誰？」

男は私の学校の教諭で、オガタと名乗った。

正確に言うとは教諭の卵で実習生だった。

「ちょっと入っていいかな？」

「誰も居ないから嫌だ」

「じゃあ、単刀直入に言おう。お前ちゃんと学校に来いよ」

「私の勝手でしょ。帰って」

「帰るがお前がちゃんと来るまで、毎日来るからな」

「バカじゃないの」

それからオガタは、本当に毎日やって来た。

真面目な男で、教師という情熱に酔っているような男だった。

不思議とオガタと話していると孤独から解放されたような気がした。

私はオガタを部屋に入れるまでになる頃には、オガタを受け入れていた。

オガタと私は、男女の仲になった。

もちろん世間では、モラルが低いだとか言われるだろう。しかし私はそれでも良いと思った。

私達は付き合うようになり、学校へ行くようになった。

久しぶりに登校した日の朝。

教室の後ろの黒板に、私とオガタの関係を中傷する落書きがあった。

「ユイ！」

「メグミ、これ誰が書いたか知ってる？」

「う、うん……」

「ちゃんと答えてよ！」

ざわついていた教室内が静まるほど、大きな声を出した。

「ヒカル……」

ヒカルの席を振り返ると教室から、出て行った。

私は走ってヒカルを追いかけた。

「ちよつとアンタ！」

「何よ！」

私は、校門のところまでヒカルを追いかけた。

「こいつか？教育実習とやったっていうヤリマンは？」

「そうよ！」

ヒカルの男だろうか。

バイクに跨って、シンナーだと思われる缶を啜えながら、私を見た。

「生意気そうなツラしてんな。ヒカル、やっちまえよ」
その男は、ナイフをヒカルに手渡した。

騒ぎを聞きつけた、教師が数人やってきた。

「コラ、何をやってるんだ！」

男はアクセルを全開にし、耳を覆いたくなるような爆音を轟かせた。
耳を塞いだ瞬間、ヒカルが私の制服をナイフで切りつけた。

そのとき、私の中で何かが弾けた。

ヒカルの振り回すナイフがシャツとスカートを切り刻むと、私はキ
レた。

私は、ヒカルを思いっきり平手打ちした。

その拍子で落としたナイフを私は拾った。

「早くバイク出して！」

「ああ、乗れ！」

私はヒカルを逃がそうとはしなかった。

髪の毛を掴んで、ヒカルをバイクから引きずり降ろした。

「離せよ！」

「アンタ何なのよ！」

揉み合ってる間にバイクが突っ込んで来た。

私はとっさに避けたが、バイクに追突されたヒカルの体は宙に浮い
た。

自分の彼女をバイクで轢いたのに、男は逃走を図った。

「コラ！止まれ！」

数人の教師が男を制止させ、バイクから降ろした。

男は暴れながら、職員室へと連れて行かれるところだった。

「アンタ、ちょっと待ちなよ！」

私は持っているナイフで男のお尻を刺した。

ユイ3

男を刺した私をオガタが止めに入った。

私は男を刺すことに何も抵抗が無かった。

男は保健室で処置を受けただけで帰って行ったという。

「彼が被害届け出したら大事だぞ」

「構わないよ。私は自分を守っただけだから」

「それは見ていた先生達が証言してやる。けど…」

「いい。もう学校辞める」

「おい…」

オガタも私との関係が発端となっていることに責任を感じていたのだろう。

帰宅すると母に事情を説明した。

「お母さん、ごめんなさい」

「どんな理由があったとしても、人を傷付けることはいけないこと

よ

「分かってるけど、許せなかったの」

「これからどうするの？」

「お父さんと話してから、考えてみるね」

「そう…」

翌日、私は父の墓がある横浜へと向かった。

墓参りに行く前にお婆ちゃんの家立ち寄った。

「こんにちは」

「ユイちゃん!どうしたの?」

「お父さんのお墓に行こうよ」

「いいけど…学校は?」

「辞めてきちゃった」

「あらあら。それでお父さんにこれからのことを相談しに?」

「うん」

私とお婆ちゃんは、父の墓前に花を手向け、線香をあげた。

「住職さんと話しあるから、2人で話してなさい」

「うん」

今の私には、父の声は何も聞こえなかった。

どんなに問いかけても、父は応えてくれなかった。

地元へ戻る途中、ユミさんに連絡をした。

「今、ユカと一緒によ。駅で買い物してるから着いたらベル鳴らしな」

「はい」

駅の近所でユミさんに連絡を取るとご飯を食べているとのことだった。

「ユイ、どしたの?」

「アンタ、表情が冴えないね」

「はい、実は…」

オガタのことや学校であったこと、お父さんに逢いに行ったことを話した。

「らしいっちゃらしいけど、褒められたもんじゃないのは分かるよ」

ね？」

「もちろんです」

「学校辞めてどうすんのよ？」

「お父さんに聞きに行っただけ、何も応えてくれませんでした」
ユカさんが溜息をついた。

「ユイ、お父さんは何も応えてくれないの。自分がしたこと、これからのことを考えなきゃ」
「ですね」

しばらく心情を吐露していたが、答えは出ず、きっかけも作れなかった。

「今、2人は何してるんですか？」

「駅の反対側でキャバ嬢やってるよ」

「キャバ嬢？」

「キャバクラ知らない？」

当時ではキャバクラという言葉は浸透していなかった。
キャバレーとクラブを足して2で割ったような店という。
キャバレーの明朗会計な大衆さと、それでいてクラブのような高級感が味わえるという。

「水商売ってことですか？」

「そうよ」

「でもユイは18歳になってないから働けないわ」

「そうですか…」

帰宅すると母が私を外食に誘ってくれた。

母は店に向かう道中も食事中も終始、無言だった。

「お母さん、怒ってる?」

「ううん。怒ってないよ」

「お父さんね、何も言ってくれなかったの」

「だろうね」

「どうして分かるの?」

「今のユイに愛情が見えないからじゃない?」

「愛情?」

「異性の誰かを好きになっても愛情までは無い。友達への友情も無い」

「確かに…」

「あるのは寂しさと孤独感。それじゃお父さんは何も言ってくれないよ」

「ちよつと納得…」

「母一人、子一人だから心配掛けなきゃ、何やってもいいわよ」

「お母さん」

「社会を見てくるのも良い。とりあえず今のユイに無いものを探し
てきなさい」

「ありがとう」

母と自宅に戻るとオガタが玄関前で待っていた。

「ユイ、入ってもらいなさい」

「どうぞ」

オガタは今回の一件で学校から異動を命じられたとのことだった。

「しょうがないよね。教育実習が女子高生に手を出してんだから」

「そついうなよ」

「事実じゃん」

オガタは神妙な面持ちに変わると静かに口を開いた。

「俺：教師になるのを辞めようと思う」

「はあ？」

「土方でもトラックの運転手でもして、働こうと思ってるんだ」

「バカじゃないの？」

「ユイ！」

「何よ！」

「俺と結婚してくれないか！」

青天の霹靂だった。

私は呆然として、言葉が出ない。

「お母さんにも挨拶をしたいんだ」

「ちよつと待つてよ！まだ私が返事してないでしょ」

オガタは何振り構わず、私の手を握ると母の要るリビングへと向かった。

母は、いきなりのオガタの話に理解をしていた。

「お母さん！」

「いいんじゃないの？社会勉強よ」

「お母さん、ありがとうございます！」

「ちよつと！」

オガタは真っ直ぐな男だった。

熱血でいて、素直なところが私が受け入れられた要因だ。

確かに男女の仲になるほどだ。

オガタのことを嫌いではない。

好きと聞かれると好きと答えるだろう。
お母さんの言うとおり、愛情はと聞かれると沈黙で答えるかもしれない。

「お母さん、ユイ！半年くれないか？」

オガタは職探しと、その仕事が安定するまでに時間が欲しいのとどだった。

一方的な自分の意見だけを言って、オガタは帰っていった。

「ユイ、あの人のこと信じてみれば？」

「信じる……」

「そう。半年経ってちゃんとしてれば、お嫁になってあげればいいじゃない」

「信じてみようかな」

「今のユイには、そういう感情が必要なのよ」

私は根本的に特定の人間しか信用できない。

妬まれるのが大嫌いだった。

だから私が尊敬できる人間しか信用できなかった。

お母さんであったり、ユミさんやユカさんくらいだろう。

私はお母さんの言葉通り、オガタを信じて待つてみることにした。
確かに誰かを信じたい気持ちはある。

しかしオガタを信じるに値するかは、今のところ疑心暗鬼だった。

オガタはしばらく連絡もしてこなかった。

ユイ4

私はオガタからの連絡を待つ間、ずっとお母さんと時間を共にした。

それは大切な時間となった。

今の私の気持ちや考えをお母さんに聞いてもらう貴重な時間となっていた。

ある日、久しぶりにメグミから連絡があった。

「ユイ、久しぶり」

「メグ、元気？」

「ちよっと遊びに行っていていい？」

「うん。おいでよ」

メグミはあるバンドのライブチケットを持ってきた。

「ユイ、ライブ一緒に行こうよ」

「誰？」

「ファイ知らないの？」

80年代、日本の音楽シーンに絶大な影響を及ぼしたロックバンドのファイ。

確かに名前は知っていた。

男の子達がコピーバンドをしていたのを知っていた。

この頃はファイは、武道館でのコンサートを成功させ、頂点に立っていた。

「うん、連れてって」

「じゃ明後日に駅で待ち合わせね」

メグミに連れて行ってもらった、ファイのライブに私は衝撃を受けた。

それからというもの、東京近郊で行われるライブにはかなりの頻度で行った。

2人でファンクラブにも入った。

ファイは私に夢を与えるのではなく、思春期の私の心を席卷した。ファイのライブに行くときは、活き活きしているとお母さんが行ったくらいだった。

ひたすら追い掛けては、私を痺れさせてくれた。

私の中でここまで熱中出来る何かがあっただろうか。

「メグ、チケット届いた？」

「ファンミーティングのでしょ？届いたよ！」

「1000人限定ってすごいよね」

「メンバーをすごい近い距離で見れるね」

私とメグミはその日が来るのが待ち遠しかった。

四六時中、ファイのCDを聞いて、ビデオは擦り切れるほど観ていた。

気が付けばファイのナンバーの鼻歌を歌い、歌詞をノートに書き出したりしていた。

そしてその当日。

いつものようにメグミと駅で待ち合わせをして、ライブハウスへと向かった。

「別のファンクラブの子に聞いたんだけどさ」

「うんうん」

「ファンミーティングのときに圭介が首に巻いてるタオルを投げ
らんだって」

メグミのいう圭介とはファイのボーカルのことだ。

「それを受け取った子は、一緒にご飯食べれるらしいよ」
「すごいね」

会場に着くといつもよりは人が少ない。

抽選で選ばれた会員しか入れないからだ。

行列も少なく、すんなりと会場に入れた。

「ファイのライブにしては小規模だね」

「今日はライブ半分、トーク半分くらいだって話だよ」

「そうなんだ」

「すごいステージが近いね」

「緊張する」

定刻になってライブは始まった。

いつもと同じ、ファイのファーストアルバムに収録されているナン
バーからだ。

ノンストップで3曲を歌い終わると、照明が明るくなった。
バンドメンバーのMCが始まる。

それぞれ歌っている声は聞いていた。

地声で話している声というのは新鮮だった。

2時間のファンミーティングは、あっという間だった。

そしてラストの曲が終わると照明が全て落とされた。

アンコールの拍手が会場を包む。

薄暗い会場のざわめきの中、鳴り止まないアンコール。メンバーが戻ってくるまでのこの間がたまらなかった。

照明が明るくなり、衣装を着替えたメンバーが再登場する。ボーカルの圭介は、お決まりのタオルを首から下げていた。

「ユイ、あのタオルだよ！」

「私、小さいから飛んできても届かないよ」

「とにかく来たら飛びついてね」

アンコールの1曲目のイントロが演奏されたとき、圭介と私は目が合った気がした。

投げ込まれたタオルは一直線に私に飛んでくる。

「ユイ、取って！」

メグミの叫び声も虚しく、タオルは飛び上がった私の頭の上を通過していった。

「ああ、残念……」

アンコールは3曲で終了した。

ライブ会場を跡にしようとした私達に、会場のスタッフだろうが、声を掛けてきた。

「ファイのメンバーが待っています。別の出口からどうぞ」

「ええ！」

メグミが開いた口を手で覆った。

私達は、スタッフに案内され裏口からライブ会場から出た。裏口には出待ちをしているファンの女の子達がたくさん居た。

「ここに書いてあるホテルのバーでメンバーが待ってるから」
スタッフの男が手を挙げるとタクシーが止まった。

「やっぱりあのとき、私達にタオル投げられてたんだね」
「どうだろうね。分かんないけど直接誘ってくれるとは思わなかったよね」

ホテルに到着するとフロントでバーの場所を聞いた。
そこには、まだメンバーは来ていなかった。

「あー！」

メグミの視線の先は、ファイのメンバーがこちらに歩いてきていた。

私は柄にも無く、緊張していた。

何を話したか覚えていない。

メンバーは私たちのことを17歳だと知らないのだろう。

カクテルを飲まされていた記憶がある。

しばらく談笑をしていると圭介が私の手をそつと引いていった。

エレベーターに2人で乗ると圭介の部屋に連れて行かれた。

部屋に入るなり、いきなりキスをされた。

無抵抗のまま、ベッドに連れて行かれ、私は抱かれた。

オガタを信じて待っている身で、憧れのバンドのボーカルに抱かれた。

私はオガタへの罪悪感は無かった。

圭介は私の中で果てた。

部屋を出るとき、圭介から連絡先を教えてもらった。

私は実家とのこともあり、ポケットベルの番号を渡した。

翌日、メグミから連絡があった。

学校が終わったたら、家に来るといふ。

「ねえ！ユイあれからどうしたのよ？」

「圭介に手を引つ張られて、部屋に連れて行かれた…」

「圭介の女になったの？」

「っばい…。連絡先交換した。また連絡するって」

「すごいじゃん！」

「メグ…誰にも言わないで」

「分かった。騒ぎになったら困るもんね」

興奮するメグミを見ながら、私はメグミほどはしゃいでいなかった。妊娠していたらどうしよう、オガタには何と話そうか…。

それから数ヶ月、圭介からホテルに呼び出されては抱かれた。

圭介はいつも躊躇いもなく、私の中で果てた。

その間、ファイはシングルでとうとう1位になる。

テレビに露出しないスタンスであったファイの名前は、一気に全国区になる。

しかし絶頂期の中にあつたクリスマスライブの日、ファイは渋谷公会堂で解散宣言をした。

翌日の新聞には、ラストライブを東京ドームで行つと出ていた。

ちよつどその頃、私は体調の異変を感じた。

思い当たる節はあつた。

圭介の子供を妊娠しているのではないかと。

私は誰にも言えなかつた。

メグミに産婦人科へ行くのに付き合ってもらつた。

「ユイ、どうだった？」

「妊娠してた…」

「産むんでしょ？」

「産む訳ないじゃん！」

私は帰宅すると圭介に連絡を取った。

ユイ5

予想はしていたが、結果が出たとなると急に自己嫌悪になる。オガタが私に対して、求婚してきている状態での妊娠。母はオガタのことを信じてみればとアドバイスしてくれた。

超人気ロックバンドのボーカルと関係を持ったからと浮かれていた訳でもない。

ただただ、流れに身を任せていた結果がこれだった。

圭介に連絡を取るも、リアクションは想像通りだった。

翌日、墮胎費用として50万が入った、現金書留が送られてきた。

産婦人科で墮胎手術を受けるのに、保証人となる人のサインをもらってくれと言われた。

「あなたは未成年だから、成人の同意がなければいけません」

途方に暮れそうになった。

どこの誰がこんなバカな行動をした女の保証人になってくれるのか。

メグミが心配して、家に来てくれた。

「そっか。でもユイどうするの？」

「もうどうしていいか、分かんないよ」

「でも圭介って最低だね」

「こんなもんでしょ。対応の手際が良過ぎるよ。慣れっこって感じしたもん」

「成人の保証人か……」

「メグ、ありがと。ちょっと探してみるよ」

探しようにもオガタ以外に居る訳がなかった。
しかしオガタには言えない。

こんなことをしているうちに、時間だけが経過してしまうのだけは避けたかった。

ニクスで目にする、新生児の置き去りはこうして起こるのかと想像した。

「ユミさん、相談があるんですけど？」

「今日、休みだからうちに居るよ。来る？」

「はい」

私はユミさんのマンションを聞き、尋ねることにした。

「相手に話せないの？」

「たぶん、無理だと思います」

「私はその彼に言ってあげようか？」

「それはちよつと…」

「アンタね、女がそつだから男がつけあがるのよ？」

「次からは、無いようにします…」

「ちよつと待つて」

ユミさんは誰かのポケットベルを打っているようだった。
しばらくすると電話が鳴った。

「私の彼がサインしてくれるって」

「すみません」

「いくらユイでも、こういうのは、これっきりだよ？」

「はい」

このサインをしてくれた人は、ユミさんやユカさんが働いているキ

ヤバクラの社長だった。

私はこの社長に将来、違う形で出逢うことになる。

中絶手術を受けた後、私は1人病室のベッドに横になっていた。私は何をしてるんだろう。

たった1人の家族である、お母さんに心配を掛けてばかり。

高校も途中で辞めてしまった。

熱中できるものを見つけたと思った挙句、果ては17歳で妊娠、中絶。

今まで何かと寂しさと孤独感のせいにしてきた。

でも今は、自分が情けないと思った。

私は考えた。

オガタにこの事実を話し、それでも受け入れてくれるようならオガタに尽くそうと。

それが叶わぬことであれば、致し方ないと諦めようと思った。

この産婦人科には退院後、何度か子宮内の洗浄等で通院した。最後の通院が終わったとき、オガタから連絡が入った。

「ユイ、話がある。今晚、時間取れるかい？」

「いいよ」

「19時には、そっちに行けると思う」

「車で来る？」

「もちろん」

「じゃ時間になったら下で待ってるよ」

「ん？分かった」

19時を数分回った頃、オガタがやって来た。

「久しぶり！」

「久しぶりだね。少し痩せた？」

「いや、日に焼けたからそう見えるのかな？」

私はオガタの車に乗った。

「ちよつと走るうよ」

「ああ、いいよ」

湾岸線で千葉方面へと車を走らせた。

「もうそろそろ完成みたいだな」

「船橋のスキードーム？」

「ちよつと見に行ってみるか」

「うん」

少し離れた位置からでも、異様な形をした建造物が見えた。

「すごい大きいな」

その建造物の近くにある、大きな駐車場に泊まった。

「仕事は何してるの？」

「あれからすぐ、トラックの運転手やりだしてさ」

「うん」

「やっと慣れてきたところだよ」

オガタは4トントラックに乗っているとのことだった。

近場の配達や長距離の配達をしており、給料も35万ほど稼いでいるという話だった。

「私もね、話があるの」

「どうした？」

メグミとファイのコンサートに行くようになった話をした。

「ファイ！俺も大ファンだよ」

オガタは目を輝かせた。

「今年の4月には解散しちゃうね」

「俺なんか海賊版のライブテープとか持ってるよ」

「でね、ファンミーティングに行ったの」

「あれって抽選だよな？」

「私とメグミも当選した」

「メグミか。懐かしい名前だな」

次に私が発したセリフに、オガタの表情は一変する。

「ファンミーティングの後、私とメグがメンバーに誘われてバーに行っただの」

「まさか……」

「ごめんなさい……妊娠されられた」

オガタは絶句した。

「結果的には、中絶したの。その費用と感謝料は出してもらった」

「そう……」

「隠したままは嫌だったから、どうしても話そうと思って」

オガタは下をうつむいたまま、言葉を失っていた。

「こんな私で良かったら、プロポーズを受けさせて欲しい」

オガタは微動だにしない。

「もちろん、フラれてもしょうがないから、断ってくれてもいいの」

「いや……よく話してくれた」

「え？」

「今までのユイから成長が見えたよ」

私はオガタの言葉に何も言えなかった。

「どうして話そうと思ったの？」

「あなたを信じてみようと思ったの」

教員という仕事を捨てて、すぐに仕事を始めようとしたこと。それはもちろん、私とのが噂になったことで今後のことを考えたのだろう。

そしてその仕事安定するのを待って、私を迎えに来ると言ったこと。

それを信じて待とうと思ったことを告げた。

「そうだったのか」

「でも信じるのが不安になったから、このようなことになったか分からない」

言葉通り、私にも分からなかった。

「話して、受け入れてくれるなら、尽くそうと思ったの」

「少し見ない間に大人になったんだな」

「本当にごめんなさい」

オガタは私の謝罪に何度も頷いた。

するとオガタは、指輪を渡してくれた。

「正直、このことについては驚いたが、気持ちは変わらない」

「ありがとうございます。これからよろしく願います」

その後、私達は帰宅して、母に報告した。

ユイ6

私とオガタは2人だけで結婚式を挙げた。

オガタの両親と私の母が援助してくれ、マンションを借りてくれた。私は17歳で専業主婦となった。

オガタが私を受け入れたときから、愛情が少しずつ生まれてきた。仕事に行く時間はとても早かった。

しかし毎日、弁当を作って持たせた。家事を一生懸命こなした。

近所の主婦達には、歳をごまかしていた。

オガタが変な目で見られたくなかったからだ。

素直な性格のオガタを私のせいで傷つけたくない。

「ただいま……」

「おかえり。疲れてるね」

この日、朝3時に家を出て行ったオガタが帰宅してきたのは22時だった。

「お風呂入っちゃって、その間にご飯温めておくから」

「ああ……」

疲労困憊とは今のオガタを指すのだろう。

風呂から出てくると流し込むように食事を終わらせ、オガタは眠った。

しかしオガタは不平、不満を一切、口に出すことはなかった。その姿を見ている私もオガタを支えようとした。

しかしこの生活は、結婚して2ヶ月もしない頃に一変する。

「今日で仕事辞めてきた」
「ちょっと辛過ぎるよね」
「明日から就職活動するからさ」
「明日くらいゆっくり休めれば？」
「ありがとう。そうするよ」

オガタは翌日、パチンコに行っていた。
そして毎日、パチンコへに行くようになっていた。

「ねえ、仕事探してないの？」
「探してるよ」
「パチンコなんて行く余裕、うちはないよ？」
「分かってる」

それから2ヶ月が過ぎると、自宅にサラ金から返済を求める電話が鳴るようになった。
30万もの大金をどうやって返済しようか。
私の貯金の総額がそれくらいしかない。
オガタの為に30万を返済に充てた。

「ただいま」
「これ契約書ね」
「あ！」
「もう私、貯金は一切無いからね」
「ごめん…」
「私ね、別にお金持ちじゃなくてもいいの。普通の家庭でも幸せなら良い」
「ごめんよ」

しかしそれから、オガタは職に就くことはなかった。
私は、本望ではないが家を出て実家に戻った。

「お母さん、彼ダメかも…私がダメにしちゃったのかな」
「そう。すぐに結果を求めないで、しばらく様子見てなさい」

その夜、オガタから何度もポケットベルが鳴っていたが、折り返すことはしなかった。

「ユイ、出掛けるわよ」

「どこ行くの？」

「今日は誕生日でしょ。いつものお寿司屋でいい？」

「うん」

何ていう誕生日だ。

「ああ、これでまた人が信用できなくなるな…」

「今回のことは、お母さんもちょっと責任感じてるのよ」

「いいのよ。お母さんは悪くない」

「ユイも悪くないよ。少し彼には頭を冷やしてもらおう」

お母さんは自宅に連絡があったとき、少しは反省しろと怒ってくれたらしい。

翌日、私はユミさんのマンションへ遊びに行った。

ちょうどユカさんも来ており、今回のオガタの経緯を話した。

「せっかく結婚してユイも落ち着いたかかって思ったのにな」

「もう少し、様子を見てあげれば？」

「うん、そうしようとは思ってますけど…」

「けど？」

「もう戻れないと思います」

確かに最初の裏切り行為をしたのは私だ。
やはり結果的に無理やり落ち着こうなどと考えていた結果なのだろうか。

「私達から見て、ユイがそんな人を信用できないような、性格には見えないけどね」

「2人とお母さんは別格です」

「何か気持ちは、分かる気がするよ」

「ユカさん…」

「ユイは傷付きたくない訳じゃないはず。信用した人間に裏切られるのが嫌なんですよ」

「たぶんそうです」

ユミさんが私とユカさんの肩を同時に叩いた。

「そういうのを乗り越えて、良い女になるんじゃない」

私はユミさんやユカさんのように、女を磨こうとキャバクラで働くうと思った。

ユミさんやユカさんが言うには、夕方、駅で立っていればスカウトされるということだった。

「こんばんわ。ちょっと時間いいですか？」

「無いですけど、何ですか？」

2人の言うとおり、スカウトだった。

「名刺見せてもらってもいいですか？」

「あ、ごめん。そうだったね。俺も新人で慣れてなくて」

クイーン店、ボーイサトウ…。

それはユミさんとユカさんの居る店だった。

「申し訳ないんだけど、ここでは働きません」

「そっか、ごめんね。時間取らせちゃって」

このサトウという男。

後になって分かることだが、私にとっては恩人になるのかもしれない。

この後、運命の男と出逢うことをアシストしてくれることになる。

2人目に声を掛けてきたのは、サトウから10分も経っていなかった。

「こんばんわ。お姉さんをスカウトさせてください！」

エンジェルという名のキャバクラの店員でオオタケと名乗った。名刺はまだ出ていないという。

「何かヤラシイ店なんじゃないんですか？」

「来週うちの店、オープンするんですよ。バタバタしてて発注忘れしてたみたいです」

新規オープンとはやりやすい。

全てがスタートラインに同時に着くからだ。

「詳しい話聞かせてもらえますか？」

私は、面接を受けるとすぐに採用された。

コールナンバーという番号を付けるのだが、私は1番をもらった。

源氏名と呼ばれる、仕事上での名前は『結』が本名なのでカタカナでユイとした。

全くのド素人だったが、かなり稼ぐことが出来た。

本心とは裏腹でも良い。

にこっとするだけで、指名がたくさん取れた。

私にはこの職種が合っていたのかも知れない。

店内での私のポジションは相変わらず、1人だった。

それでも私は居場所を見つけたような気がした。

初めて感じる、安堵感。

孤独でも満足はしていた。

男を探したり、作る気など一切無かったので、自由に行動した。客と同伴するのも抵抗が無いどころか、服や貴金属を買ってもらえた。

同じものを違う客に買ってもらっては、質屋に売った。

この半年で給料は1円も使っていなかった。

「お母さん、温泉行きたくない？」

「そりゃ行きたいよ」

「私が連れて行ってあげるから、一緒に行こう」

「何かあったの？」

「仕事がうまく行ってるから。親孝行だよ」

「それじゃ、生きてるうちに親孝行はしてもらおうかな」

「良かった」

お母さんと私の予定を合わせ、スケジュールを決めた。

こんな早く、親孝行をして、お母さんに喜んでもらえるとは思わなかった。

ユイ7

キャバクラで働いていた私は、私なりにうまくいっていると思っていた。

収入も想像以上にあり、母に親孝行も出来た。
孤独感こそ取り除かれていなかったが、居場所を見つけた。
独り暮らしも始め、精神的にも安定していた。

オガタから連絡が来ていた。
相変わらず、折り返すことはしていなかった。
私に心のゆとりが出来た訳ではないが、心配になって連絡を取ってみた。

「ユイ、何してんの？」

「おお！久しぶりだね」

「ちゃんと仕事してんの？」

「あ、いや……」

「家賃や光熱費は、ちゃんと払ってるの？」

「パチンコで大勝したときに払ってる」

「借金は？」

「200万ほどあるよ……」

「前よりひどくなってるじゃない！」

「ごめん……」

「もうダメだね。別れてよ」

「もうちょっと待ってくれ！必ずちゃんとするから」

「私に好きな人が出来たらどうするの？それに反対出来るの？」

「いや……」

「本当に好きな人が出来たら別れて」

「分かった…」

「それまでにちゃんと真面目になってたら、また話は別だから…」
「ああ」

少しは変化に期待していた。

行き着く道中はどうあれ、私が結婚を決意した男だ。

このままで終わるのかと思うと、自己嫌悪になる。

私がダメにしてしまったのか、私に見る目が無いのか。

私が付き合う男は、みんなダメになる。

束縛が激しくなったり、私の浮気を心配したり。

私と付き合っていると重荷に感じるのだろうか。

全てを受け止めてくれて、愛情表現をいつもしてくれる男は居ない
だろうか。

こんなことを考えていると女で居ることを忘れる。

男なんてどうでもいい。

私の名前は、この周辺では有名になっていた。

「まさかユイがねえ…」

ユミさんは感心していた。

「だってユミさんとユカさんに勝てる訳無いじゃないですか」

「だからって駅の反対側に居たなんて思わないよ」

「あはは」

「でもユイ、ちょっと元気になったね」

「やっぱ、ユミさんとユカさんのおかげかな」

直接はアドバイスしてもらってはないが、存在自体が私を導いて
くれる。

「旦那とは別れたの？」

「まだです」

「別れてくれないの？」

「ですな」

「ユイ相手じゃ、しがみつきたい気持ちも分かる」

「そんな良い女にまだなつてませんよ」

「3人で良い女になろうよ」

その日は朝まで3人で飲んだ。

店で働き出してから、1年が経ち、1周年記念イベントをやるという。

その頃、女の子の間で中心となっている話題に耳を傾けた。

「ねえ、この頃みんなが話してる人って誰なの？」

「あ、ユイさん。若手なのにやり手の男前のボーイが、駅の向こうに居るんですよ」

「ユイちゃん、スカウトで声掛けられたことない？」

「うん、駅の反対側は通らないから」

「結構、その3人は人気あるよ」

「そうなんだ」

水商売のボーイなんて、見た目だけで中身は無いだろう。

うちの店のスタッフも仕事が出来る男なんて居ない。

ただ頼まれたものを持ってくる、ウェイターのようなものだ。

しばらくして、噂の3人組がやってきたのだった。

「いらっしやいませ！3名様です」

「ユイちゃん、例の3人組が来るって…あれ？」

「ユイさんなら、指名入って接客に行きましたよ」

「残念」

『噂の3人組』は、私を含めた人気どころの3人を指名していた。指名を掛け持っていた私は、30分ほど経ってから席に着いた。

「はじめましてユイです」

握手した手がビクつとした。

仲間から支配人やマナブと呼ばれる男と挨拶したとき、ドキドキした。

赤面しているのがバレているのではないかと思うと恥ずかしかった。

どれくらい経っただろうか。

私はキムラ、コダマと呼ばれる人とは少し話せた。

しかしマナブとは、話すどころか顔も見れなかった。

「ユイちゃんていくつ...」

「支配人、時間ですが延長されますか？」

彼から話し掛けられたとき、ボーイに遮られた感じになった。

「マナブ！次行こうぜ」

「でもってここは上司だから支配人のおごり」

「だってさ。チエックしてくれる？」

このままだともう逢えないかもしれない。

私は初めてかもしれない、勇気を振り絞って彼に声を掛けた。

「何も話せなくてごめんなさい。呼ばれちゃったから行きますね」

私は名刺の裏にポケベルの番号と自宅の番号を書いて渡した。

「マナブさんの番号は教えたくなくなったらそこに連絡してきてね」

「分かったよ」

客にポケットベルの番号は教える。

折り返ししなければ、無視できるからだ。

私は自宅の番号まで教えてしまった。

「ユイちゃん、どうしちゃったの？初めて見たよ？自宅の番号教え

てるとこ」

「分かんない。ドキドキしちゃった」

「そんな可愛いところあったっけ？」

「茶化さないですよ。でもどうしっちゃったんだろう私…」

帰宅しても彼のことを思い出していた。

じっとしていられなくなり、ユミさんに連絡を取った。

「お疲れ様です」

「お疲れ様。どした？」

「ユミさんの店の支配人ってマナブって人？」

「そうだよ？何で知ってんの？」

「今日、キムラさんとコダマさんという人と3人で店に来ました」

「そうなんだ」

「指名してもらったんだけど、掛け持ってたから何も話せなくて…」

「マナブってのは私とユカが1番可愛がってる子だよ」

「へえ」

「あの子は将来、すごい男になるよ」

「ユミさんにそう言わせるのって大変なことですよ」

「キムもコマもいい瞳してるけど、マナブは別格だよ」

「お礼言っておいてください」

「連絡先、交換しなかったの？」

「キムラさんとコダマさんは、指名した女の子と交換してましたけど…」

「マナブは連絡先教えてくれなかったんだ？」

「ですね。だから私のを教えました」

「あの子ね、女関係でゴタゴタがあったから今は仕事一本だよ」

「キムラさんとコダマさんが、だから飲みに連れてきたって言うってた」

「あはは。あいつらしいよ」

「そういえば私、水商売引退するから、最後の日でも遊びにおいて

「よ」

「ぜひ！」

ユミさんに逢いに行くのがメインだが、彼に逢えると思うと胸が弾んだ。

私は寝ても覚めても、彼のことが頭から離れなかった。

ユイ 8

ユミさんが近々、キング店を引退するという話を聞いた。さすがに最終日は、ユミさんの客で入れないだろう。気まぐれに顔を出すことにした。

「今日、私とチハル、1時間くらい早上りさせて」「指名が入ってなければ、いいですよ」

チハルはキムラが指名したうちの店の女の子だった。

「チハル、指名が入ってなければいいって」

「指名が入ってなきゃって、私達のさじ加減1つなのにね」

「あはは。そうだよな」

指名客に早く帰ると言えばいいだけなのだ。

その日の私は、営業中、時計ばかりを気にしていた。

「どうしたの？今日は時間ばかり気にして」

「ちよつと用事があつて早上がりするの」

何人が指名客が来たが、全員に同じことを聞かれた。

「ありがとうございました」

25時には指名客の全てをチェックさせた。

すでにチハルは着替え終わっており、私は急いで更衣室に入った。

「お疲れ様、お先！」

私とチハルは、ユミさんと彼が居る、キング店へと向かった。

「ユイちゃん」

「何？チハル」

「支配人のこと好きになっちゃったんじゃない？」

「え！何で？」

「今のユイちゃん、初恋してる少女みたいだよ」

「男なんて要らないと思ってたのに……」

「胸がキュンとしちゃったんでしょ？ユイちゃん、可愛いね」

何も否定出来なかった。

プライドが邪魔してるのだろうか。

そんなことを考えるより、逢える楽しみの方が大きかった。

ただのキャバクラの支配人。

それがお店に客として来ただけ。

どんな顔だったか、どんな仕草をしていたか、どんな声をしていたか思い出していた。

キングの前まで来ると、満卓で入れない客が待合室で待っていた。

「すみません、ユミさんが居る店ってここでいいんですか？」

「そうなんですけど、ちょっとお待ちすることになります」

「構いません。待たせてください」

私とチハルが待合室に案内された。

ちょうど最後尾の客が店内へと案内されていった。

10分ほど待った頃だろうか。

「次長、イシハラです。取れますか？」

無線を使って、店内とやり取りしているようだった。

「あいよ」

「ウェイティングは？」

「キレイな女の子2人だな」

「ユミさんから聞いてます。案内してください」

「了解」

「お待ちせしました。店内にご案内します」

「いらっしやいませ！」

店内はこれでもかというくらいの大盛況だった。

「おはよう。店はどしたの？」

彼が私に気付いて、声を掛けてきた。

「おはようございます。暇だったんで早退してユミさんに逢いに来たんですよ」

「今、案内させるね」

私達は、テーブルに案内されると店内の様子を見ていた。

「ユイちゃん、暇だから早退したの？ユミさんに逢いに来たの？」

チハルの鋭いツツコミに言葉が出なかった。

「でもすごいね。売れてるお店って、こんな雰囲気なんだね」

「これはすごいね……」

確かに私達は、圧倒されていた。

チハルとの会話とは裏腹に、私はずっと彼を目で追っていた。ホールやリストのスタッフに指示を出す。

テーブル移動する女の子に声を掛ける。

彼を司令塔として、営業が回っているのが一目瞭然だった。

「支配人、リストまで」

店内の賑やかな声とBGMを割って、アナウンスが聞こえた。

「ユミさん、リストまで」

彼とユミさんが打ち合わせをしているようだった。するとユミさんが私達のテーブルへとやって来た。

「ユイ、お疲れ様」

「すごい盛り上がってますね」
「ごめん！指名8本掛け持ってた、顔出せないのよ」
「ええ！8本もですか？」
「支配人に相手させるから、終わるまで飲んでてよ」
「あ、はい」
「その後、ユカと飲みに行こう」
私にとっては、願っても無いことだった。

すぐに彼は私達のテーブルに来てくれた。

「ユイちゃんすいませんね。ビールでも持ってきてきましょうか？俺が持ちますよ」

「ユミさん8卓ってすごいね。じゃせつかくだからもらいまーす」
「支配人、リストまで」

「今ビール持って来させるね」
この前話せなかった分、ゆっくり話そうと思ったのに、彼はまた呼ばれてしまった。

「ユイちゃん、支配人カツコ良いね」

「いかにも仕事出来そうですってオーラが出てるよね」

私の連絡先を教えたが、あの後、彼からは連絡は一度もなかった。

『私なんて興味ないのかな…』

私は、この前以上の勇気を出して、彼を誘うことにした。

「ビールお待ち！」

「あの…」

「ん？」

このときの私は、顔や耳が真っ赤になっていただろう。
生唾を飲み込み、勇気を振り絞った。

「あの…今日終わったたらユミさんとユカさんと飲みに行くんだけど、支配人もどう？」

「いいね。でも俺終わるの遅いよ？4時くらいになると思っけど」

「ユミさんがもう酔っ払ってるから持つかどうかですね」

私はとりあえず、店の場所を彼に教えた。

「じゃとりあえず終わったら行くね」

「じゃ来るまで寝ないように待ってる」

約束を取り付けると、彼は再度、仕事へと戻って行った。

私の体が一気にクールダウンする。

「ユイちゃん、上出来。立派だったよ」

「泣きそうなくらい緊張した…」

営業が終わり、私とチハル、ユミさん、ユカさんで飲みに行った。

「ユイ、お疲れ様」

「ユカさん、お疲れ様です。ユミさんは？」

「今来るよ」

すごい音を立てて、ユミさんが降りてきた。

「どうしてユミさんって、ハイヒールでそんなに動き回れるんですか？」

「ハイヒール歴が違うよ。私クラスになるとヒール履いたまま100mダッシュ出来る」

「あはは」

「じゃ行くごうか。ユイ、ちゃんと店予約した？」

「しましたよ」

ユミさんとユカさんは営業中も飲んでいたこともあり、ここでも全開だった。

「ユイ、さっきから何を気にしてるの？」

「ユカさん、ユイちゃんは支配人を待ってるんですよ」

「ちよつとチハル！」

「いいじゃない。ユイちゃんが支配人を誘ったんですけど、まだ来ないですね」

「もう4時か…。もう来てもいいのにね」

そのとき、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「おつかれさ…ってユミさんパンツ丸見えですよ？」

待ち焦がれた、彼がやって来た。

「遅ーい！キムとコマも一緒か…まあ座んなよ」

「あ！ユイちゃんだ。この前はどうも」

「何でユイちゃんがここに？」

「どうでもいいから座れ！マナブはユイの隣だ！」

「何でマナブは座るトコ決まってるの？いいなユイちゃんの隣」

「ユイがマナブはまだかまだかってうるさいからだ！」

心の底から、ユミさんの仕切りに感謝感激だった。

ユイ9

ユミさんの強引な指示で彼は、私の隣に座った。

「ごめん。遅くなっちゃって」

「忘れてどこかに遊びに行っちゃったと思った」

今日の私と彼は、意外と前回とは違い普通に話せた。

意識した訳ではないが、自然にテーブルの下で彼の手を握った。心地良い、胸の痛みが増幅していく。

「ユイ、俺と付き合おう。振らないでね」

ドキドキしていた。

意中の彼に告白された。

「うん、よろしくね」

女の勘なのだろうか。

私は彼と今日、こうなるような気がしていた。

彼と逢って2回目。

もう何もかも彼が分かるような錯覚をする。

生まれて初めて味わう、幸福感に浸っていた。

「ユミさんユカさん！マナブが告白してユイちゃんと付き合っちゃった！」

「俺も聞こえてたーユミさんが主役なのにさー怒ってやってー」

「おめでとー！じゃあ飲めー」

彼はユカさんに勧められるがまま、何杯もイッキ飲みしていた。

私は彼の手を握ったまま、恥ずかしくてずっとうつむいていた。

ユミさんやユカさんが、私達の両サイドに座るともっと詰めると言った。

「コラ！カップルなんだからもつと引っ付け」

「キム、コマ！この2人、ずっと手を握ってるよ」

この後、店を出るまでずっと、みんなに冷やかされた。

「大丈夫？」

「俺、金払った？」

「とりあえず、私が立て替えといたよ」

「明日払うね」

「ねえ、マンションどこ？運転手さんに言わないと」

私はマンションの場所を聞き、運転手に告げた。

店の中でもタクシーの中でもエレベーターに乗っても、手をつないでいた。

こんな満たされた気持ちを味わったことがない。

気持ち、愛情、友情、信頼、信頼…。

彼と一緒に居るとそんなことは、どうでもいいと感じる。

私は、彼の前だと素直になれた。

部屋に入ると、2人でソファに倒れこんだ。

「俺ね…」

彼は初めて逢ったときから、忘れられない存在になったと教えてくれた。

私もドキドキしたと告白すると、俺もだと言った。

誰かが見ていたら、バカにされるくらい私達は『イチヤイチャ』していた。

彼とこうしているともうずっと前から一緒に居るような錯覚をした。

2人で1つのカップで飲み物を飲んだ。

2人で一緒にシャワーを浴びた。

そして2人は1つになった。

彼に抱かれている私は、幸せという以外の表現が見付からなかった。生まれてきた中で1番愛する人に愛されている。何度も何度も絶頂を迎えた。

翌日、目が覚めると彼は起きていた。

昨夜のことを覚えているか、試してみた。

所々、記憶が欠損していたが、重要なところは覚えていた。

これからずっと誰にも渡したくない、愛すると言ってくれた。

私にとって、最後の男になって欲しいと告げた。

休みだった彼に不動産屋まで付き合ってもらった。

「今月末でマンション解約してきた。転がり込んでいい？」

「もちろん」

道のと真ん中でも、彼は笑顔でキスしてくれた。

唇が離れた瞬間に私のポケットベルが鳴った。

「旦那だ：マナブくん、話があるの。帰ろ」

私は彼の手を握って、スタスタと歩き、彼の部屋へと向かった。

「実はね、私結婚してるの。もう1年くらい前に家を出てから逢ってないんだけどね」

「そうなんだ：え？今何て言った？」

「ちよつと電話借りるね。話してる間、手を握ってて」

彼の前では、良い女で居たいし、そう思われたい。

私は彼の女として、認めてもらいたい。

だから全てを話そうと思った。

「ユイ！」

「ユイ、俺さ……」

「好きな人に出逢ったから、約束どおり離婚届出して。じゃあね」
「分かった……」

あの声のテンションじゃ、オガタはダメなままだろう。
もうどうでもいい。

私には彼が居る。

彼と一緒に入れれば、お金も時間も何も要らない。

私とオガタのことを話した。

さすがに彼は驚いていたが、話を分かってくれた。

「本当に届け出すと思う？」

「明日、役所に行つて届けが出てなかったら刃物持つて刺しに行くわ」

「ナヌ？」

「私は本当に刺すつて、あの人が知ってるはずだから大丈夫」

翌日には、ちゃんと離婚が受理されていたことを彼に伝えた。

同棲をしてしばらくした頃、彼が女の子から相談されたといって、遅くに帰ってきた。

内容は、彼がキャバクラで働いていることをヤキモチ焼くといった話だった。

「私だつてヤキモチ焼くよ。今回の2人だけで話をしてたつても本当は嫌だもん」

「ごめんな。これからちゃんと連絡するようにするよ」

「知ってる？ 私マナブくんの連絡先知らないの？」

「ウソ？」

「私の教えた時、何て言ったか覚えてる？」

「教えたくなくなったら連絡してって」

「教えたくないから今まで連絡してこなかったんでしょ？」

「2回目逢ったときに付き合って、その次の日から一緒に住んでたから、うっかりしてたよ」

「ウン」

「ホント」

「じゃキスして」

「いいよ」

「愛してる？」

「愛してるよ」

子供みたいな会話だった。

男と女は、それぞれ異性に対して、ヤキモチを焼く。

本当に愛されている異性からのヤキモチというのは、心地が良い。そう思ったのは、彼が初めてだ。

私も彼には、初めてヤキモチを焼いた。

彼が浮気されたと想像すると、気がおかしくなりそうになる。

これが女が持つてるヒステリックな部分なのだろうか。

何分、こういう気持ちになったことがなかったので、私は素人だった。

しかし彼の仕事中の顔とプライベートの顔には、ギャップがかなりある。

仕事中は、近寄り難いくらいのオーラが出ている。

帰宅すると表情が一変し、言葉尻も柔らかくなる。

女はこのギャップにクラッと来る生き物なのだ。

彼をこれほど愛しいのかと思う気持ちに気付いた。

極力、他人との接触を避けてきた私。

他人が嫌いだっただ訳じゃない。

裏切られるのに疲れただけ。

でも彼は、ノックもしないで私の気持ちに入ってきた。

愛情というものを持って入ってきた彼。

もう彼と離れることはない。

女という生き物は惚れた男に全てを合わせるような性なんだろうか。

店の休みの曜日を彼に合わせた。

彼が吸っているタバコの銘柄を変えた。

彼と同じ水色が好きになった。

価値観や性格、口癖、仕草…。

何から何まで、自然と彼に合わす。

私は全く自然にそれをしていた。

ある日の営業終了後、店の女の子達とご飯を食べに来ていた。

「あれ？」

彼が部下と思われる男の子と肩を組んで歩いていた。

「ユイさんの彼氏じゃないですか？」

「そうだね。こんなところで何してるんだろう？」

「キングの系列店でエースってのが、すぐそこにありますよ」

「じゃミーティングかな」

彼達が曲がった道の先から、怒鳴り声が聞こえてきた。

「辞めて下さいよ！何の証拠があるんですか！」

「証拠？俺は警察じゃないんだよ！ふざけやがってこの野郎！」

「ケンカだ！警察呼べ！」

近くの飲食店の店主だろうか。

店員に警察を呼ぶように指示していた。

人垣の間から彼を見ていた。

すぐに駆けつけた警官に、彼を制止しようとしていた。

「止めないか！逮捕するぞ！」

「お巡りさん。逮捕するのはこの人じゃなくてあいつだよ」
キムラちゃんとコダマくんだ。

コダマくんが警官に何やら話していた。
彼の部下と思われる男の子が、警官から持ち物検査をされだした。
おそらく覚醒剤が出てきたのだろう。

遠目からでも検査キットを使っているのが分かった。

「4時55分。覚せい剤所持の現行犯で逮捕する！」
警官のその声は、はっきり聞こえた。

彼はキムラちゃんとコダマくんと、どこかへ歩いていった。
そこには涙を拭う、彼の後姿があった。

先にマンションへ帰っていた私は、彼の帰りを待った。

玄関から鍵を開ける音が聞こえる。

私はドアを開ける彼を玄関で出迎えた。

「ただいま」

みんなでご飯食べに行った帰りに見たこと。
騒ぎの中心に居たのが見えたことを話した。

「嘘付かれたのが、頭に來たんでしょ？」

「疲れたよ……」

「ね？少し飲もうよ」

彼は、女子寮で覚醒剤を使用していた女の子がいたこと。
コンドウという部下も使用していたことを話してくれた。
そして、彼も過去に使用歴があることも話してくれた。

「過去は過去、私は愛するあなたを信じてる。だから心配はしないよ」

「警察の方は大丈夫だったの？」

「ああ。ある意味、捜査協力者だったさ」

「そう……」

2人で薬物について話した。

彼は学校の先生でもなければ、警察でもない。

非合法でも個人で遊ぶ分には、肯定はしないが否定もしないという。ただ仕事をしている以上、他人に迷惑が掛かるのは必至だという。

その日、裏切られたショックからか、彼はすぐに寝た。

彼は立場上、私の何倍もの人間に裏切られてきたのだろう。

私もその彼を支える為に強くなるなくてはと強く思った。

私は過去に、車を買ってもらった客が居た。

もちろんその男以外でも、客以上の付き合いはしたことがない。

彼が車に乗っているところを見たことがなかったので、取りに行くことにした。

「駐車場？」

「うん。実家に置きっ放しなのね」

「このマンションは駐車場空いてるかな？」

「不動産屋行ってみようよ」

「分かった」

彼と私は、店休日。

日中、眩しいのを我慢して、不動産屋に行った。

「契約してきたよ。車取りに行こう」

実家近くの駐車場に着くと、日中の為、私の車を残して全て、出払っていた。

「これが？そう？ユイの？」

客に買ってもらったベンツのAMG、560SL。

さすがの彼も少し驚いていたようだ。

「買ってもらったってさ、これっていくらくらいするもん？」

「うーん…よく分かんない」
免許が無いという彼を助手席に寄せ、マンションへ戻った。

日頃、起きてない時間に行動していた為、帰宅すると仮眠した。
私は、彼の腕の中だと安心して眠れる。

精神的ゆとりが大きいのか、途中で目が覚めることがなくなった。

目が覚めたのは23時。

彼が先に起きて、トイレから出てきたところだった。

「腹減ったな…」

「お腹空いたね」

「この時間か。どこ行く？」

「タコスが美味しい店あるんだ。そこ行ってみる？」

私が高校のとき、ユミさんとユカさんに教えてもらった店だ。

「ビールでいいか？」

「うん」

「生2つとタコス2つ」

「ロカビリーでいい雰囲気のお店だね」

「でしょ？ユミさんとユカさんに教わったんだ。味も美味しいんだ」
「よ」

「お待たせ致しました」

ステーキ、サラダ、フルーツといったものが運ばれてきた。

「頼んでないんだけど？」

「あちらのお客様からです」

蘭三郎のママがご馳走してくれたみたいだ。

「ママ！ちよつと行ってくるね」

『蘭三郎』とは、駅の近くにあるオカマバー。

そのママは、私の高校の先輩だった。
昔から、中性的な雰囲気醸し出していた。
ニューハーフとなって、女も認めるほど美人になっていた。

「ユイ、久しぶりね」

「そうだね」

「アンタの彼氏？」

「ちょっとい出したら、ただじゃおかないからね」

「アンタを敵に回すほど、私もバカじゃないわよ」

「ユミさんとユカさんとは？」

「ああ、あのブス達ね。しばらく逢ってないわ」

「あはは、そうなんだ。彼が待つてるから行くね」

「遠慮しないで食いなさい。ホレ食いなさい」

「ママが遠慮しないで食いなさい。ホレ食いなさいだって」
彼はママに会釈をしてくれた。

「恐ろしく愛想がないな」

「え？今日は結構、機嫌良い方だよ」

しばらく飲んで食べてからチェックをした。

キャッシャーのところでもママの一团が居た。

「すいません。ご馳走になりました。ここで支配人をやっています
マイカワです」

彼は律儀なところがある。

挨拶をすると名乗って名刺を渡した。

「あらそうなの。私達これからお店だから。今度うちにもいらっし
やい」

彼とママは名刺交換をしていた。

この後、彼を取り巻く環境で事件が起こることになる。

彼の部下の逮捕からしばらくすると月例ミーティングがあった。いつもより早く起きて、出勤して行った。

その日の営業終了後、彼のポケットベルを鳴らした。

「お疲れ、どうした？」

「今日は帰り何時くらい？」

「コダマとキムラと飲みに行くから、少し遅くなるよ」

「そう」

「今日さ、店長に昇格したよ」

「それのお祝い？」

「それもあるけど、コダマが話があるって」

「ユイ、寂しくて死んじゃうかも……」

「あはは、おいで。行きつけのショットバー分かるよな？」

「うん」

最初は、彼の店長昇進をお祝いしていた。

コダマくんが、とあることを話し出すと3人の表情が変わった。

「タカツカサさん、覚醒剤やってんじゃないかなって思うときあるんだよ」

タカツカサとは、3人の公私共に兄貴的存在の人だという。

彼達は疑いを晴らす為に、タカツカサさんを飲みに誘った。

そこでイレズミを彫る途中の背中を見せられたという。

彼達は、絶対的な信頼を寄せていたタカツカサさんに問い詰めることはしなかった。

考え方や3人に対する気持ちは変わらない。

彼達3人が負い付き追い越そうとしている。

これに嫉妬心は無い。

逆に喜ばしいことだ。

今でも志は彼達と逢った時と変わっていない。

タカツカサさんは、そう諭したという。

彼がその話を私にしてくれてから数日後。

彼と一向に連絡が取れなくなった。

ポケットベルを鳴らしても、店に直接、電話しても彼と繋がることはなかった。

明け方になって、彼から電話があった。

「ユイ？俺。今、通り沿いの病院に居る」

「病院！」

「うん、帰ったら話す。少し遅くなるかも」

「分かった」

雰囲気からして、彼のどこかが悪くて病院に居る訳ではないらしい。彼からの連絡を待つことにした。

朝になって、彼は帰ってきた。

無断欠勤が続いていた、タカツカサさんの様子を見に行ったらしい。そこでオーバードースして、生死を彷徨っていたタカツカサさんを見付けたという。

一命は取り留めたが、警察が回復を待つて逮捕する旨の説明をされた。

「そう。大変だったね。寝れそう？今日はゆっくり休んで」

さすがの彼も涙を流していた。

部下と上司が、薬物に汚染されていたのだ。

私はそっと、彼の涙を拭うと強く抱きしめた。

翌日、彼は何事も無かったかのように、いつもどおり出勤して行った。

私も客との同伴の約束をしていた為、早めに出勤した。

「ユイちゃん」

「キムラくん、おはよう」

「マナブ、帰ってきた？」

「うん、朝ね」

「ううん、今日だよ？」

「さっき家出てきたとこだけど…」

「次長が休んでいって」

「そうなんだ。連絡とってみる。ありがとう」

彼に連絡を取った。

「今日帰らせてくれたんだ？キムラくんとさっき、偶然逢ったらそんなこと言ってたから」

「ああ。次長がね、今日は休んでいってさ」

「分かった。早く帰るようにするね」

彼のことが心配で頭から離れなかった。

「今日、早めに帰れそうなら上らせて」

しかし、こんな日に限って指名客がたくさん来店した。

「何だか、今日のユイちゃん元気無いね？」

「ん？そんなことないよ」

心配事があることは、周囲の人間に分かっていた。

私はこのようなとき、いつでも鉄仮面で居れた。

この仕事に関しては、割り切っていたから。

のほざだった。

私の気持ちとは裏腹に、その日の営業は忙しかった。

店自体は暇だったが、私の指名客が閉店まで途切れることはなかつ

た。

営業終了後、送り待ちをせずにタクシーで帰宅した。

「ただいま！」

鍵を開けると彼が少し仮眠をしていたのか、寝起きだった。

「ご飯食べた？何か食べに行く？」

「いや木村と児玉が来るってさ」

「お腹空かない？大丈夫？」

「うーん。食欲が無いよ…今何時？」

とりあえず私は、彼に詫びようと思った。

「3時前。早く帰ろうと思ったけど指名が重なっちゃって。ごめんね」

「いいよ。俺は大丈夫だから」

気丈に振舞うことが常な彼も、さすがに今回は参っているようだった。

部屋着に着替えた頃、インターホンが鳴った。

「木村と児玉だ。いいよ、俺が出る」

「お疲れさん。どうせ何も飲み食いしてないんだろ？」

「お疲れ。ビールもたんまり買ってきたぜ」

彼は2人を部屋へ招き入れた。

彼には、どんなときにも駆けつけてくれる仲間が居る。

歳こそバラバラの3人だが、すごい結束力を感じる。

3人のうち、誰かが困ると自然と集まるような感じだ。

私はこの3人を見ているのが好きだった。

「おーユイちゃん。ごめんね、お邪魔するよ」

「飲み物も食い物も4人分買ってきたよ。ユイちゃん今日もキレイ

だね」

「ありがと。木村くん。児玉くんは言ってくれないの？」

私はこういふ彼のフィールドに居るとき、極力、前に出ないようにしている。

私の思う、男の立て方。

今回のように彼が落ち込んでいるときに、彼の仲間が来た。

私はそれらに対して、一切口を開くことはない。

そこは彼と仲間の独壇場で良いと思っっているからだ。

彼と仲間の邪魔になりたくない。

私が出来るとは、そつと彼の手を握り続けることくらいだろう。

キムラくんやコダマくんは、今回の事件のことは口にしなかった。

気遣いであり、優しさだろう。

2人の言う冗談にも、次第に彼は笑顔を見せるようになった。

これが私の知らなかった光景、友情というものなのだろう。

このような仲間が居る彼を、私は惚れ直す。

私が知らない世界でも、彼が知っている。

彼と私は一体であり、一対なのだ。

彼は私であり、私は彼なのだ。

全ての感情を共有したい。

私にとって、最後の男なのだから。

朝方になってインターホンが鳴る。

「誰だよ？こんな時間に」

「私出る。座ってて」

彼やキムラくん、コダマくんを制して、インターホン越しに対応する。

「はい」

「こんな時間に申し訳ありません。警察ですが、マイカワさんはお

いのですか？」

私の表情は一変する。

「ユイ？どした？誰だ？」

「警察だって。マイカワさん居ますかって…」

私に代わり、彼がインターホンで応対する。

「今、ドアを開けます」

彼がドアを開けると警察手帳を見せる刑事の姿があった。

タカツカサさんの件だろう。

キムラくんとコダマくんが病院から、失踪した話を彼にしていた。彼も警察が尋ねて来ているのは、そのことだと分かっているようだ。

「お話ししたいことがあるんですが、内容が内容なんでドアを閉めてもいいですか？」

「会社の仲間と彼女が居ますが玄関の中ならいいですよ」

私、キムラくん、コダマくんが玄関まで行った。

「ここに居る人間は鷹司の件は知っています。宜しければどうぞ」

神妙な面持ちの2人の警察官は、静かに口を開いた。

「タカツカサは本日21時40分、病院からの通報により、病室から失踪したことを確認しました」

「ええ。店から報告の連絡がありました」

「先ほど4時10分頃、神奈川県にあるゴルフ場が管理する駐車場で、残念ながら遺体となって」

「発見されました。死因は一酸化炭素中毒です」

「え？」

彼だけではない。

そこに居合わせた人間が絶句した。

私は、大きくため息をつくと両手で顔を押しさえ、その場にしゃがみ込んでしまった。

タカツカサさんの話は、彼からよく聞いていた。

キムラくんやコダマくんのように、彼の認める数少ない人間だ。その彼の先輩が死んだ。

警察は持ち物から本人であると、ほぼ断定していた。

警察は通報者でもあり、事情を詳しいと思われる彼を身元確認者として選んだのだった。

「それは俺達じゃよろしくくないですか？彼の彼女をこんな状態で一人にしておきたくないんで。」

俺達の会社の上司でもあるんですよ」

私のことを思ってくれてのことだろう。

キムラさんとコダマくんが身元確認をしてくれると言い出した。

「悪いな。2人とも頼むよ」

「いって。ユイちゃんの側に居てやってくれ」

その彼達が警察車輛で向かってから、小一時間経過した頃、電話が鳴った。

「分かった」

報告によると自殺として間違いないらしい。

助手席の足元には、使用済みの注射器があり、腕には新しい注射痕があったという。

排気を車内に取り込んだので、一酸化炭素中毒。

「惨めだな……」

兄貴と慕う弟分が3人も居て、信頼できる社長も居たはずなのに。彼は電話を切ると一言つぶやいた。

「ユイ……」

「はい」

『どうしてこうなっちゃったんだろうな……お前らの前でカッコ付けていたかったよ』

最後に逢ったとき、タカツカサさんは彼にそう言い残したという。

こんなとき、良い女というのは彼をどうやって支えるのだろう。

何も思いつかなければ、上手な言葉も見付からない。

部下と上司に裏切られ、果ては自殺。

彼のダメージは計り知れないだろう。

ここで私が彼の足手まといになるのだけは避けたかった。

私はそんな彼のそばを離れなかった。

彼は、1度も涙を見せることはなかった。

私や周囲の心配とは裏腹に、彼はとても気丈だった。

1ヶ月ほど経った頃、彼の表情から曇りが無くなる。

「いつまでも立止っててはいけない。これからずっと走り続けていく」

彼は私に力強く語った。

社長と飲みに行くと言っていた。

そこで何かキツカケをもらえたのかもしれない。

今回の件で、私が無力だったことに落胆した。

『私は彼の為に何も出来なかった』

そんな想いがどんどん膨らんでいく。

彼のことを想う気持ちが大きいほど、悩みも大きくなった。

悪い想像を膨らませれば、膨らませるほど落ち込んだ。

彼と別れる夢を何度も見ては、泣きながら彼に抱きついた。

眠れない夜が何度もあった。

彼の寝顔を見ながら、何度も泣いた。

この世で一番愛している人の役に立てない私とレッテルを貼った。

「ユミさん、相談があるの…」

「ユイ?どうしたのアンタ、その暗い声は?」

「もうどうしていいか、分かんない」

ユミさんは、すぐに時間を取ってくれた。

「なるほどね」

「ユミさん、どうしたらいい？」

「アンタがそうやって悩むことで、あの子の負担になったらどうするのよ？」

「だって…」

「ユイってそんな繊細だったのね」

「今、茶化されてもそれに乗れない…」

「きつとマナブは、アンタの異変に気が付いてるわよ」

「え？」

「あの子の眼って、半端じゃないからね」

「そんな…」

「ユイが言ってくるのを待ってるか、タイミングを計ってるかどうちかだね」

「迷惑掛けていることを彼が気付いてる…」

「バカ。あの子に全てを委ねなさい。私が保証するから」

「あ、はい…」

「その前にマナブを信じてればいいのよ」

「そうですよね…」

しばらくして、ユミさんの予言は的中する。

「ユイ、最近元気ないな」

「うっん。大丈夫よ」

ユミさんの言うとおりだった。

その頃、私の頭部に500円硬貨くらいの円形脱毛症が出来た。

これを知ってのタイミングかどうか分からなかったが、私が打ち明ける寸前だった。

私は恥を忍んで、彼に打ち明けると病院へ付き添ってもらえるよう、頼んだ。

「ユイにもそんな心配掛けてたとはな…。ごめんな」

「私の方こそ、ごめんなさい。何も力になれなくて、何も言えなく

て」

「ユイはずっと俺のそばに居るだけでいい。存在こそが俺の支えなんだよ」

私は彼の言葉に、涙が止まらなかった。

力になれず、彼と離れるのだけは絶対に嫌だった。

泣き止まない私を、彼はそっと抱いてくれた。

「ずっとそばにおいてね……」

「ああ、運命をそう信じてるよ」

通院した翌日から、彼は特別な優しさは無かった。

彼はいつもどおり、私に接してくれた。

私の円形脱毛症を特別扱いしない、彼の優しさが嬉しかった。

それはすぐに完治することとなった。

彼はどんなときもストレートに表現してくれる。

喜怒哀楽も私の前だけ、ストレートだ。

殻に閉じこもっていたのは、私かもしれない。

彼を愛している、信じているというセリフは、キレイことだった訳じゃない。

その気持ちは、誰にも負けることはない。

しかし目に見えて、成長していく彼を見て、焦ったのかもしれない。

私は、彼相応の良い女になることを決意した。

ユイ13

とある営業が終わって、店の送りを待っていた。彼からポケットベルが鳴る。

「電話貸して」

スタッフが子機を持ってきてくれた。

「もしもし」

「俺、今日暇か？」

「どっか行くの？」

「あーこの前のママのところだよ。営業中に電話掛かってきてさ」
「分かった。じゃそっち行くね」

「電話ありがと！」

「ユイちゃん、彼から？」

「うん、送り要らない」

「分かりました」

「じゃ、お疲れ様！お先ね」

私が働いている店から彼の店までは、駅を挟んで10分ほど。私の足だと15分くらいの位置関係にある。

彼の店に着くと、ドアをノックして入った。

「お疲れ様です。ユカさんやつほー」

「おお、ユイ！」

送り待ちだろうか。

ユカさんがソファに座っていた。

「ユカさんごめん。仕事終わるまで相手お願い」

「すっかり元気になったみたいね」

「ユミさんから聞いたんだ。もう大丈夫ですよ」

「マナブが何とかしたでしょ？」

「うん。ユカさん、今日暇？」

「店長と出掛けるの？」

蘭三郎のことを話した。

「いいわよ。久しぶりにからかいに行こう」

私達は、ユカさんと彼の部下であるイシハラさんと蘭三郎へ向かった。

「いらつしゃいませー」

素晴らしいバスボイスが聞こえる。

「4人入れる？あとママはいる？」

「ママは少し遅れて来るわ！何か問題ある？」

「顔近いつて！」

彼が後退りしている姿を見て、私とユカさんは笑った。

ユカさんは『久しぶり』と表現していた。

ユカさん、ユミさんとママは私の高校の先輩だ。

2人は店に来たことがある雰囲気だった。

彼が飲み物を頼むと、私達は乾杯した。

「あら、店長来てたの？後で顔出すわ。ホレ飲んでて」

しばらくするとママがやってきた。

「あら、ユカとユイも居たの？輝きが無いから気がつかなかったわ」

「相変わらずね、ママ」

ユカさんは、ママの嫌味にもサラッと受け流していた。

「ユイはこの前に逢ったから知ってたけど、ユカさんもママと知合いななの？」

「高校の同級生よ」

度重なるユカさんのサラッと云ったセリフに彼達は大笑いした。

さらに同級生でもある、ユカさんとママのやり取りは続く。

「この2人が同じ高校に居たんだけ？ってことはユミさんも？」

彼は興味津々で、ママに聞いた。

「あーあのブスね。1年と3年のとき同じクラスだったわよ。ムカつくのよ、ユミとユカは。」

あの頃から良い女だね。今でこそこんなブサイクに大暴落してるけどね」

「あの頃はママ、普通の男だったからね」

「気持ちは女だったわ」

彼とイシハラくんは、この手の店は初めてなのだろう。お腹を抱えて大爆笑していた。

「ママこの前のお礼に何かボトル入れてよ。何ある？」

彼は義理堅い。

この前のお礼を忘れずにいた。

「とりあえずXOデラックスでももらおうかな？」

「アンタ安いの入れるわねー。店長やって儲かってるんでしょ？」

「じゃへネシーある？」

「はい！へネシー一本頂きました！」

ママはへネシーをゲットすると、ドスの聞いた声で言った。

このようなやり取りを私が店出やると、二度と客は来ないだろう。でもこの手の店では、高い確率で笑いが取れる。

「しかしユイのおっぱい小さいわね。アンタ本当に女なの？」

「うるさいなー。どうせママなんか食塩水でしょ？」

「シリコンよシリコン！」

その夜の彼は、本当に楽しそうにしていた。

「チェックお願い。あとタクシーを3台頼んでくれない？」

「もう帰るの？まだ5時よ」

「いやみんな明日も仕事だからさ」

「また来なさいよ」

「分かった。また来るよ」

チエックシートを彼が受け取った。

ユカさんが彼に一万円札を差し出す。

「いくら？私も出すよ」

「いやユカさんは俺らが誘ったからいいよ。イシハラもいい」

私は彼に耳元でこそっと話し掛けた。

「私が半分出すよ」

「タクシー代頼むよ。俺も8万ちようどしか持ってない。大入りの後で良かったよ」

私とユカさんが居るのにも関わらず、この金額には力チつときた。

帰りのタクシーの中で、彼もいささか憤りを感じているようだった。

「いくらなんでも高過ぎるよな？」

「うーん。私も客のアフターで何回か行ったことあるだけでお金払った事無いから」

「お礼して、筋は通したからもうだろ」

確かに彼が怒るのも無理ない。

彼は筋を通しに行っただけなのだ。

しかし彼は接客や営業について、かなり勉強になり収穫があったと言った。

常に情報のアンテナを張っており、収集することに長けている。

これが彼の成長の源なのだろう。

自分でも情報過多がちようど良いと言っていた。

彼は知らないものがあるのを嫌う。

だからどんな場面でも、貪欲に情報収集をしようとする。

店の女の子からの相談も親身になる。

これらの全てが自分の礎になると考えているからだ。

彼から発する年齢不相応な言葉は、この膨大な情報量から来るのだ。

また彼の逸話で面白いものがある。

テレビなどを見ていると、彼はコントを嫌う。

コントはストーリーこそあるが、キャラクターなのだそうだが、だから彼は漫才を好む。

漫才の独特なテンポと間が接客業にとって重要だという。

過去にあった漫才ブームでの、高速なやり取り。

現在、数少なくなつた漫才のダラダラしたやり取り。

彼はどちらにも素晴らしいと絶賛する。

彼曰く、漫才はネタ半分、テンポと間が半分だという。

この話は私にとっても、興味深かった。

「私の接客も人によってはああいう感じになるときあるよ」

「そのの？俺と初めて逢つたときはそうじゃなかったじゃん？」

「胸がキュンとなつてそれどころか話も出来なかつたもん」

「可愛いじゃない」

彼にキスをしたとき、タクシーの運転手と目が合った。

「あのーどちらまで？」

行き先をまだ言っていなかった。

2人がイチヤイチャし、キスをしたのも一部始終、運転手に見られていた。

高校の先輩でもある蘭三郎のママ。

みんなで遊びに行った翌日も彼の店に連絡がいったみたいだ。

彼の帰りが遅かったので、私は部屋の掃除や選択をしていた。

「ただいま」

「おかえり。気持ち良さそうじゃない。飲んでたの？」

「今日も店に電話があつて、イシハラと蘭三郎に行ってきたよ」

「そうなんだ」

8万も取られた翌日。

彼は断つたらしい。

しかし強引に誘われた為、顔を出したという。

前日と違い、同じボトルをプレゼントされ、会計は100000円しかしなかったらしい。

「ママに気に入られちゃったんじゃないの？」

「ユカさんと同じこと言ってるよ」

「ハッキリしておいた方がいいよ。完全に今日の話じゃ落とそうとしてるんじゃない？」

「いやいや。そうであっても俺はユイが居るから。てか向こうは女じゃないし」

「私もまさかママに彼が盗られるとは思ってないけどさ」

ママの性格を知っている。

嫌な予感はしていた。

毎晩、彼は誘われるようになっていた。

2回目以降は、ママのおごりになった。

彼は借りを作りたくない、払おうとしたが受け取らなかった。それが悪いと思つた彼は、誘われると顔を出さざるを得なかつた。

そんな状況の中、私と彼は店休日にコートを買ひ出掛けた。

「俺のコートの方、見てくるわ」

「えー！分かつた…すぐ行くね」

彼は買ひ物が好きじゃない。

私が選ぶのが長いからだ。

彼を待たせまいと急いで選ぶと会計を済ませた。

買ひ物袋を持つた彼がこちらに向かつてきた。

「もう選んだの？早いね」

「ママに買つてもらつた…」

「あちゃー。これは完全にハマつてるね。いいじゃないもらつとけば？」

「おいおい。このレザーコート20万もするぞ」

「ユイと一緒に住んでるつて教えてあげた方がいいよ。こんな良い女が居るんだつて」

「そうだな。ユイは良い女だ」

「本当にそう思つてるの？」

「今すぐここでキスしろつて言われてもちゃんと出来るよ」

「じゃ早くして」

確かに彼は参つてゐるようだつた。

実直な正確なせい、ママの執拗な誘いやプレゼント攻撃に困つていた。

ギブアンドテイク出来ない、一方通行な付き合いが嫌いなのだ。

この地域の水商売で名を馳せる以上、トラブルは避けたいとのことだつた。

「ユイ、今日は真つ直ぐ帰る？」
「キムラとコダマとイシハラと出掛ける」
「いつものシヨットバー？」
「先に向かつといて」
「分かつた」

彼はミーティングと称して、ママからの誘いを断っていた。

店に入ると常連となっていた私にマスターが声を掛けてきた。

「ユイちゃん、いらつしやい」

「おはよう、5人かな？」

「マナブ達？上使つちやつて」

「ありがとう」

みんなの飲み物を頼むと、ちょうど彼達も来た。

彼はママのことを話し出した。

20万もするコートを買ってもらったこと。

今日、ロレックスを買ってもらったこと。

時計を手渡されたとき、私の存在を話したらしい。

ママは彼に私と別れてと懇願してきたという。

もちろんそれに対して、断固拒否してくれた。

「そつかーそんなことになつてたのか」

「一言言ってくれば、俺達に分散できたかもしんねえな」

「ううん。ママはそんな生易しいもんじゃないわよ？」

「コートと時計どうすつかな」

コートと時計で100万相当するだろう。

彼は処分に困っていた。

「もらつとけばいいんじゃない？」

キムラさんとコダマくんがニヤニヤしながら、そう言った。

彼は少し笑った。

「ユイ、俺イシハラと返しに行くわ。どっかのお姉ちゃんならもら
つちゃうんだけどな」

「私も一緒に行く。いざとなったら私がママをやつつけるから！」
私の言葉に偽りは無い。

彼を守る為なら、相手をやつつける。

「ユイ…ケンカしに行くんじゃないから大丈夫だよ。だからついて
来なくていいよ」

「マナブくんを守る！私キレたらどうするか分かんないだから。殴
り込みよ！」

「分かったけど、刃物は持ってこなくていいからね…」

「こんなにお前のこと想ってくれてんだから連れてってあげれば？」
キムラくんとコダマくんのナイスフォローが入った。

彼は思いたったら、すぐに行動に移す。

ショットバーを出るとタクシーに乗り込み、蘭三郎へ向かった。

「イシハラ、今日は飲まずに帰るからな」

「承知してるっす」

「お前、空気読めないからな。連れてきたのは失敗かな…」

「んなことないっすよ。店長に何かあつたら俺が盾に」

「お前に守ってもらうほど、老け込んでないよ」

「イシハラくん、大丈夫。ユイが居るから」

タクシーは15分ほどで、蘭三郎に着いた。

彼は私とイシハラくんを、前に出るなと背中に居させた。

店の外に連れ出すと、ママから話し出した。

「ユイと来てるっていうのは、そういうことね」

「ママ、うちの人は優しすぎるのよ。もらった物も悪いから返した
いてね」

「それはアタシが夢見させてもらったからプレゼントよ。これからはユイにちゃんと買って

もらいたくないさい。この子はこれからなんだから。身なりもちゃんとさせないかね」

「分かった」

「ユイが出てきたらしようがないわ。アンタと揉めようとも思っていないから。」

ママは私の主張を素直に聞き入れた。
揉めるつもりも無いと。

ママやユミさん、ユカさんから言わせると私はじゃじゃ馬らしい。学校で同級生、その男と揉めたもの有名だった。

何より、刃物を奪って男を刺したのだから。

この一件以降、私と揉め事を起こそうとする人間は居なかった。

ママもこの噂を知っているのだろう。

私に来たら、しょうがないと言った。

私としては、必死だった。

やっと運命をとにも出来る、信頼出来る男と出逢った。

それをニューハーフに取られたら、目も当てられない。

学生時代、キャバクラ嬢としてモテたプライドもある。

女というのは、惚れた男に尽くすが、プライドも持ち合わせるのだ。

彼にその気が全く無かったことに、安心はしていた。

しかしママは彼や私にも思いつかない、驚きの行動に出ることになる。

この業界でのクリスマスといえば、イベントとしては成り立たない。18歳〜30歳くらいまでの、女の子が夜仕事をする。彼氏が居るからと見栄もあるが、出勤したがないのが常だ。

街が師走の賑わう頃、店としては何日も前からシフトに苦しむ。私の場合は、彼と時間帯が合う為、必然的にシフトを入れる。

「ユイさん、助かりますよ」

「いいよ。でも彼が休みのときは、絶対に休むからね」

「分かってますよ」

常に20名ほど出勤している店がこの2日間に限っては、3分の2くらいになる。

若い子にとっては、大事なイベントの日になる。

主婦達は、家族に時間を割くことになる。

出勤する女の子は、純粹に稼ぎたい子か、彼氏も居ない暇な子だ。

「イブに出勤するってことは、ユイちゃんは彼氏居ないの?」

冷やかしのなか、嫌味なのか、必ずこう聞く客が居る。

常連客でアフターも誘ってこない客には、彼の存在を話す。

やりたい一心で口説きに來てる客には、彼の存在を隠す。

私はそのように使い分けていた。

彼は客とのアフターに嫌な顔をしない。

仕事に関しては、お互いプロとしての意識を持つという話だ。

女心としてはヤキモチや束縛が欲しいところだが、彼の仕事への考えは尊敬に値する。

最高の仕事をして、最高のギャラを手にする。

強いて言えば、それらが夢を売る商売だと。そして自分達が夢や目標を追い掛け続ける。彼はそれらに対して、曇りが無く純粹なのだ。

「ユイの店は、クリスマススの出勤どうだ？」

「3分の2くらいしか出ないみたい。キングは？」

「イシハラにもし定員割れしたら……ってプレッシャー掛けたよ」

「あはは」

「今のところ、ちゃんとシフトは足りてるな」

「そうなんだ。ねね、イブは何か予定あるの？」

「仕事終わってからは、ユイに時間充てないとまずいだろ」

「当然！」

イブの日を数日後に控えた夜、彼から連絡があった。

「蘭三郎のママから連絡があった」

「何だつて？」

「最後にデートしてくれってさ」

「1人で行くの？」

「まさか。イシハラもボディガードとして連れて行く」

「イシハラくんがボディガードになるのかな……」

「微妙だな」

このやり取りの後、彼と翌朝まで連絡が取れなくなる。

いつもは朝6時くらいまでには帰宅する。

しかしこの日に限って連絡も無ければ、帰宅してこない。

嫌な予感的中することにならなければいいが。

ベランダから、外の様子を眺めていた。

7時を回ると通勤や通学の人で混雑する。

何度もポケベルに連絡するが、一向に折り返しはなかった。

私は眠れず、彼を心配し、待ち続けた。

朝の9時頃になって、玄関のドアに鍵を挿す音が聞こえた。

「ママね？何かされたの？」

彼の姿を見るなり、涙を流して抱きついた。

彼とイシハラくんは、睡眠入りのコーヒーを飲まされたという。

ホテルに連れ込まれ、イシハラくんと共にイタズラをされたらしい。

「許せない……」

「ユイ、今回は俺とイシハラが油断した結果がこれだ。俺が後始末をつけるよ。もう女とは思わない。睡眠薬なんか使いやがって」

「分かった！信じてるから」

「心配させないようにするから、寝てな」

さらに私の嫌な予感が途切れることはなかった。

「ユミさん……」

ユカさんはこの時間寝ているはずだ。

ユミさんなら、何か分かるかもしれない。

「もしもし」

「ユミさん、こんな時間にすみません」

私はユミさんに、事の一部始終を話した。

そして彼が血相を変えて、仕返しに向かったことも。

「私にも責任の一部はあるのよ」

ユミさんは彼から相談を受けていたらしい。

その中でユミさんは、結果的には違うアドバイスを送ってしまったという。

「あの子は優しいからね。すぐ調べるから待つてな」

「うん、お願いします」

ユミさんからの折り返しの電話はすぐに鳴った。

「ユイ、思い出したことがあるんだけどさ……」

ユミさんとユカさんは、ママの住んでる家に行ったことがあったという。

ユミさんの言う家は自宅ではなく、ママの親が仲が良い人の家らしい。

そこはヤクザの親分の家だという。

「ユミさん、何とかその人に連絡入れて」

「話してみるよ」

「うん、すぐに折り返してね」

時間にして5分くらい。

そのときの私は、その5分が永遠にも感じられた。

「ユミさん！どうだった？」

「話だけは聞いてやるって」

「だけ？」

「相手はヤクザの親分よ？それだけでもラッキーだわ」

「何ともなつてないじゃない！」

「待つてユイ」

ユミさんとはかく話は聞いてくれと頼んでくれた。

そして彼の話になんか納得がいかなければ、好きにしていと。

「あの子が無傷で帰って来れると信じてるわ」

ユミさん同様、私も彼の帰りを待つしかなかった。

彼が帰ってきたのは、お昼近くになってからだった。

「ただいま」

彼は無事に帰ってきた。

「無事で良かった……」

「ユイが動いてくれたんだってな」

「じつとしてられなかったから」
「ユミさんのところにも寄って来た」

彼は予想通り、正面から家を訪ねたという。

親代わりだと名乗った、ヤクザの親分から条件を言われたという。

「店を閉めて、商売もさせない。俺らの前に一切姿を見させないってね」

「何て答えたの？」

「それじゃ意地を通せないって」

「やめてよ…何かされたらどうすんの？」

「店も商売も辞めなくていいって」

「うん」

「商売ではある種、尊敬もしてるってな」

「でも話がついているのにその行為は許せないって？」

「うん。ワビさえ入れてくれれば、引くってな」

保身の為ではなく、真っ向からの本音をヤクザの親分が受け入れてくれたという。

「ユミさんから連絡あったことも、その場で聞いた」

「うん」

「ユミさんからユイの話も聞いた」

そういうと彼は心配し続けた私を強く抱きしめてくれた。

「ユイ、心配掛けて悪かったな」

彼は若さゆえの無鉄砲な部分がある。

筋が通らなかつたとはいえ、ヤクザの組長宅に押し掛けたのだ。

私は彼の行動を止めることはしなかった。

彼と一緒になら、地獄に墮ちるのも天に昇るのも本望。

しかし彼には運がある。

未来に向かって、光り輝く強運を持っている。

私はその彼のそばに居続けたい。

ユイ16

クリスマススイブの日。

私と彼はいつも通り、出勤して行った。

街は師走が駆け抜けていた。

しかしその日の営業は散々だった。

客入りは悪くなかった。

女の子の出勤が足りなかったのだ。

1人で来店する客は、店側の判断で入店を断った。

目先の売上を確保したい、店側の戦略だ。

彼が以前、私に話してくれたことがあった。

出勤数と店内客数の最適な割合。

満卓時に25人の客が居れば、女の子は20人くらいでいいという。

客からすれば、マンツーマンが当たり前と思う。

店側からすれば、このマイナス5人が1番利益を生むところだという。

ただ1名の客を断ることほど、店の名声を落とすことはないらしい。

1名で飲みに来る客でフリーは稀だ。

ほとんどの1名で来店する客は常連といっても過言ではない。

それを出勤数によって、入店を断るのはもってのほかだと彼は言う。

飲み会帰りで一見客の団体は、ほとんどがリピーターとならない。

今日の営業は、そのリピーターにならない客を入れていた。

もちろん、終礼時に女の子からクレームが多数あったのは言うまでもない。

彼は損して得を取る客は居るといふ。

それを見極めるのが、男子スタッフであり、店舗長の仕事だと言っていた。

今後に繋がる客を見極め、女の子に稼がせ、店の売上を上げる。

これが店舗長としての責任だといふ。

「せっかく営業電話して、来てもらってるのに入れないってどういふこと！」

「客を呼んでのに指名がゼロってどういふ営業してんのよー！」

「頼み込まれて、出勤してんのに稼げないじゃない！」

みんなの不満は最もだった。

私も被害者の1人で、常連客を帰された。

女の子主体でやってきたこの店もここまでか。

私達の意見を取り入れ、それらを営業に反映させていた。

その分、男子スタッフが成長していなかったかもしれない。

どんなに女の子が頑張っても客を呼んでもこれなら2度と来ないだろう。

数名の客を持っている女の子とそれらをヘルプする女の子。

これらが微妙なパワーバランスで営業が成り立ち、売上を上げてきた。

客は離れ、稼げなくなった女の子達は辞めていくだろう。

売上が上らない店が潰れるのに時間は掛からない。

怒声飛び交う終礼に付き合うつもりは無く、私は無言で店を出て行った。

うちの店でも彼の居る、キングの話はよく耳にした。

良い女の子達が揃っており、出勤も安定している。

いつ行ってもちゃんとした営業をしていると。
また男子スタッフがすごい仕事をするとも聞いたことがある。
そのスタッフの長である店長が、仕事に対して全く妥協しないとも。
この地域で一番有名な店長であるとも聞いた。
男子スタッフはおるか、女の子、客にまでその名を轟かせていた。
その噂の本人が、私の彼だと気分が良いものだ。

彼とは、シヨットバーで待合わせしていた。

「あれ？ずいぶん早いよね」

「ああ、さすがに今日はみんな早く帰したよ」

私は店であったことを彼に話した。

「ユイ、店というのは全て男子スタッフで決まるんだよ」

彼は理想と夢を語ってくれた。

店とは仕事ができる男子スタッフが居ないと、良い売上が出ない。
もちろん仕事ができるスタッフが居なければ、全ての従業員が稼げない。

スタッフが見る目があれば、良い女の子を育てられる。

見る目はスタッフが仕事をこなしていく中で、養われるという。

「店というのは、失墜するのは一瞬だからな」

「そうだよな」

「ユイ、その店はヤバイかもな」

「いつ辞めてもいいもん」

「そうだな」

そして彼は夢を続けてくれた。

「俺は近い将来、キングを辞めて独立する」

「やっぱり？」

「やっぱりって？」

「目標や夢を持って、仕事してるように見えるもん」

「あはは。そうか」

彼が独立という言葉に出したのは、初めてではないだろうか。私がいっ辞めてもいいというのは、そんな彼を支える為だ。

「そういえば、イシハラに女が出来たんだよ」

「そうなの？」

「ユイにはちゃんと置いておく」

「何？」

「その子は少し俺と付き合ってたことがあるんだ」

「過去のことは気にしないから大丈夫」

「そっか」

彼のどんなことも伝えてくれるところが好きだった。

過去の女性遍歴を聞きたくない女が普通だろうが、私は彼の全てを知りたかった。

彼は私のことについて、自分から聞くまで喋らなくていいと言った。本音を言えば、少しくらい彼にヤキモチを焼いて欲しかった。

私がこんな気持ちになるのは、彼が初めてだった。

とある夜、彼は疲れ切って帰ってきた。

「いやあ、疲れた！」

「ご飯出来てるよ」

「大晦日は忙しいんでしょ？」

「ああ、間違いないな。でも25時で閉めるよ」

「うちの店は定時までだね」

「働いてる人間には、仕事の強弱が必要なのにな」

彼は働いている人の気持ちにもなれる人物だった。

現場に近くて、経営者にも近い考えをも持ち合わせている。

さらに彼は、女の子目線でも居てくれる。

彼のような考えを持って、仕事にあたっている人間は数少ない。

だからあつという間に出世して、業界に名を轟かせているのだろう。その彼のもとに取材要請が入ったと教えてくれた。

「そういえば店に取材したいっていう媒体から連絡あつてさ」
ナイトレポートという夜の飲食店情報や風俗店の紹介している新聞社から要請があつたらしい。

ナイトレポート、通称ナイレポ。

この業界では圧倒的に有名な情報誌だ。

店側から宣伝にと、取材に来てくれといってもナイレポ側が良いと判断しないと取材に来ない。

話題性、客入り、口コミ等の好条件が揃っていないと取材には来てくれない。

それほど、敷居が高い情報誌なのだ。

必然的にナイレポに掲載された女の子目当ての客は増える。
相乗効果で店の売上は、爆発的に伸びる。

彼の店に取材に来るのは、必然であつて偶然ではない。
今のキングは、彼がここまでに作り上げたのだ。
さらに私の自慢の彼は、躍進していくことになる。

クリスマスイベントも終わり、年末の繁忙期の真っ只中。街はイルミネーションで彩られ、一際煌びやかになっていた。人々が行き交う交差点は、夜遅くまで混雑していた。

彼や私も多忙を極めていた。

クリスマス後から、晦日や大晦日までは1年で1番売がある時期。心身ともに疲れのピークとなる。

そんな中、私は体に異変を感じた。

生理が来ない。

確かに私は生理不順で、周期が明確ではない。私は確かめる為に妊娠検査キットを買いに行った。

「区役所に用事があるから、昼間出掛けるね」

レストランのトイレで検査キットを試してみた。

検査結果は、陽性だった。

彼の子供を妊娠していたのだ。

私にとって最高に喜ばしい出来事なのだが、彼はどう思うだろう。

彼は私を大事にしてくれ、愛してくれている。

態度や行動、言葉でも愛していることを表現してくれる。

私もそれらに安心しており、彼を心の底から信用している。

私はユミさんの言葉を思い出していた。

『あの子ね、女関係でゴタゴタがあったから今は仕事一本だよ』
私の目にもそう映る。

彼は私の存在が支えになると言ってくれた。でも私が出産して、彼の子供が居た場合、重荷にならないだろうか。それが主因となって、私達が別れたりしないだろうか。彼は目標や夢に向かって、仕事に取り組んでいる。私と子供が彼の足枷になつたりしないだろうか。

私は妊娠という現実を苦悩した。

ユミさんやユカさん、チハルやメグミにも相談出来なかった。私は独り、産婦人科へ向かった。

数年前に墮胎手術をした病院を訪れた。嫌な思い出だった。

でもあの頃の私と、今の私は全く違う。しかし悩みながら、この長椅子に座っているのは同じだった。とりあえず診察してもらい、状況を確認したかった。

「おめでたと言いたいところなんだけど」

「はい？」

「でもまだ心臓の音が聞こえにくいから、またしばらくしたら来てもらおうかな」

「分かりました」

私はその日、彼と家を出たが休みを取った。

「お母さん、居る？」

「あら、久しぶりね」

「ただいま」

「今の彼とうまくいつてるの？」

私は母に彼との関係話した。

母は私のことを一番知っている。
何も興味を示さず、表情も出さなかった。
今は彼と居るだけで安心する。
彼のことを思えば、胸に心地良い痛みが走る。
彼と一緒になら、笑え、泣ける。
彼の為に何かしたいと思う。

「あなたがここまで変わるなんてね。良い彼なのね」
母は私が想う、彼への気持ちに驚いていた。

それらを踏まえて、今回の妊娠のことを話した。

「あなたはどうしたいの？」

「彼のお嫁さんになって、彼の子供を産みたい」

「それでいいじゃない」

「でも…」

「彼の仕事の支障になるから？」

「なると思う…彼はこれから独立して会社を起業しようとしているの」

「それは立派なことだわ」

「彼はそれ以外、見え…」

「お母さんは、そう思わないな」

いつになく、母は語気を強めた。

母は私の信じた男への想いを貫き通せとのことだった。

母に背中を押され、私は彼のマンションへと帰った。
掃除機をかけ、洗濯をし、布団乾燥機をセットした。
私はベッドの脇に置いてある、彼と私が写っている写真を抱きしめた。

母の言葉、私と彼の日々が大丈夫だと、私を落ち着かせた。

彼が好きな食べ物を作って待っていていよう。
そこで話を聞いてもらおうと思った。

日付が変わる頃、彼のポケベルを鳴らした。
多忙を極めているのだろう。

電話が鳴るまで、少しの時間を要した。

「どした？なんで自宅なの？」

「さぼっちゃった」

「あはは。店は参ってるだろうな」

「いいのよ。今日は何時頃帰って来れそう？」

「何かあんの？」

「たまにはご飯作ってあげようかなって」

「そうか。じゃ帰る前に連絡入れるよ」

彼から電話があったのは、午前4時だった。

「悪い悪い。ミーティングに時間掛かっちゃったよ」

「じゃ今から温めるから」

「急いで帰るよ」

電話を切って、15分経った頃だろうか。

鍵を挿す音が聞こえた。

「おかえり！」

もう何日も逢っていないかのような感覚だった。

私は彼を見るなり、抱き付いた。

「あはは。どうした？着替えさせてくれよ」

「逢いたかったから」

「俺もだよ」

彼は強く抱きしめ返してくれた。

私の手料理を彼は美味しそうに頬張っていた。

「ビール飲む？」

「今日はいいや。お茶ちょうだい」

「はい」

「今日も売上さ、記録更新だよ」

「本当？すごいね」

「イシハラが育ってきたのが大きいかな」

「自分がフリーで動けるから？」

「そういうこと。大入りが楽しみだな」

「良かったね」

「今年ももう少しだから、踏ん張るしかないよ」

「そうだね」

「正月休みは旅行連れて行くからさ」

「やったー！」

「キムラやコダマ達と一緒にだよ。イシハラは今のところ微妙だね」

「そうなんだ。楽しみだね」

彼に旅行に連れて行ってもらおう嬉しさと裏腹な思いを抱いていた。

やっぱり言えない。

私はそう思った。

疲れ切って帰って来た彼は、目を輝かせて仕事の話をした。

今の彼は、仕事で手一杯なのだろう。

今のタイミングでは、言えなかった。

彼を信じていない訳ではない。

どうしようもない気持ちで押しつぶされそうだった。

本来、喜ばしいことなのに素直に喜べない。

彼を愛して、彼に愛されたいだけなのに。

こんなことで彼と別れたくない。

負の考えは、連鎖を起こしてこんなことまで考えさせた。

「一緒に風呂入るか？」

「うん」

彼は湯船に浸かりながら、居眠りをしていた。

よっぽど疲れているのだろう。

しばらく経過を待ってから、彼に話すことにした。

私と彼は早起きし、買い物に出掛ける予定をしていた。

「ねえ、起きて」

「眠い…」

「起きれない？」

「うん…」

「じゃ買って来てあげるけど、文句言わないでね？」

「うん…」

彼は連日の激務で相当、疲れているようだった。

私と彼は、料金が安くなった携帯を買いに行く約束をしていたのだ。
つた。

以前は、保証金が数十万に基本使用料が数万。

通話料も5〜6秒に10円といった高額設定であった。

規制や規格が変わったのか、数万で買えるようになったのだ。

大きさもかばんサイズから辞書サイズへ、手持ちサイズになった。

しかしポケットに入るような大きさではなかった。

携帯ショップへ向かうと、師走ということもあって大賑わいだった。
一般庶民にはまだ浸透するレベルではなく、一部の小金持ちの持ち物だった。

たくさんの人を避けて、カウンターに行く。

「2つください」

こんな若いのが2つも携帯をを買うのかという目線を感じた。

水商売なのか、どこかの社長の愛人なのかという目線だ。

身分証明書と公共料金の支払い明細が必要であったが、ちゃんと準

備していた。

私は彼と全く同じものにした。

番号も下一桁違いの連番にもらった。

この頃の携帯は電波の入りが悪く、ポケベルと併用するのが通常だった。

電池の持ちも悪く、予備電池を持ち歩く人も多かった。

マンションに帰ると彼はまだ寝ていた。

「ねえ、もうシャワー浴びないと遅刻しちゃうよ?」

「ああ…何時?」

「17時になるよ」

「ナヌ!」

彼は飛び起きるとシャワーを浴びに行った。

「終わったらショットバー集合な」

「うん、分かった」

着替えると頭をセットすることもなく、飛び出して行った。

「あ、居た居た。おつかれさまー」

彼達はすでに店に来ていた。

「おかえり。どっか行ってた?」

「うん。チハルと一緒に客とご飯ね。30分も一緒に居なかったけど。同じ店のチハルね」

「初めまして…じゃないね」

「前に3人で来たときに話したかな?」

5人揃ったところで、改めて乾杯した。

「ユイちゃん、キングがナイレポの取材が来て2月号に載るんだってさ」

「店長のワンショットもあるらしいよ」

「彼からちらっと聞いているよ」

「それってユイちゃんが表紙に出たことある新聞？」

「え？」

彼だけではなく、キムラくんやコダマくんも啞然としていた。

「自慢したい訳じゃなかったから言わなかったけど、いつ頃だったかな？載ったの」

「ユイちゃん、すごいじゃん」

「まだダーリンと出逢ってなかった頃かな？初めて逢ったくらい頃かな。その辺りだよ」

「あの時、店に取材が来たんじゃないかってユイちゃん個人に取材がきたんだよね？」

「うん。店はアクセスくらいしか載ってなかった」

「へえー」

彼とチハル以外が驚きの表情を見せる中、彼1人が違う表情をしていることに気がついた。

その夜はあまり深酒をせず、疲れを取る為に早めに解散した。

マンションに戻ると、テーブルの上が散乱したままだった。

「ごめん。いろいろ計算してたら遅刻しそうになって、そのまま出掛けちゃった」

「いいよ。ん：1200万？」

「ごめん。今片付けるね」

「すごい貯金してるな」

「だって私なんか18から働き出して、この業界で10年は稼げないんだよ？」

「ユミさんもユカさんも、そんなこと言ってたな」

「そうだよ。ピークは5年くらいだもん」

「給料全部貯金してんだ？」

「前は家賃とか光熱費あったけど、今は一緒に住んでるでしょ？服や貴金属は客が買って

くれるし、ご飯も出してくれるから使い道無いのよ」

「ああ」

彼の表情がみるみる変わったのが分かった。

「2人の将来の為に今のうちに貯めとかないとね」

「どうせ俺の貯金なんてユイの半分の半分も無いよ」

初めて見せる彼の嫌悪感。

「すごいよな。情報誌の表紙になっちゃうような女は！」

「どしたの？怒らせるようなこと言っちゃった？」

「何でもないよ。タバコ買いに行ってくる」

彼は部屋を出て行ってしまった。

ナイレポの話があつてから、私が載ったことは、いつかバレることだとは思っていた。

彼より、私の方が先だったという結果にプライドを傷付けないか心配はしていた。

貯金通帳に限っては、私のミスだ。

彼は仕事の疲れやストレスが、爆発してしまったのだろう。

彼は悪くない。

私のケアレスミスだ。

彼のプライドを傷つけるようなことをしてしまった。

妊娠のことを話せなかったのもそうだ。

彼を信じて話していれば、私が苦悩することもなかったはずだ。

私は自己嫌悪に陥った。

私は部屋を出て、車に飛び乗った。

朝方の車の居ない道路で、スピードを上げていく。

彼から買ったばかりの携帯に着信が入る。

「何？」

「どこ行くんだよ？」

「何で？いいじゃない」

「じゃ勝手にしろ」

売り言葉に買い言葉とは、このことだ。

電話を切られて、車を停めた。

髪がくしゃくしゃになるまで、頭を抱えた。

お互いに分かっているはずだ。

気持ちと裏腹な言葉だけが飛び交う。

彼を失うことを恐れているのは私なのに。

頭を冷やそうと数時間、首都高速を何周も回っていた。

やはりどう考えても私が悪い。

こんなことで余計な気を使わせてしまっている。

彼のもとへ帰ろう。

こんなことで愛する気持ちが折れたくない。

ずっと彼のそばに居たいなら、素直にならないと。

部屋に帰って、息が出来なくなるくらい強く抱きしめてもらおう。

マンションの近所まで来ると車の調子が悪くなった。

「何これ」

スローダウンしたかと思うと車は止まった。

「あら、ガス欠…」

素直になろうと決めた私は、躊躇なく彼に電話した。

「ね？愛してる？」

「愛してるよ」

「どれくらい？」

「世界で1番」

「ウソ？」

「本当だよ」

「じゃちゃんと言って」

「ユイを世界で一番愛してる」

「じゃ許してあげる。タバコも財布も何も持って来なかったの」

「迎えに行くよ。どこに居る？」

「マンションから10分くらいのこと。帰ろうとしたらガス欠で止まった」

「ん？ガス欠になったの？」

「しょうがないでしょ。朝までずっと走ってたんだから」

彼はすぐに迎えに来てくれた。

車も人も居ない朝方。

遠くの方から彼だけが見えた。

「おかえり」

「罰としてスタンドまで押して」

「だせえな」

私は車を降りると彼に抱きついた。

「ごめんなさい」

「俺も悪かったよ」

彼はちゃんと抱きしめ返してくれた。

窓を全開に開け、車を押す彼と話をした。

「お金の件なんだけど」

「ああ」

「将来、独立するって言ってたでしょ？」

「そうだな」

「軍資金の足しになればいいかなって、無駄遣いしないで貯めてたの」

「そっか」

「最悪、逃走資金にもなるし」

「あはは。俺が逃走か」

「2人で愛の逃避行ってのも悪くないでしょ」

「悪くないけど、そうはなりたくないな」

「2人に子供が出来て、その子にも苦労させたくないし」

「そうだな」

「お嫁さんにしてもらうつもりで付き合ってるんだから」

「俺だってそうだよ」

ドキドキしていた。

勢いに任せて、私は何を口走っているのだろう。
これがダメなのだ。

こういうことは彼の性格上、男から言うべきだと彼は言う。

「あと一番大事なことなんだけど」

「なに？」

「プライドを傷付けるようなつもりは一切無いから」

「分かったよ」

「でも私の心配りが足らなかったのは、反省してる」

「もういいよ。気にしてないから」

ガソリンスタンドに着いた頃には、いつもの2人に戻っていた。

翌日、彼は緊急店長会というミーティングに呼ばれ、いつもよりも早く出勤して行った。

私は彼の言うとおり、正月旅行の荷造りをしていた。

彼の着替えと私の着替えを、同じカバンに入れる。

彼との旅行の支度は、ものすごく楽しかった。

どんな場面で何が必要か、想像しているとニヤついてしまった。

私に妄想癖などなかったはずだが。

宅配の集荷を呼んで、荷物を受け取ってもらった。

その日の営業は、口開けが遅かった。

チハルと待機していた。

「ユイちゃん、主任の話聞いた？」

「ううん、なに？」

「リンって子覚えてる？」

「そういえば、最近見ないね」

リンというのは、店の同僚で人気もあった女の子だ。

「送りのときに主任に告白されたらしいよ」

「ええ？キモ…」

「リンは断つたらしいんだけど、つきまどってたらしいの」
「最低だね」

「でね、リンが断つたときに何て言ったと思う？」

「なんだって？」

「女欲しがるより、もっと仕事出来るように勉強すればだって」

「あはは！すごい笑える」

「だよな」

この業界では、スタッフと女の子が交際するという話はよくある。

「ユイ」

「なに？」

「店の男子スタッフが、女の子に手を出してるってのある？」

「うちは無いかな」

「そうなんだ」

「うちは女の子が主体だから、ボーイはサポートなの」

ちようど聞いた、リンの話を彼にした。

「なるほどね」

「だからうちは無いよ」

彼のグループでは交際を認めて欲しい旨、懇願してくる人間が多くなつたという。

これらを良しとしない方向でのスタイルを貫くという。

「罰金とか解雇ね」

「そういうこと」

彼は言う。

お互いが交際する事によって、相乗効果を得られれば否定しないという。

しかし若い男女がどちらも異性とコミュニケーションを取る。

全てとは言わないが、多くはヤキモチを焼く。

それらが仕事に影響するというのが。

他の女の子やスタッフにバレれば、必然的に客にもバレる。

本人だけの損失に留まらず、店の評判も悪くなるのだ。

彼の意見に私も賛成だった。

仕事とはいえ、男女交際も社会勉強なのだと言った。

いろんなことを経験して、男も女も成長していくのだと。

それらを経て、男は一人前に、女は魅力を増していくとも言っていた。

店のスタッフには、女の子から告白されるような男になれと教えているという。

告白されたといって、交際は出来ない。

個人的感情で仕事は出来ないからだと言明を続けた。

もちろん、彼の店では誰一人、彼を裏切る行為をしているスタッフは居なかったらしい。

スタッフ達は、こんなことで店長の期待を裏切れないと、一往に声を揃えた。

彼の人徳なのだろう。

彼には女の子側である、私の考えも告げた。

基本的に女の子は稼ぎに来ている。

男を捜しに来ているのではない。

客と交際することは、まず無いに等しい。

もし彼が同じハコの中に居たとしたら、私は店を辞める。

仕事とはいえ、彼が他の女の子と親しげに話しているのは見たくないからだ。

実際、別の店舗で仕事をしてれば、目にしなくて済む。

お互いにプロ意識を持って仕事をしようというのが彼の意見。
私はいつ辞めても良いのだ。
彼のそばに居れば良い。

私は彼の発する仕事の話に酔っていた。

彼色に染まりたいという、麻酔にかかっているのかもしれない。

そして今年最後の日、大晦日を迎えた。

彼の店は大晦日まで走り続け、翌25時には閉店するという。

私は同伴、彼はミーティングで最後の日も忙しく出勤した。

しかしその同伴出勤というのは、偽りがあった。

私は産婦人科へ向かったのだった。

妊娠発覚から1週間。

経過を確認しに行く予定となっていた。

予約を入れていたこともあり、待ち時間もなく検診してもらった。

「赤ちゃんなんだけどね…」

「はい」

「残念ながら流産してました」

「そうですか…」

「子宮内を洗浄するから、隣の処置室に行ってください」

「はい」

「気を落とさないでね」

「大丈夫です」

「来年は10日から病院やってるから、もう1回洗浄しに来てください」

「分かりました」

子宮内洗浄をしてくれた看護婦さんが声を掛けてくれた。

「もう赤ちゃんが出来ないという訳ではないので、気を落とさずに」
「ありがとう」

神様が時期早々だと判断したのだろう。

医師の話によると、前回の検診時にはほぼ受精したままの状態だったとのことだった。

しかし私は彼の子を以後、1度も妊娠することはない。
この時点では、それに気がついていなかった。

大晦日の日を迎えた。

彼の仕事に合わせて出勤していた私は、かつてない売上を上げていた。

繁忙期の彼は、仕事をあまり休まない。

私も彼が居ない部屋で独りで居てもしょうがない。

今月の私は大晦日までの間、2日しか休んでいなかった。

正直言えば、心身疲れ切っていた。

妊娠騒動での気疲れ。

プチ家出もした。

そして毎晩、酔っ払いの相手。

しかし彼が連れて行ってくれる旅行までの我慢と頑張った。

「ユイさん、3番テーブルご指名です」

「すみません、ちょっとユイさんお借りします」

「ユイさん、8番テーブルお見送りお願いします」

連日、私は忙しかった。

指名は重なり、アフターもこなし続けた。

「ユイちゃん、正月はどうすんの？」

「実家に帰るの」

「温泉でも行くこうよ」

「ごめんね」

「店終わったら、初日の出を見に行こうよ」

「彼氏と行くに決まってるでしょ」

「だよな」

「奥さんと子供で行けばいいのに」

さすがにこの日のアフターは断っていた。

「ユイさん、ご指名です」

またあいつが来た。

ここ数ヶ月でよく来るようになった客だ。

「よう！ユイ」

「おはー」

歳は私より少し上くらいだろうか。

羽振りが良く、かなりのお金を落としていく。

パツと見れば、誰もがカッコ良いと思うような風貌をしている。

しかしこの男はヤクザだった。

この大晦日の寒い季節。

男は店に入ると上着を脱ぎ、半袖になる。

七部までのイタズラ書きを周囲に見せるのだ。

私はその行為が大嫌いだった。

こいつが来ると他の客が帰ってしまうからだ。

彼がこのことについて、教えてくれたことがある。

このような振る舞いをする人間が1人居れば、10人の客が遠ざかるのだと。

そんな輩が出入りしているような店には、足が遠ざかるという。周囲より目立とうとするオーラが出ているのだ。

声も大きければ、存在自体が一般客の脅威となると彼は言った。

もちろん中には、企業の重役にしか見えない幹部クラスも居る。

しかしそのクラスになるとキャバクラなどには来ない。

その見極めが彼の仕事でもあると言っていた。

「ちょっとユイさん、お借りしますね」

「あ？来てからちよっとしか経ってねえだろ？」

「他のお客さんの見送りだよ。すぐ戻るから待ってて」

このように男子スタッフにも大声を出す始末だ。

見送りから戻った私もたまらず、注意する。

「ちよっと、他のお客さんの迷惑になるでしょ」

「何も言ってねえよ」

これも彼に聞いた話だが、彼達は私達のような女の子の言うことしか聞かない。

ギャラリーが多ければ多いほど、このような輩は粹がるのだという。他の客や男子スタッフに注意されれば、威嚇する。

女の子の前で良いカツコがしたいのだろう。

このような輩を受け流す方法を彼に聞いたことがある。

絶対に将来もあなたとは、交際することはないと打ち消すのだ。

「ユイはいつになったら、俺と付き合っただよ？」

「そんな約束したことないんだけど？」

「付き合ってくれよ」

「私ね、彼と一緒に住んでるの。近い将来、結婚する予定なのよ」

「聞いてねえよ」

「だって聞かれてないもん」

彼に教わったとおり、このような感じで何人も受け流した。

執拗なタイプの男だと、それが誰だか追及してくる。

そうなれば、こちらから拒絶する。

多くはカミングアウトの段階で、フェードアウトしてくれる。

このような輩は、いくら売上を出しても諸刃の剣なのだ。

しかし、私はどうしてこのような『ヤンチャ』系に人気があるのだろうか。

うちの店でもこのような男に引つ掛かった女の子はたくさんいる。私はその子達から、何度も相談を受けた。

半ば強引に彼女にさせられ、別れてくれない。

激しい束縛に暴力。

家族を調べてあるだとか言い、脅すのだ。

中には、猥褻な写真を撮られて、弱みを握られ、金を取られる。

美人局ならまだ可愛いもので、覚醒剤に漬けられ、体を売らされるまでになった話も聞いた。

彼の言葉を借りて、女の子達に話す。

「近寄らないこと。客としてきても受け流し続けることが大事なの。彼いわく、関わらないことが大前提なのだ。

刺激的で火遊びをしたい気持ちもあるかもしれない。

それが地獄への入り口となってしまふのだ。

相手はイタズラ書きを見せびらかさないとハクも付かない下っ端なのだ。

残念ながら、私達は客を選べない。

来るもの拒まず、去るもの追わずなのだ。

私の場合は、彼から教わったことと強気な性格もあり、トラブルは皆無だった。

そして今年の営業が終わった。

私は終礼が終わると、一目散に店を出てタクシーを乗り、帰宅した。

「ただいま。あけましておめでとう！ダーリン今年もよろしくね」

「おかえり。こちらこそよろしくな」

彼の店は、25時で早仕舞いしていた。

「みんなは何時くらいに来るの？」

「今電話あつただけけど、たぶん営業が終わったばかりみたいだ

つたから、まだまだかも」

「お腹は空かない？」

「今から風呂入ろうかなって思ってたトコだよ」

「一緒に入る」

風呂場で彼といちゃいちゃしているうちに、コトが始まってしまった。

元日の未明から、いわゆる姫始めだ。

お風呂を出ると、彼が客からもらったという寿司を食べた。

「ユイ、この12月は疲れたる？」

「うん、さすがにね」

「別に出勤合わせる必要のないのに。休めば良かったじゃん」

「ダーリン無しで私が生きていけると思うの？」

「あはは。そうだな」

「帰ってきて私が寂しさに耐え切れず、孤独死してたらどうするの？」

「あー分かった分かった」

私と彼は、疲れと2人で居る安堵感で寝てしまった。

私は姫始めの次に初夢を見た。

内容は辛く悲しいことだった。

彼が私ではない、他の女と幸せになるという内容だった。

この手の夢はよく見る。

よりリアルに覚えているときは、泣いて目が覚めるときもあった。決まって寝ている彼に抱き付く。

何かで見たことがあった。

これは今の幸せがどのように感じているかの裏返しなのだ。またそう思っていることを失うことへの恐怖感なのだという。

裏返しということは、私は彼と居ることが幸せと感じているのだから。

しかしそれは夢の中の話だけであって欲しいものだ。

ユイ21

「ユイ…ユイ！兎玉の家から向かってるって。支度しないと」
「超眠い…」

時計の針は6時を回っていた。
3時間くらいの仮眠だろうか。
私は悪夢を見たせいで、眠りがかなり浅かった。

大急ぎで身支度をする。

「荷物は送ってある、財布持った、電気ガス水道オツケー、鍵持った。よし」

「ユイ、忘れ物無いか？」

「うん、たぶんね」

玄関で靴を履こうとしたとき、彼の携帯が鳴る。

「下に着いたって。行こう」

私達を確認すると、キムラちゃんとコダマくんが車から降りてきた。

「ごめんごめん。うっかり寝ちゃったよ」

「俺が電話しなきゃ、絶対キムラは起きなかったらうな」

「俺とユイは堪らず寝てたよ」

「行くべ。乗って乗って」

彼は後部座席のスライドドアを開けた。

「ユイちゃん、あけましておめでとっ！」

「あれ嘘？チハル？アサミ…アサミ!？」

アサミは高校時代の同級生でメグミの友達だった。

チハルは店の友達で、チハルとメグミの共通の友達が居るという。

彼の元カノでもあり、イシハラくんの彼女のマコがその友達だという。

世間は広いようで狭いものだ、みんな笑った。

「キムラくんの彼女になっちゃった」

「へ？」

私と彼は同時に同じリアクションになった。

「何だよキムラ？いつの間にチハルと付き合ってたのよ？」

「ユイちゃんが紹介してくれたじゃん？」

「シヨットバーで？名前教えただけだよ？」

「いいじゃないの。みんな楽しくやれば」

すったもんだの末、無事みんなが集まると出発した。

この時期の都内はゴーストタウンと化す。

日中、ビジネスマンの人混みで埋まるこの辺りは、人気が無い。

それらを対象にした店舗等も、もちろん休みだ。

違う街を通り抜けているような感覚になる。

運転手のキムラくんを残し、私達は後部シートを対面にし、ドンちゃん騒ぎをしていた。

2時間ほど走ったところでパーキングに寄り、トイレ休憩をした。

「あー腹パンパンだよ。シヨンベン行くべ」

トイレから戻ると彼達が買出しをしてくれていた。

「そろそろ運転替わってくれよ」

「もうちよつとしたら俺が替わってやるよ」

寝坊したキムラくんを哀れんだのか、コダマくんが交替を聞き入れた。

「でもいいじゃない。男の人が3人居るんだから、3人交代で運転すればまだ楽でしょ？」

「マナブは免許無いよ？」

「だってこいつ、まだ17だもん」

「ええ！」

青天の霹靂だった。

この事実を知らなかった私達は、開いた口が塞がらなかった。
「店長が17だったってのは驚いたけど、驚いてるユイちゃんの姿の方が驚いたよ」

「ユイちゃんが驚いてるけど、言っただけだったの？」

「そう言われれば言ったような、言っただけのような…」

「マナブくんは私の2つ下なの？」

「木村が今年21で兎玉が20だろ、で俺が18になるのか」

「そうだったんだ…」

「誕生日なんか俺とマナブと一緒に木村が次の日だったりする」

彼は本当に言い忘れていただけなのだろう。

悪気は無いのは分かっているが、私は黙り込んでしまった。

「どしたのユイちゃん？こいつが年下だったのがショック？」

「ううん。歳は好きになった人だからどうでもいいんだけど、なんで話してくれなかったの」

かなって思っただけ。私はマナブくんの何なんだろうって思っただけだった。

「そっだね。マナブが悪い！でもこいつ言ったと思っただけの可能性高いよ？」

「そうそう。意外と物忘れひどいし、天然なところあるし」

「完全に話したと思っただけ、ユイのリアクションから見て、言っただけだったみたいだわ」

キムラくんやコダマくんが言うとおり、彼は天然なところがあるかもしれない。

出逢ったときに連絡先を交換しようとした。

確かに私は、教えたくなったら連絡してと話した。

すぐに彼のマンションに転がり込んだこともある。

しばらく経つまで私は彼の連絡先を知らなかった過去がある。

そのときの彼は、私よりビックリした顔をしていたことを覚えて
いる。

しばらくすると、みんなが睡眠不足であった為、バタバタと寝に入
った。

「ユイ…」

起きていた私は、寝ている振りをした。

「ユイ、寝てんの？」

「ブーたれて寝てる」

「寝てる人間は答えないだろ？」

「この休みの間、1日100回ずつキスしたら許してあげる」

「分かった」

私は彼の手を握った。

「歳の話、悪かったな。完全に勘違いしてたよ」

「顔見て分かったわよ。本人が1番きよとんってしてもん」

「まあ現地着いたら楽しもうぜ」

高速での渋滞中、私は彼の手をずっと握り締めていた。

車内に10時間以上も閉じ込められていた結果、やっとホテルに辿
り着いた。

ロビーまで行くと、キムラくんが受付をしてくれた。

「ほい、マナブ達の部屋の鍵ね」

キムラくんは彼にカードキーを手渡した。

フロアは8階だという。

私達は、エレベーターに乗った。

そのとき、コダマくんがカードキーを2枚持っていることに気が着
いた。

「ねえ、4部屋って誰かまだ来るの？」

「そのうち分かるよ」

「サプライズゲストとか居たりして？」

「ええ？気になる！」

私達が1番元気な時間帯は、他の客室は寝静まっている。

4部屋目とは時間を気にせず、集まって飲める宴会部屋なのだそう
だ。

休みの間だけ、周囲の時間帯に合わせてと仕事に戻ったときに時差
ボケが生じる。

だから4部屋目を有効に活用して、時間帯をずらさないようにする
訳だ。

水商売をやっていると生活している時間帯が異なるので、このよう
なことも考える。

少なくともここにいる6人は、水商売を立派な仕事と捉えている。

若いから、派手だからと後ろ指されるのは本人次第だ。

彼の言葉を借りれば、この業界は夢を売る商売。

社会的には、認められた存在ではないかもしれない。

でも彼は立派な役職について、同年代では手に入れない収入も
得ている。

彼が中心となつて、会社として機能すれば、認知される存在となれ
るかもしれない。

私は彼や仲間がそのようになったときにサポートしたいと思ってい
る。

私達は正月休みに苗場にスキー旅行に来ていた。

全ての手配をしてくれたキムラくんの寝坊によって、スケジュールが変わってしまった。

初詣は延期、道路は大渋滞と仕事以上に疲れてしまった。

ホテルに到着した私達は、早速スキーを楽しむことにした。

「ロッカーの鍵もらった？」

「あるよ」

宅急便で荷物を送っていた。

ロッカー手前でそれらを受け取ると彼達はメンテナンスに入った。今シーズンは初めてだという。

「懐かしい匂いがするな」

「確かに似てるけどトルエンではないだろ？」

スキー板にワックス掛けをすると、確かにシンナーの匂いがする。分かる人間は、思わず微笑した。

私を含めた女性陣は、ほぼ初体験。

彼とキムラくんはある程度の経験者。

コダマくんは上級クラスとのことだった。

「最初の1本だけ、頂上まで行ってくるよ」

コダマくんはコースの状態を見る為に山頂まで登って行った。

「俺らは初級者コースに行くか」

私と彼はロープウェイで迂回コースへと向かった。

「寒い…」

彼にしがみつく。

「滑ってれば顔以外は、寒くなくなるよ」

私は寒さが大の苦手だ。

彼と一緒になきゃ、こんな雪山に何か来ない。

「ボーゲンは出来るでしょ？」

「ナニソレ？」

何度も言うようだが、ウィンタースポーツは大嫌いだ。

その言葉も聞いたことが無い。

「じゃ俺が教えてあげるよ」

彼は私の背後に回り、板を八の字に開かせた。

「スピード出さないでね！」

「出ない出ない」

彼が私の腰を持って、一緒に斜面を滑っていった。

正直、楽しかった。

やっぱり彼とならどこに居ても何をしていても楽しいのだ。

数本滑ったとき、彼の携帯にコダマくんから連絡があった。

「コンディション悪いんだって。こっち側も吹雪くかもしれないってさ」

「今日のところは撤収しよっか」

「じゃ21時に宴会部屋に集合ね」

全員がホテル内に戻ると、男と女それぞれ大浴場へと向かった。

私達は大きな湯船に浸かりながら、談笑していた。

「でもアサミにはびっくりしたなー」

「私だってユイちゃんと同級生だとは知らなかったよ」

「でもユイ、ずいぶん雰囲気が変わったね」

高校の同級生であるアサミ。

アサミは昔の私の印象について話し出した。

「今だから言えるんだけどね、ユイは孤高の存在だったよ」

「孤高と言えば、聞こえは良いよ。私、友達居なかったからアサミが続けた。」

「同級生なのに女優みたいなオーラがあつてさ」

「そんなの無いから」

「男の子達でファンクラブみたいなのもあつたのよ？」

「存在自体知らないし」

「ユイちゃんは今でも指名ナンバーワンだよ」

同性からすると近寄り難い、存在だったらしい。

喜怒哀楽をあまり表情に出さず、無口。

唯一、メグミが私と言葉を交わせる同級生だったかもしれない。

メグミとアサミは中学も同じだったらしい。

「ユイちゃんはマナブくんと出逢って変わったんだよね」

「ユイの生き方を変えちゃうマナブくんってすごいね」

「私にとって、最初で最後に最高の男よ」

「高校時代からだと思像出来ない意見だよ」

「でもユイちゃんはユイちゃん、彼のこと以外は変わってないよね」

「お風呂出てから話そ。彼が待つてる」

「彼と離れていたくないんでしょ？」

「寂しくて死んじゃう」

「はいはい。分かりましたよ」

それぞれが部屋に戻った。

さすがにこの年代で、他の男にスツピンを見られるのは抵抗がある。髪をブローし、メイクもばっちり決めて、宴会部屋へと向かった。

「お待たせ」

「遅いよ。もしかして化粧で時間掛かってたんじゃないの？」

「ちょっとこの空瓶は…何？」

「飲んだから空になってるんだよ？」

「いや本数の話なんだけど…」

彼達は、よっぽど喉が渴いていたのか、1ケースくらいの本数が空瓶で並んでいた。

彼達は仕事の話で白熱していた。

同期の3人は、集まるといつも仕事の話をする。

私達、女性陣は黙ってそれを聞いていた。

入社以来、快進撃を続けてきた3人。

彼は店長に上り詰め、他の2人も支配人になった。

しかしこの先の出世が見込めないという。

「新店舗が出来るか上が辞めるか、新しくポジションが新設されない限り、昇進はないよな」

「独立するには、情報と金が準備出来てない」

彼は私と出逢う前、毎晩3人で切磋琢磨をし、独立を目標として語り合っていた。

ただ現状、行き詰まりを感じているという。

「ユイはどう思う？俺達のこれからについてさ」

「私は自分の彼のことしか考えられないけど、夢とか目標があればそれに関連していること

を勉強すればいいと思う。営業の回し方や男子スタッフ、女の子達の教育、お金の管理は

すでに出来るんだから。店を出すには何が必要なのかとかね。例えば許可は何が必要で

どこで申請すればいいのか、店を借りるのにいくら必要で店内にはいくら必要なのかとか

やっぱり、夢や目標に沿ったことを擦り込む必要があると思う」

私の言葉に彼達の笑顔が戻った。

「確信に触れた意見だね。さすがユイちゃん」

「独立した時と同じ目線でやるのが大事だってことだね」

「うん。いつかは3人もそれぞれ違った道に進むと思うのね。その時までこれからの時間が」

無駄にならないようにすることが大事だと思うの」

「俺達に明日はあるってやつだな」

私はこのときの彼の表情が印象的だった。

彼のパワーというかエナジーというか、とにかく爆発的な瞬発力を蓄えだした感じがした。

いよいよ店を辞め、地位や収入も捨てて独立するのだらうと悟った。

彼にとっての課題は、まず金銭面。

私と彼の貯金を合わせても2000万足らず。

イニシャルコストを抑えても、借金をしなくていけないだらう。借金をするようになる厄介だ。

何分、彼は若過ぎる。

この地域で名を馳せたカリスマ店長だとしても、世間では通用しない。

銀行からの融資は、望めないだらう。

そうなると私が頑張って資金を貯めるしかない。

彼が私の貯金を受け取るかが微妙だが。

この後、彼の夢は目標へと変化し、目標はノルマへと変化することになる。

ユイ23

スキー旅行から帰った彼は、休み明け早々、独立への情報収集に動き出した。

社長にも独立に向けて、動く旨を伝えたと言っていた。また社長も可能な限り、彼に協力すると話したらしい。さらに元経営者の情報を元に、オリジナルを構成しようと熟考していた。

彼の毎日は多忙を極めた。

ただ年末の多忙さとは違い、彼は覇気に満ちていた。

繁忙期と同じくらい、睡眠不足になっているはずだった。

彼は自分の目標に対する道中の苦労は、全く苦にならないという。

そんな中、年末に彼の元へ取材に来たナイレポが発刊された。

店は情報収集として、毎号購入している。

周辺の店舗も購入しており、発売から1週間で売り切れとなる。

「裏表紙の店長って、ユイさんの彼氏ですよね？」

「そうだよ」

店のスタッフが彼に気がついて、私に確認してきた。

「すごい！ユイちゃんの彼なんだ」

「この地域で若手ナンバーワンって有名な人だよ」

「ユイちゃんをモノにするなんて、良い男なんだろうね」

「キングってこの辺りじゃ、1番売れてるって噂だよ」

彼のことを褒められるのは、気分が良いものだ。

せっかく上ったテンションもその日の営業は、必然的に暇だった。

業界の人間だけがナイレポを買う訳ではない。
もちろん店探しに客も買うのだ。

今日の営業はキングの一人勝ちだろう。

私はチハルと待機しながら、スキー旅行の話をしていた。

「ユイさん、携帯が鳴ってました」

「ありがとう」

更衣室に入ると、リダイヤルを押した。

彼からだった。

「ユイ、今話せるか？」

「うん。今待機中。どしたの？」

「明日の店休日、ちょっと客の付き合いで出掛けるようになった」

「分かった。部屋の掃除したかったから行って来て」

「終わったら飯でも食いに行くか？」

「うん、どうすればいい？」

「店において」

「終わったら、大至急行くね」

彼はいろいろなコネクションを作ろうとしているのだろう。
せっかくの休みだが、彼の予定を優先させるしかない。

「お疲れ様です」

「お、ユイさん。店長！ユイさん来ましたよ」

「イシハラ！集計やり直せ。数字間違ってるぞ」

彼がリストから出てきた。

「お疲れさん。ちょっと待っててよ」

彼はイシハラくんを集計のミスを訂正させていた。

イシハラくんは彼に怒鳴られまくっていた。

「いいか。ここは営業の司令塔なんだ」

「はい」

「どんな想いでお前に任せてるかよく考えろ！」

「すいません」

「閉めるぞ！集合。ユイ、終礼しちゃうから外で待ってて」

「はい」

私も怖いくらいの迫力だった。

仕事に関しては、彼はものすごく厳しい。

しかしそれらに耐え、信じてついて行けばギャラも跳ね上がる。

業務外での天然キャラというギャップも同居してるから、部下がついて来るのだろう。

「焼肉でも食うか」

「ユイさん、ご一緒させていただきます」

「どうぞどうぞ」

イシハラくんも一緒に来るといふ。

私はイシハラくんにヤキモチを焼いたことがある。

仕事話で彼はよくイシハラくんの話をする。

もちろん言葉や態度に出したことは無いが、嫉妬する。

イシハラくんも彼に対しては、師弟関係以上のモノを感じている。

こういうときの女って本当にバカだと、自分でもつくづく思う。

彼達に何がある訳でも無いのに。

私という女は、束縛したい気持ちが大きいのだろうか。

「店長」

「あ？」

「さっきのセリフが引っ掛かっています」

「何だ？」

「俺にリストを任せてることっす」

「気にすんな」

「確かにたかだか主任でキングのリストは大役っすよ」

「だからどうした」

「それより『どんな想いで』ってことです」
私も通常なら出てこないセリフだと思った。

「イシハラよ」

「はい」

「お前を数ヶ月で支配人にさせる」

「マジっすか？」

「キムラとコダマと同レベルまでに育て上げる」

私は彼の真意が分かった。

自分がキングを抜けて、売上がダウンすることは避けたいのだろう。部下の中でそれが出来る可能性を感じたのがイシハラくんという訳だ。

イシハラくんの表情が一変する。

「独立するんですか？」

「ああ、いつかはな」

「ついて行っていいんすよね？」

「それはダメだ。社長に対して不義理になる」

「そんな…」

彼とイシハラくんの師弟関係は、私の想像以上だった。言葉が少なくても信頼し合って、理解し合っている。女の私が入り込む余地が無さそうだ。

「だからお前を俺が抜けるまでに支配人に上げる」

「邪険にされても、ついて行きますよ」

「社長との義理が先だ」

「その考え…今後の俺の仕事内容で変えてみせます」

私が驚いたのはこの後だった。

さっきまでケンカでもしそうなくらい、危険な感じがした。焼いた肉が出す、煙のこっちと向こう側に居た、彼とイシハラくん。今はその肉を子供のように取り合っている。彼がビールを飲み干せば、負けじとイシハラくんも飲み干す。

これが男同士の付き合いなんだと思った。意地の張り合い、まるで子供のようだ。私と彼の間にある信頼関係。

彼とイシハラくんの間にある信頼関係。全く別物だが、とても不思議な感じがした。

歳こそイシハラくんが2つ上になる。

イシハラくんは、彼を絶対的存在に位置させ、従順だ。恋人や家族の関係を超える、ある種、信奉の域だ。同性をも惚れさせてしまう、彼の魅力に私は惚れ直した。

彼が会計を済ませると、私達はタクシーに乗った。

「頂きました。お疲れ様です」

「おう、お疲れさん」

「イシハラくん、引つ張ってあげれば？」

「そうしたくてもさ、義理が先なんだよ」

「何かイシハラくんが可哀相だよ」

「どうした？ユイがそんなこと言うなんて」

「イシハラくんは、これからずっとマナブくんに必要な人間になると思うな」

「まだ、そこまで成長はしてないけどな」

「けど？成長したら社長に彼をくれって言うの？」

「どうだろうな。まだ俺の独立する話も決まってないから、そのと

き考えるよ」

彼が苦渋しているのが分かる。

彼の独立話は、本人の意図しないところから、どんどんと進展していくことになる。

ユイ24

彼の店休日。

私も休みだが、彼は今日、接待だった。

夕方、起きると私と彼は身支度を整えた。

「ユイ、まだ時間あるから、飯でも食いに行こうか？」

「じゃそのまま出掛けちゃう？」

「そうだな」

「どこ待合わせなの？」

「ユイの店の近所の寿司屋」

「じゃ駅の裏のラーメン屋行こうよ？」

「寝起きからラーメンね…」

彼と私は、週に2回以上は必ずラーメンを食べる。

店が終わってからのご飯は、ローテーションとなっている。

ラーメン、焼肉、寿司、牛丼、カレー。

外食産業の王道が彼は好きなのだ。

ただ、ファミレスだけは唯一、彼が嫌うところだった。

理由は私達が行く時間は、寝ている輩が居るからだという。

「らっしやい！」

彼は2本指を立てた。

「2名様、カウンターでよろしいですか？」

「結構ですよ」

店はサラリーマンとタクシーの運転手を中心に混雑していた。

「すいません。後ろ通ります」

「どうぞ」

彼が挨拶をすると、快く道を開けてくれた。

「あ！店長？」

「やつちゃん！」

彼の言う『やつちゃん』と呼ばれる男が、今日待ち合わせしていた人物とのことだった。

「ユイです。マイカワがいつもお世話になってます」

「店長の彼女？さすがキレイな人連れてるね」

ラーメンを食べた後、早々に彼と私は別れ、帰宅した。

「ただいま」

「おかえり。早かったね？」

「悪いな。今話せる時間あるか？」

「掃除と洗濯終わったから、大丈夫だよ」

先ほど逢った『やつちゃん』の話だった。

その男は4000万を出資をするから、彼に独立して欲しいと言っ
たらしい。

それも部下として彼について行くという。

誠意は明日、彼の口座にお金を振込むので確認して欲しいと。

「本当に振込んできたなら、条件を聞いてみれば？」

「ちよつと気持ち悪いよな。確かにここ数ヶ月うちに来て、顔は見
てれば話してはいるけど」

4000万なんて振込まれてもな…」

「私は今か後かしかないんだからチャンスだと思うよ。振込まれて
ればね」

「かと言ってすぐには店も辞められないだろう」

「チャンスかそうじゃないか判断すればいいと思うよ。そんな大金
借りれる人ってそうは

居ないと思うよ」

「ちよつと考えてみるよ」

さすがに彼も慎重だった。
いくら彼が同性から惚れられるタイプだとて、不信がるのも無理は無い。

バブルが弾けたこのご時世。

銀行は貸し渋りをし、誰も融資先に困る状態だった。

そして彼の社会的信頼度の低さ。

私の中では、この問題が独立を大幅に遅らせる主因となると感じていた。

考え込んでいた彼の携帯が鳴る。

「今からですか？」

彼は手短に電話を切った。

「ちよつと出掛けてくるわ」

2時間くらい経っただろうか。

彼から電話があった。

「ヘッドハンティングだった」

「引抜？」

都内に10数店舗を持つ、会社の幹部が彼とコンタクトを取った。

彼に提示された役職は、取締役事業本部長。

内容としては、プロデュースに近いようなポジションらしい。

ギャラとしては、現状で300〜400万。

以降は歩合制だという。

彼は、社長に報告したいといい、帰りが遅くなると連絡があった。

大きな組織の中で、中心人物となるポジションを取るか。

規模は小さくても一国の主という、リスクなポジションを取るか。

彼の性格上、答えは1つだろう。

ナイレポという媒体に露出して、一躍、有名人となった彼。

彼はまだ若く、成長はまだ途中過程だろう。

大きな組織は、その類稀なる人材を欲するだろう。

彼の成功を祈るであれば、今回のチャンスはステップアップとして捉えた方が良いと思う。

大きな組織の中心として業務をこなした結果は、彼の経験として財産になるだろう。

多額の借金をして、もしも倒産した場合、返済は困難だろう。

しかし判断をするのは、彼自身だ。

彼もそれを確かめるべく、社長に相談に行ったのだろう。

26時を回った辺りだろうか。

彼から再度、連絡が入った。

「ユイ？今からいつもの店来れる？」

「その声のトーンからして何か決めたような感じね。支度して行くわ」

彼達の行き付けのショットバーへ向かった。

「ユイちゃん、おはよ」

「マスター、おはよ」

「彼達なら上に居るよ」

2階へ上るとキムラくん、コダマくん、イシハラくんが来ていた。

「みんな忙しいのに済まない。ちよつとお前らに話があるんだ」

「何かを決した表情だな」

彼は1人1人の顔を見渡すと、大きく息を吸った。

「俺さ、店辞めて独立することにしたんだ」

「マジかよ？」

「ええ！」

「ずいぶんと急だな」

「ああ。もう社長にその意志は伝えてある」

「ちょっと店長！」

「と言うか、正直迷ってたんだけど社長に背中を押された感じだよ」「いつから着手するんだ？というかいつ退店しちゃうんだよ？」

「社長から今月末で抜けていって」

「本当に急転だな。でもこんなドタバタ劇もお前らしくて笑えるよ」「店長！俺はどうするんですか？」

「お前はお前で頑張って、店長を目指せよ」

「そんな…」

キムラくんやコダマくんは、彼を祝福してくれた。

イシハラくんは、親に見捨てられた子供のように泣きそうになっていた。

彼は独立することをいよいよ決めたのだった。

私としては、彼について行くだけだ。

その夜の彼は、酔っ払っていた。

私も彼の仲間も楽しく飲んでた。

イシハラ君を除いては。

前途多難、誰の目から見てもそう思うだろう。

まだ18歳にも満たない彼が、たった独りで始めるのだ。また悪い虫も寄ってタカって来るだろう。

ただその心配をさせないくらいのオーラが彼にはある。

何かをしてくれそうな気がする。

何かを成し遂げてくれそうな気を持たせてくれる。

彼には何かがある。

私も彼の為に何か出来ることがあるだろう。

同じタイミングで店を辞める決意をした。

本音は独立、仕事なんてどうでもいい。

彼のそばに居たい、その一心だった。

区役所に用事があつた私は、帰りに銀行へ寄つた。彼の通帳に記帳をしに行く為だつた。

彼より私の方が日中に散歩することが多い。

昼間に行動するのはとても苦手だ。

彼が色白が好きということもあつて、日焼け予防は異様なほどしている。

長袖に手袋、帽子にサングラス。

これらは必需品だ。

サングラスを掛けていても横断歩道が眩しい。

まだ雨が降つていれば、眩しさが半減される。

彼はほとんど通帳記帳をしない。

機械からはき出されるまでかなりの時間を要した。

「残高：4600万？振込まれてるわ」

私は自分の通帳も記帳すると帰路についた。

「ねえ、起きて」

彼は寝起きが悪く、なかなか起きない。

「おはよ。ちゃんと振込まれてるよ。4000万」

彼とソファに座るとタバコを渡した。

「もうやるしかないね。私お店辞めようかな？愛する人をそばで支えて行きたいと思うの」

「出資者と話がまとまるまで、ちよつと待つてて」

彼の夢や目標をそばで見守りたかつた。

例え事業が失敗したとしても、2人でどこか遠くで暮らせばいい。

私が稼げばいいと思った。

彼はやつちゃんと話し合いをする為、身支度すると出掛けた。

私は急にユミさんに逢いたくなつた。

「ユミさん、おはよ」

「ユイ？久しぶりだね。どうしたの？」

「ご飯一緒にどうですか？」

「いいよ」

早々に身支度を済ませ、駅でユミさんと待ち合わせた。

「どうした急に？マナブとケンカでもしたの？」

「うん。彼ね、キング辞めるの」

「あ！独立決まったの？」

「うん。迷つてた彼に、最後は社長が背中を押してくれたみたい」

「そうなんだ」

「私も店辞めようと思って」

「それが良いかもね。若い衆は？」

「イシハラくんつてのが彼にぞつこんで」

「一緒に行きたいけど義理があるからダメだつて？」

「うんうん」

「あの子らしいわ。じゃ誰も居ないの？」

「出資してくれた人が彼の下で働きたいつて」

「その人もぞつこん系なんだ？」

「だと思つ。だつて彼の方が6つも年下だつて話」

「そつか。もう独立するのか。想像より早かつたな」

ユミさんは感慨深げだった。

「ユイ、もしかして不安なの？」

確かに数千万の借金からスタートする。

全てにおいて不安であるが、彼がそれを感じさせないことを話した。

「不思議だけど、マナブを知ってる人間は、みんなそう思うだろうね」

「ユミさん、女として私は何をすればいい？」

「何かすることあると思う？」

「え？無いの？」

「ある訳無いでしょ。あの子の場合、女なんか足手まといになるだけだよ」

「そんな…」

「ユイは仕事どうすんの？」

「今の店はもう辞めるのね。で、彼の店で働く」

「じゃその店でフロアリーダーみたいなことすれば？」

「それだけでいいのかな…」

「マナブは経営者だとしても店に出るはず。内部で協力してやればいいのよ」

「そうですね」

「私もレセプションには行くから」

「ありがとう」

ユミさんと別れると店へと向かった。

「ユイさん、おはようございます」

「おはよ。店長、オーナーと連絡取れる？」

「どうしました？」

「今月でお店辞めるって話をしたいの」

「ええ！」

オーナーはすっ飛んで来た。

「ユイ、どうしたんだ？急に辞めるなんて」

「彼が独立するの。だからそれについていく」

「キングの店長だっけ？独立するんだ？」

「大丈夫。他の女の子を連れて行く行為はしないから」

「店としては、ユイが居なくなる損失が大きいよ」

「そんな訳で、オーナーよろしくね」

「何か店側がすること、残ってくれるようなモノはないかな？ギヤラとかでもいい」

「彼の店じゃなかったら、辞めるなんて言わないから。それは理解してね」

「しょうがないな。連絡くれよ。ユイ宛で花輪くらい出すから」
「ありがと」

オーナーとの話が終わるとリストへ向かった。

「店長、そういう訳だから今月末で」

「残念です」

「客にも女の子にも言わないで。もちろんイベントとかもしないで」
「どうしてですか？」

「客も女の子も私の移動先に流れたら損失でしょ？」

「すいません。そこまで気を使ってもらって」

「いいのよ。仲のいい女の子、数人にだけ話すようにするから」
彼ならここまで説明しなくても、理解していただろう。

やはりこの店のスタッフは、ただのウェイターだ。
まるで仕事が出来ない。

出勤してきて、時間が過ぎれば帰る。

その繰り返しなのだろう。

出世欲やギヤラ欲の欠片も見当たらない。

その日の営業が終わって、彼とラーメンを食べに行った。

「今日さ、店のみんなに辞めることを話したんだけどさ」

「うんうん」

「社長がイシハラも連れて行けだっさ」

「そうなんだ。良かったね」

「確かに引つ張りたい気持ちはあったけど、義理が先だからな」

「社長も分かってたんじゃないのかな」

「あの人なら…気がついてたかもしれないな」

以降、彼やイシハラくん、やっちゃんも多忙な日々が続くことになる。

「それからキングの店長にコダマが内定したよ」

「引継ぎしにきてるの？」

「明日からね。キムラとは一緒の箱に居たことあるけど、コダマは初めてだな」

「楽しみだね」

「ある意味そうだね」

引継ぎ業務と営業管理。

それに加えて出店する店選び。

彼は多忙を極めており、店選びが難航していた。

「いやしかし…参ったな」

「どうしたの？」

彼の店選びが難航していた。

同業が集まるような激戦区は、避けたいとのことだった。

「でも人の集まるところの方がいいんでしょ？」

「もちろんだよ。ただ系列店を持っているようなところには勝てないんだよ」

「まさか離れ小島のなところに出す訳もないしね」

「もうちよつと探しに行つて来るよ」

「いつてらつしゃい」

店を辞めることが決まってから、彼は睡眠不足になっていた。

私も同じ時間帯で生活しているので、かなり辛い。

しかし彼の前で、それは表現できる訳がなかった。

そのとき、私の体に異変を感じる事となる。

彼の独立で盛り上がってる最中、私は体の異変を感じた。

咳をしたとき、液体のようなものが口の中にあることに気がついた。

「何？」

それは少量の血だった。

咳込んでいた訳でもない。

ましてや大声を張り上げていた訳でもない。

私は翌日、病院へ向かった。

「外傷的なものはありませんね」

「そうですか」

「詳しく検査をするなら承りますけど、今のところ大丈夫そうなんです様子を見てください」

「分かりました」

特段、どこかが悪い訳では無さそうだった。

体調の異変を感じたら、精密検査をすればいい。

そう思いながら、病院を跡にした。

そして彼と私の退店する日を迎えた。

彼は出勤するとき、やっぱり切ないと言っていた。

そして、少し早めに家を出て行った。

私は彼ほど今の店に感情は無い。

確かに私に合っている仕事だと思ったが、それは仕事であって店ではない。

いつも通りの時間に家を出た。

店では仲の良い女の子、数人と店長しか退店の話はしていなかった。もちろん、客にも一切、話はしていない。店や客が困るといふのは、私にとってどうでもよかった。彼のように愛着も無ければ、割り切って仕事をしていた分、離れるのも楽だ。

いつものように制服に着替えて、メイクをする。

朝礼をして、指名客が来るまで待機する。

いつものように接客して、営業終了時刻を迎えたのだった。

私の希望もあって、終礼にも店を辞める話は伏せてもらった。

「ユイちゃん、今日さ、車で来てるから送ってく」

「ありがとう」

声を掛けてきたのは、チハルだった。

着替え終わると、僅かな私物をまとめて持って帰った。

「お疲れ様」

「ユイさん！」

店長がチハルの車まで見送ってくれた。

「お疲れ様でした。ユイさんには本当にお世話になりました」

「いえいえ。店長もこれから頑張ってるね」

「ありがとうございます」

頭を下げて、お礼を言う店長に少しの感情も無かった。

ミラー越しに見た店長は、涙を拭っていた。

「ああいうの嫌い……」

「だろうね。そう言うと思ったよ」

男なら、女に頭を下げて欲しくない。

しかもこんなことで涙を見せるなんて、女々しいにもほどがある。

「だから私は冷たいって言われるのかな」

「好みの差でしょ？私もユイちゃんみたいに、あんなのがいいと思えない」

「チハルもマナブくんみたいなの好み？」

「ユイちゃんが付き合ってたかったら、すぐ付き合ってたって言うね」「あはは」

優しいだけの男なら、世の中に溢れるくらい存在する。

私はそういう男は、優しさの押し売りと感じてしまう。

優しさとは、女が感じるところであって、押し売りされても困る。

彼に優しさを求めてないし、求めたこともない。

私が思うに彼は、キラキラしているくらいがちょうど良い。

その中でも私だけに見せる弱さや優しさに、胸がキュンとするものなのだ。

「私ってMなのかな？」

「マナブくんはSだよ。でもユイちゃんもどっちかというところだと思っよ？」

「彼の前だけMで、その他はSなのかもしれないね」

「それが1番しっくりくるかも」

そんな話をしているうちに、彼のマンションに着いた。

「ユイちゃん、お疲れ様。これ…私のセンスだけど良かったら着て」

チハルは、服をプレゼントしてくれた。

「いいのに。ありがとう」

「また連絡するね。つまなくなったら、そっち行くかも」

「あはは。彼に言うておくよ。ありがとうね」

「また落ち着いたら連絡してよ」

「うん、分かった」

私と仲が良いチハル。

お互いに性格を知っているから、こんなときもドライだった。

「じゃお疲れ様」

「またね」

彼は営業が終わってから、真っ直ぐ帰宅すると話していた。

「送別会とかやってくれないの？」

「社長が仕切りでやってくれるって話なんだけど」

「そうなんだ」

「俺から断ったんだ」

「どうして？」

「ジメツとしちゃうのが嫌だから。真っ直ぐ帰ってくる」

「じゃ待つてるね」

お祭り騒ぎが好きな、彼らしくない意見だった。

午前3時を過ぎた辺りにインターホンが鳴った。

「はい」

「両手塞がってるから、ドア開けて」

玄関の鍵を開け、ドアを開けると彼やキムラくん、コダマくんが居た。

「おかえり…すごい花束の量だね！」

「ユイちゃん、プレゼントとかはどこに置けばいい？」

彼はテーブルに花束をどっさり置くと玄関に戻ってきた。

「適当に置いといて。後で片付けるから」

「じゃあ俺ら帰るからよ」

「オープンの日とか決まったら連絡くれよ」

「分かったよ。ありがとうな。お疲れさん」

「本当に送別会行かなくて良かったの？」

「こんな胸を叩く痛みや想いを感じることはもう無いと思う。だから浸りたくてな」

「そうだったんだ。だから断ったんだね」

彼の荷物を持って、リビングへと進んだ。

玄関の方でドスつと音がした。

振り向くと、彼がうずくまると声を荒げて泣き出した。

そんな彼を見て、私はタオルを持っていった。

「終わっちゃったんだね。切ないよね」

私は彼に起こして、抱きついた。

彼の気持ちが痛いほど分かった。

涙がポロポロとこぼれ、泣き顔なのに笑顔で彼に話した。

「人生にはこんな素敵な想いをする時もあるんだね」

こんな子供のようにむせび泣く彼を初めて見た。

いつも彼は感情をストレートに出す。

彼に嘘偽りは無いのだ。

「あなたの喜びや悲しみは、全部私も同じように感じてるから。だから今の気持ちもすごく

分かるの。だからもう泣かないで…」

新しい門出には、別れが付き物だ。

彼にとってその別れは、とても大きなものだったのだろう。

キングという店を、彼は青春だったと言った。

キングを辞めた今日は、彼の卒業式だったのかもしれない。

卒業と同時に、必ず始まりはやってくる。

私は彼を一途に愛し、着いていくだけ。

彼はどんどん立派な男へと成長していく。

そんな彼を愛しく想う。

彼を心の底から愛している私。

私はやっと素直になれた。

自分のことをやっと好きになれたんだ。

彼や私が店を辞めてからしばらく経った。

彼の出店する場所は、自由が丘に決まり、その準備で多忙を極めていた。

私は比較的、頼まれることも少なく、店内のデザインやロゴを構想していた。

彼が出掛けた後、昏過ぎに電話が鳴った。

「ユイ？久しぶりだね。元気？」

「えっと…誰？」

「メグミだよ！」

「メグ！」

高校のときの親友だったメグミからだった。

久しぶりの電話で1時間くらい長電話をしていた。

今夜、彼のマンションへ遊びに来るといって話で終わった。

「ユイ！今話せる？」

「いいよ」

「今夜、高校の同級生が遊びに来たいって言うんだけどいい？」

「いいけど…俺は何時になるか分かんないよ？」

「遅くなりそうなら電話して」

「分かった」

夕方になって、メグミが遊びに来た。

「いらっしやい」

「彼と同棲してるのね。その噂の彼は？」

「仕事で出ちゃった。何時になるか分かんないって」
「そうなんだ」

「で、話って逢って話すような重要なことなの？」

「バレてたか…」

メグミには、高校時代から付き合っている彼氏が居た。

話したことないが、学校で見掛たことはある。

当時から別れたり、寄りを戻したりと訳が分からない2人だった。

「彼が浮気をしたから、別れたのね」

「うん」

「別れた後に私も前の彼と逢って、えっちしちゃったの」

「ふーん」

「結局、謝ってきたから寄りを戻したんだけどね」

「結果はいつもと同じね」

「元彼と逢ってたことがバレちゃって、それは俺の浮気の仕返しか
って」

「って言われたの？浮気をした彼から？」

「そう。でも別れてたんだから、彼には関係ないじゃない？」

「そうだけどね」

「おかしい？」

「私の場合、そうはいかないかなって」

「別れたら次の人って簡単にいけないよ」

「ユイってそんなタイプなんだ？」

「そう何人も付き合ったこと無いけど、今の彼は特別かな」

「すごいね。ユイがそんなこというなんて。圭介のときもこんなじ
やなかったのにな」

「たぶん今の彼は、私にとって最後の男になると思うよ」

「ええ！そんなにすごいのか？」

「何かね、理屈じゃないのよ」

「ルックスがいいとか、優しいとか、金持ちだとかってこと？」

「そう。彼はそういうのを超越した存在なのよ」

「そんな男なんて世の中に居るのかな？」

「しかも彼は私より年下……」

「あり得ない……ユイじゃないみたい」

「初めて逢ったときに、運命の人に逢ったみたいだね」

「もしかして……」

「彼もそう言ってたよ」

「キヤー！」

「だからメグの気持ちにはなれないってのが本音」

「なるほどね」

メグミと私の男話で、また数時間話し込んでいた。

「彼から電話だ」

「ねね、替わってよ」

「もしもし」

彼はイシハラさんとコマツさんと帰ってくるという。

「部下と一緒に帰ってくるって」

「年下なのに部下が居るの？」

「あと数ヶ月したら会社社長になるんだけどね」

「は？」

「彼って、夜の業界じゃちょっとした有名人なのよ」

「ホスト？」

「キャバクラの店長やってた人。逢ったときはまだ支配人だったかな」

「ユイの店に来たの？」

「客としてね。でユミさんとユカさんの店の支配人だったの」

「ユミ、ユカ先輩と？すごい偶然の繋がりだね」

「ちよっと待って。電話だ」

「はい」

「飯食いに行くから、下に降りて来いだって」
「『はい』だって。ユイちゃん可愛い！」
「うるさいよ」

身支度と戸締りをして、マンションの下に降りていった。

「おかえり」

「おお。友達も後ろに乗れよ」

「こんばんわ、初めまして」

「ばんわ。えっと何ちゃんだっけ？」

「メグ。高校の同級生なの」

「マナブです。こっちがコマツでこれがイシハラ。よろしくね」

「こんばんわ」

「コマツくんが運転する車が、駅の方へと向かった。

「メグは何か食いたいもんある？寿司でいいか？」

「あ、はい！」

「ボス、お台場まで足伸ばしませんか？以前行ったところがすごく美味いんですよ」

「コマツに任せるよ」

「イシハラさん、ここです。座敷の予約入れてください」

コマツくんは、携帯電話をイシハラくんに渡した。

「いらっしやいませ」

「予約したコマツですが」

「どうぞこちらへ」

「ボス、とりあえず生でよろしいですかね？」

「いいんじゃない？適当に刺し盛やってもらって。にぎりは後でいいや」

「はい」

「イシハラ、例の物件の周辺情報はまとまったか？」
「はい。自由が丘の駅から徒歩2分で昼間は学生やベビーカーを押して歩く主婦が多いっす」
「ネオンはどうなんだ？」
「残念ながら駅の反対側です」
「物件の周りはゼロなのか？」
「テナントビルの最上階です。こちら側にはそれしかありません」
「反対側は何店舗くらいあるんだ？」
「少なくとも見積もっても50〜100はあるかと」
「チャンスだな。店舗の現状は？」
「スケルトンの60です」
「他テナントはどうだ？」
「1階はブティックが2軒に寿司屋、2階からは同業関係で1フロア1店舗です」
「コアタイムは？」
「19〜26時で週末は27時までっすね」
「客数と玉数は？」
「頭で100がコンスタントに出るようです。玉はマイナス10くらいが多いようです」
「コマツ、許可関係に問題はないだろう？」
「そうですね。テナントビルだけに問題は無いと思います。念の為、裏を取ります」
「明日から2人は周辺の店舗の情報収集。コマツは法人登記の方も回ってくれ」
「分かりました」
「うっす」
「飲んでも構わん。些細な情報も見逃すな」
「はい！」

打合せをしている3人を見て、メグミが耳打ちしてきた。

「彼すごいね」

「でしょ？」

打ち合わせが終わると見るや、メグミの話をみんなに相談してみた。

「イシハラさんとコマツくんはどう思う？」

「別れてる間の2人に、何があってもいいんじゃないですか？」

「メグちゃんは悪くないと思いますよ」

「マナブくんは？」

「どっちの話を聞きたい？」

「はい？」

私には彼の問いの真意を知っていた。

「マナブくん個人の意見」

「後で文句言っなよ」

「は、はい」

メグミの生唾を飲み込んだ音が聞こえた。

メグミは彼に意見を求めた。

彼の意見はこうだ。

彼氏と別れてすぐに違う男と連絡を取ったのは、自分がそうなりたかったから。

彼への仕返しではなく、違う男と遊びたい願望があったからだという。

本当の恋愛を経験していないから、彼との付き合いがママゴトの延長だからだという。

幾度も別れ、幾度も復縁して、それが楽になってしまってるという。そして今を繰り返してるうちに、本当の恋愛が出来なくなってしまう。

しかし男は、自分の浮気を棚に上げ、彼女の行為を許してくれないという。

いつかは、本当の別れが訪れると彼は予想した。

「このまま寄り戻しても、結婚したとしてもお互いに今を続けるだろうな」

「そうですか…」

「恋は盲目とよく言ったもの。今は何を言われてるか分からんだろうな」

「だってさ、メグ。私もそう思うよ」

「はあ…」

「胸が張り裂けそうになったり、相手を思っただけで夜も眠れないときとかある？」

「無い…ですね」

「ユイは？」

「私はヤキモチ焼きだから」

「メグは今のと別れた方がいい。もつと傷付いて涙を流して辛い思いが経験出きるといいな」

「はい」

「もちろん、今のままで好転する場合も無いとは言い切れない」

「五分五分つてことですか？」

「メグ、それは限りなく薄い五分五分よ」

「ただマンネリを打開したいから、異性と遊ぶつてのは根本的な解決にはならないんだよ」

「私とダーリンの間に、マンネリなんか存在しないもん」

メグミはみんなが自分の見方で居てくれると思っていたのだろう。

その後は、談笑する中で1人考え込んでいた。

みんなとは現地で別れた。

メグミはコマツくんとイシハラくんが送ってくれた。

「友達は大丈夫か？」

「誰にもあのようなこと言ってもらえないのよ。だから私のところに来たと思う」

「俺の意見を求めているようには、見えなかったけどな」

「私だったら、あんな優しい言い方なんて出来ないもん」

「そうか」

私も彼とは同意見だった。

メグミは学生気分の恋愛が扱けないだけ。

女はモテると体を許すのは、同じと勘違いする人がいる。

ほとんどの男は、目の前で女が裸で居れば、行為に及ぶだろう。酒が入っていれば、なおさらのこと。

その場数をこなしたからといって、モテている訳ではない。

私から言わせれば、ただの『ヤリマン』なだけだ。

「彼氏という存在を作らなければ、それでいいと思うけどな」

「過去を気にする男とは、付き合えないけどね」

「何人経験があるかとか、聞く男って居るよな。女も居るけどな」

「そういうの気になる？」

「俺？」

「うん」

「時間を巻き戻せるならって思うけど、無理な話」

「だね」

「なら、こだわってもしょうがない」

「知らない方がいいってこと？」

「包容力や立派な男なら、知ったとしても気にしない」

「何かそれも寂しいね」

「俺はまだ知らない方がいいってランクだな。ユイの過去は知らなくもいい」

「知ったらヤキモチ焼く？」

「ヤキモチじゃなくても、嫌な気分になるな」

「それ聞いて安心した」

彼はメグミに言った。

女は傷付いて、磨かれると。

私は磨かれた女なのだろうか。

磨かれていたのなら、何時がそのターニングポイントだったのだろうか。

そんな恋愛なんて、彼に逢うまで経験したことはない。

「ユイの場合は、俺の中で全て経験してきてるんだろうな」

「幸せだよ？」

「俺達は、全て言わなくても通ずることが多々ある」

「そうだね」

「その中で消化しているんだろう」

「ふーん。不思議な感じ」

「あはは。俺から見てもユイは大人になっていつてるぞ」

「良い女になってる?」

「ああ、自慢できるくらいな」

「愛してる」

「俺も愛してるよ」

やっぱり彼と私の付き合いは、理屈じゃない。

彼は私のことを出逢って成長したという。

私は彼の全てを、受け入れたいと思っている。

心も体も気持ちも言葉も全部だ。

その想いを持てたのは、彼との付き合いからだと思う。

何より彼を想う私を、私自身が好きになれたのだ。

性格が変わったような気がした。

彼という大きな星を中心に、衛星の私がそばを離れずにずっと一緒に回っている。

死ぬまでずっと一緒にいたい気持ちで満たされていた。

メグミに再婚の話がされたとき、正直、何も言えなかった。

こればかりは、相手あつてのこと。

私は、バツ1なのに変わりはない。

私の気持ちは1つ。

彼の絶対的存在で居続けたい。

この先、一生、彼に添い遂げたい。

しかし彼は今、目標や夢に向かって、全力で向かっている。

今じゃなくてもいい。

私は彼からのプロポーズを待ち続ける。

彼との将来への想いを大切にしたい。
まだ彼は17歳なのだ。

思いもしないところで、彼の『17歳』が障壁となるのであった。

自由が丘で買い物をした後、オープンカフェで休憩していた。

「よう！久しぶりだな」

「親分！」

「座ってもいいか？」

「あ、どうぞ」

「こんな時間に起きてることあんだな。どうだ元気にやってんのか？」

「はい、店を先日辞めて、この近くで店を出そうと計画しているところですよ」

「そうか。何か困ったことがあれば言ってこいよ。この近所に事務所があるんだ。おい！」

彼が親分と呼ぶ男は。若い衆の一人を呼んだ。

「これが俺の名刺だ。変なことに使っんじゃねえぞ」

「分かりました。あの……」

「あいつか？お前が許可したからまだ店やってるぞ」

「許可だなんてそんなレベルの人間じゃないですよ」

「ユミがお前を試せて言った内容が分かるよ。その歳で独立するんだからな」

「そんな立派なものではありませんよ」

「悪い！野暮用だ。またな」

「はい。失礼します」

「もしかして？」

「蘭三郎のママを預かってる親分だ」

「やっぱり」

そのとき、彼の携帯が鳴った。

「イシハラ達も自由が丘に居るんだって」

「あ、ほんとだ」

「おはようございます」

「おはよ。何だ今日オフでいいつて言つたろ？」

イシハラさんとコマツくんは、顔を見合わせて笑った。

「コマツさんが朝からじっとしてられないって電話があつて…俺もそんな感じでして」

「イシハラさんに付き合ってもらつて、いろいろ用足しをしていました」

「そっか」

「で、ボス…問題が発生しまして」

「どうした？」

「店舗を管理してる不動産屋なんですが、借主が18歳だつて言つたら難色を示しまして」

「あ？契約書を交わすだけじゃなかったのか？」

「家賃も90万まで下げさせたんですよ。契約書や約款も目を通したんですが何もそのような

誓約はなかつたんです」

それは、当然のことと言えば、当然のことだった。

厳密に言うと、彼はまだ17歳だった。

確かに来月には18歳になるが、世間では通用する年齢ではない。特定の地域で、特定の業界でスーパースターの存在であつてもだ。

私の頼みであれば、名義を貸してくれる客はたくさん居る。

それはもちろん、社会的地位や名声もある人間達だ。

しかしここで私のコネクションを使ってしまうと、彼のプライドが傷付く。

黙って見ているしかないのだが、不思議と期待させる何か彼にはあつた。

現状としては、彼も何らかの手段を講じることが出来なかつた。

そして幸運は、やはり彼の元に降りてくるのだった。

自由が丘のオープンカフェに居たときだった。

「よう！久しぶりだな」

「親分！」

彼が親分と呼んだ男は、蘭三郎のママを預かっているという人だった。

蘭三郎のママの一件では、私も業を煮やした。

しかし彼とこの親分の話し合いで、水に流せる結果となつたのだった。

しばらく2人は談笑していた。

この親分は、この辺りを仕切るヤクザの組長とのことだった。

若い衆を何人も連れていたが、周囲に迷惑が掛からないようにしている風だった。

傍から見ると面白いことに気がついた。

17歳の少年とヤクザの親分が、オープンカフェで談笑しているのだ。

しかも冗談も交えながら、仲良く話している。

私は思わず、微笑した。

「これが俺の名刺だ。変なことに使っんじゃねえぞ」

「分かりました。あの…」

「あいつか？お前が許可したからまだ店やってるぞ」

「許可だなんてそんなレベルの人間じゃないですよ」

「ユミがお前を試せて言った内容が分かるよ。その歳で独立するんだからな」

「成功するかはまた別の話ですよ」

「そうか。何か困ったことがあれば言ってこいよ。この近所に事務所があるんだ」

親分は急用が入り、街の中に消えていった。

「ねえ、ヤクザなんかと仲良くして大丈夫なの？」

「付き合ってる訳じゃないんだ。ちゃんと線は引いてる」

「ならいいんだけど…」

心配していた。

ヤクザはヤクザだからだ。

自分の都合がいいときには、天使のような顔をする。

敵に回せば、ただ付きまとう悪魔になる。

しかし彼には、先見の明がある。

人を見抜く見識がずば抜けているのだ。

その能力を、彼自身を信じるしかなかった。

イシハラくん達がやってきた。

「ボス、やっぱりダメっすね」

「年齢の話聞いてから、態度を硬化させたままですよ」

「今からちよっど行ってみるか。ユイ1000万おろしてきてくれ。見せ金に使う」

「分かった。ボディガードでイシハラくんついて来て」

「了解です。キッチリお守りしますよ」

「じゃコマツは、俺を案内してくれ」

「はい」

彼の指示によって、4人は別れて行動した。

「マコちゃんとは仲良くやってるの?」

「ボスに嫉妬してますよ」

「あはは。何か分かる気がする」

「どうしてっすか?」

「私もたまに思うときあるから」

「俺にとってボスは、絶対的存在なんすよ」

「私にとってもそうよ」

私とイシハラくんは、彼を想う気持ちが似ていた。

「人生が変わったってどうか…」

「生きる道が変わったって感じっすよね」

「私の場合は、生きる術が分からなかったの」

「俺もっすね…」

同じ気持ちを持った2人が彼を慕う。

「俺は何があってもボスに着いていきます」

「私もよ」

「コマツさんも同じっすよ。みんなでボスを盛り立てましょっよ」

「そうね」

彼の口座から1000万をおろすと合流地点へと向かった。

「おろしてきたよ」
「ボス、どのようにされるつもりです？」
「全く無策だよ。どうしようか？とりあえず話してみよう」
彼は不動産屋へと入って行った。

「こんにちわ」

「よう！今日は何度も逢うな」

「親分！こんなところでどうしたんですか？」

「トラブルの対処の相談だ。お前こそ場違いだろう？」

彼は店を借りるのに18歳では借りれなかった旨の説明をした。

「金はちゃんと払うんだろう？」

「もちろんです」

「じゃ俺が保証人になってやる。社長、それで問題は無いだろう」

「親分さんがそう言うなら、一向に構いません」

「社長さん、本当によろしいですか？私は親分無しでもお願いしようとお伺いしています」

「この親分がこのようなことをおっしゃるような方ではありません。あなたはそれほどの方

なのでしよう。信用致しますよ。では明日にでも契約書を用意致しますので」

「分かりました。親分ありがとうございます」

「オープンの日が決まったら教える。花輪くらい出してやるよ」
あっけない結果だった。

彼はこれで店を契約することが出来たのだ。

やはり彼は、幸運な星の下に生まれているのだ。

行動を起こさずに何もしなければ、結果は生まれてこない。

もちろん何も始まらない。

暗く狭い場所で眩くだけでは、誰も耳を貸さないだろう。誰も助けてはくれないだろう。

彼はそれを身をもって実行したのだ。

立ち止まっていたのは、明るい未来などありはしないと私達に教えるように。

「あれ、ユイさん？どうかされました？」

驚きと同時に感心していた私に、イシハラくんが話し掛けてきた。

「いや…ラッキーだなんて。交渉に当たって無策だって言ってたからね」

「俺らは結果は見えてましたよ。ボスなら何とかするんじゃないかって」

「もちろん根拠はありませんけどね」

コマツくんも同調し、笑いながら話した。

「やっぱ何か持ってるよね。うちのやつて」

「彼女なのに今頃気がつきました？」

「何よ。知ってたに決まってるでしょ」

「ボス、ユイさんが契約するのに何か心配してたらしいですよ」

「お前らほど楽観的ではなかったってことじゃないのか？」

「いやいや、俺達はボスの強運を信じてただけっすよ」

「何を根拠の無いことを言ってるんだ」

「私もイシハラさんと同じです。今日、契約するんだろうなって思ってた」

「コマツまで何を言ってるんだ」

イシハラくんやコマツくんは私より、彼を信じているかもしれない。

大の男が残りの人生を他の男に委ねている。

彼が言うように楽観的なのか、他力本願なのか。
ただ、彼を中心として結束が堅いのは間違いない。

店舗の契約を躓きながらではあったが、何とか終わらせた。

今後の出店準備について、彼のマンションで集合した。

「ボス。私は店舗所在地も決まったんで、法人登記で動きます」

「そうだな、頼むよ。あと名刺の発注も頼む」

「ボス以下の役職と社名はどうします？」

「社名か。全然考えてなかったな…」

「ユイ企画なんてどう？」

「ユイさん。社長と別れたら困っちゃいますよ」

イシハラくんの突っ込み。

失礼にも程がある。

「イシハラくん…私とマナブくんは別れることはありませんから！」

「株式会社マイカワでいいんじゃないですか？後株か前株のどちらかで」

「決まり！」

その場に居た全員が声を揃えて言った。

誰かが主張する訳でもなく、意外とあっさり決まった。

「役職はいかがなさいますか？」

「俺はいいとして、イシハラが営業部長兼店長、小松が営業主任、ユイが経理課長でいいか」

「コマツくん。私の苗字さ、マイカワにしといて」

「ユイさんって本名なんですか？」

「結ぶと書いてユイよ」

「分かりました」

「ボス…いいんすか？」

「う、うん。いいんじゃない」

「もっとハッキリ言ってよ」
イシハラさんとコマツくんが大笑いしていた。

私なりに結婚をアピールしたつもりだったが、周囲の笑いで打ち消された感じた。

女が交際している彼の苗字を名乗りたいと言ったのだ。

勘が鋭い彼なら、気がついていないはずなのだが。

焦っている訳ではない。

でも彼の妻となる、既成事実が欲しがっていたかもしれない。

彼を信じていれば、試す必要は無い。

1人の女として、ちょっとしたわがままを言ってみたかった。

「じゃ今日の動きを指示する。コマツは法人登記関係と名刺発注、イシハラは許可関係を頼む」

「了解すす！」

「分かりました」

「必要書類があったら揃えるから連絡をくれ。ユイは俺と不動産屋で契約した後、内装屋と

打合せでいいな」

「はい」

「それぞれ終わり次第、店に集合だ」

彼の陣頭指揮の下、方々に散っていった。

不動産屋で契約を済ませると店に向かった。

「店長！」

「ごめんごめん。時間回っちゃった？」

店の内装や水回り工事、ソファから装飾関係、看板の発注をキングの常連客に頼んでいた。

「この最上階なのよ」

「いいトコじゃない」

私達は、エレベーターに乗り込んだ。

「あれ？ユイちゃんですよ？」

「うちのマイカワがお世話になっております」

「店長、結婚してたの？奥さんがユイちゃん？」

「ほら、着いたから降りて降りて」

「いいな。羨まし過ぎる……」

気分が良かった。

羨ましがられる付き合いというのは、私が目指しているところだったからだ。

エレベーターを降りてシャッターを開ける。

「おおー結構広いね」

「スケルトンだからだよ。ユイ、店内のイメージ湧いてきた？」

「何となくね。ちょっと構想練ってみる」

コンクリートが打ちっ放しの壁に、配管が剥き出しの天井。

柱が2本あるだけで、工事現場に居るようだった。

「図面は帰ったら渡すよ」

「うん」

エレベーターのドアが開いた。

「店長水臭いなー。うちなら協賛いっぱい出すよ」

酒屋と名乗る男もキングの常連だったという。

「ありがとう。ちゃんと契約するからさ」

「あれ？ユイちゃんじゃない？」

「店長の奥さんだよ」

結婚はまだしていないが、私も彼も否定はしなかった。

「ええ！いつの間に…ユイちゃん店辞めたでしょ？」

「うん。ダーリンのそばに居たいから辞めたの」

「かー！こんな良い女にそんなセリフ言われてえな」

「お前と店長じゃ差があり過ぎるだろ」

今度は、イシハラくんが他の誰かを連れて、エレベーターから降りてきた。

「店長！お久しぶりです。うちの店がここの1階なんですよ」

「おー。そうですか」

彼もキングの常連客だと言い、同じビルにブティックを経営していると云った。

「制服でもお作りしましょうか？」

「お願いしちゃおつかな」

「あ、ユイちゃん？」

「どうも」

「店長の奥さんだよ」

「すごい2人が一緒になってるのね……」

「そっか…俺達と店長とはどのくらいの差があるんだろうな。幸せの差っていうのは……」

「コラ！俺達って一まとめにするな」

「イシハラ。コマツは？」

「まだ連絡ないっすね」

「コマツってキングに来てたあのコマツ？」

「そうですね。今や弊社の人間です」

「そうなんだ。店長は本当に俺達、常連客のことまで考えてくれてたんだね」

「みなさん！もう店長ではないですよ。弊社のボスです」

「ボスカ。俺達もそう呼ぶことにすつか」

「ボス！」

彼の人柄が分かる光景だった。

受けた恩は義理で返す。

コップ1杯の水を大海で戻すような性格なのだ。

「お疲れ様です」

コマツくんが店に戻ってきた。

「おーコマツだ」

「これじゃキングの同窓会だな」

スケルトンという殺風景な店内で1時間以上、立ち話をしていた。

彼を中心に、色んな業種の人たちが集まって談笑した。

「ボスがなぜあんなに人気あったのが、分かるような気がしました」

「ユイも何気に知られてたな」

「そうですね。駅の向こう側じゃ、敵無しでナンバーワンだったんですから」

「ピース！」

私はみんなに向かってブイサインを出しておどけてみせた。

私の気のせいかもしれないが、彼は冗談を言う機会が減ったように思える。

みんなで居るとき、彼が先頭になってふざけたり、おどけたりして笑いを誘った。

今ではすっかり、そのポジションはイシハラくんが陣取っている。

店のオーナーとして、会社の代表取締役として、みんなのボスとして。

それらが足枷となって、彼の陽気な部分が打ち消されてしまっているのだろうか。

仕事でもプライベートでも、厳しい表情が目につく。

もちろん、その大役に立ち向かい、果たそうとしている。

彼は常日頃、楽しむのは、笑うのは後でもいいと話す。

その前に、メンタル面が壊れなければいいが。

ユイ31

出店の準備で多忙を極めていた彼。

コマツくんは、会社登記や許可、資格関係で動き回っていた。イシハラくんは、近隣店舗の情報収集と、スカウトをしていた。彼は、業者との打合せや部下への指示、営業スタイルを考案していた。

3人は仕事のほとんどを仕事に費やしていた。

私に気を使ってくれたのか、2人つきりで食事をする時間を取ってくれた。

「わざわざ時間取ってくれたりした？」

「もちろん」

「ごめんね。気を使わせちゃって…」

「可哀相だとは思ってたよ」

「本当に？」

「付き合ってから、どっかに連れて行ったのは、正月だけだろ？」

「そうかもね」

「丸一日オフって日も作れないからな」

「しょうがないと思ってるよ。でも全然、我慢出来る」

「そうか。俺は強がるけど、ユイは強がるなよ」

私の全てをお見通しだった。

その彼の一言で、肩の力が抜けた。

私と彼は、久しぶりにゆつくり話せた。

「ちよつと飲みにも行くか？」

「静かなところがいいね」

「決まったところしか行かないからな。ユイはどこがいい？」

「一緒ならどこでもいい」

「じゃ酒買って、部屋で飲むか」

「私も今、それを考えてた」

「コンビニへ寄ってから、帰宅した。」

「1つ聞きたいことがあるの」

「何？」

「この頃、楽しくない？」

「どうして？」

「前より冗談言わなくなったり、笑顔が少ないような気がして」

「全然そんなことないと思うけどな」

「私の目から見て、明らかに違うように見えるよ」

「本音言おうか？」

「う、うん」

ネガティブな私が現れた。

私が主因となって、そうだと言われたらどうしよう。

足手まといになっていると言われたらどうしよう。

彼は仕事一本だと言った、ユミさんの言葉が頭を過る。

「今、すごい楽しいよ」

「そ、そうなの？」

「味わったことの無い、楽しさで満ちてるよ」

「でも表情が以前と違うような……」

「ゲラゲラ笑うような楽しさじゃないんだよ。何て言うかな……」

「実感するようなの？」

「それが1番近いかな」

彼はこれから商売をやる準備が楽しくてしょうがないと言う。

「プレッシャーとかはないの？」

「あるよ。今はそのプレッシャーも心地良いと言ったらカッコ付け過ぎだけどね」

「それに近い感覚なんだ」

「だな」

「すごいね」

「俺がすごくない男と思った？」

「世界一の男だと思ってるよ」

「だろ」

今の彼には、自信過剰も良く似合う。

「でも全てに於いて怖いのが、正直な気持ちだな」

「え？」

「ユイと結婚して子供が出来て」

「うん」

「路頭に迷わず訳にはいかない」

「はい」

「イシハラやコマツも、俺を信じて着いてきた。あいつ等も裏切る訳にはいかない」

「会社と従業員が増えれば増えるだけ、怖さが増す…?」

「俺は結果が構築される毎に、自信が積み重なっていくタイプなのよ」

「分かる気がする」

「良い結果を産むまでが、きっと大変だろうな」

「大丈夫、私がずっとそばに居るから」

「俺はユイが居ないとダメだから、助けてもらおうよ」

彼が見せた意外な面々。

この夜の話の内容は、しばらく私以外には耳にすることはないだろう。

みんなは彼をスーパーマンのように思っている。でも経験が裏打ちされた自信がないと怖いと暴露した。きつとそれは誰でもある気持ちなのだろう。

私はどんな状況においても彼のそばで支えたい。愛してくれなくてもいい。

私が彼を愛することを認めてくれれば。

その夜は、私も酔った。

私にしか言えないことをたくさん話してくれた彼に、喜びを隠せず
に居た。

少女のように彼に甘えた。

その時間はゆっくりで心地良く、とても幸せを感じた。
イチャイチャしてるうちに、私からえっちを求めた。

翌日、目が覚めると彼はすでに出掛けていた。

時計の針は、15時を指そうとしていた。

「やだ…」

寝坊もいいところだ。

おそらく、彼は午前中から仕事に出ているはずだ。

店に向かう支度をしたとき、異変を感じた。

激しいめまいが頭を襲う。

ベッドから立ち上がろうとしたが、そのままベッドに逆戻りし倒れ
込んだ。

明らかに通常ではない、動悸。

確かに昨夜は飲み過ぎた。

貧血だろうか。

しばらくすると体に力が入るようになった。

この1年で突然、具合が悪くなる。

病院に行ったが、問題は無いだろうと言われる。これから彼の仕事が本番を迎えるのだ。それまでに体調管理をし、万全の体制で挑まなければ。やはり、病院で事細かに調べてもらおうと思った。

店舗契約から2週間が経過していた。

内装工事は、彼の出店を逸早くさせようと突貫工事をしてくれた。た。

その他、法人登記や許可関係も順調に進んでいた。

一段落すると、みんなで食事をしていた。

「ねえ。明日と明後日んだけど、親戚に不幸があって千葉の方に行くことになったの」

「そうか。近い人なの？」

「私の母親の兄。だから私の伯父になるの」

「分かった。じゃあ行ってきな」

「私が居なくても大丈夫？」

「ん？大丈夫だよ？」

「私無しで2日も生きていけるの？」

「え？あ！寂しくなるけどしょうがないよな」

「私、2日間も離れて泣いちゃうんだらうな。可哀相に…」

「あの…俺ら席外した方がよろしいですか？」

これは病院に行く為のカムフラージュだった。

私の体に、何か重大なことが起こっているような気がしたからだ。彼に真相を隠す行為は、さすがに後ろ髪が引かれる思いだった。

「俺らは大阪にでも行くか。流行の発信源は大阪だからな。研修を含めて2泊3日くらいで」

「あーあ。みんなが大阪に行っている間に、ユイは孤独死していくんだ。可哀相に…」

マナブくんもマナブくんだ。

何もこんなときに大阪に行くことはないのに。

本当のことを言っていない私も悪い。

大人しく病院へ検査に行こう。

彼が居ない間、じっくり病院で調べてもらうことにした。

ユイ32

体の異変を感じた私は、検査入院の予約を取った。彼の居ないマンションは、寂し過ぎる。私は母の居る、実家に帰ることにした。

「ただいま」

「おかえり」

母はいつもと同じように私を出迎えた。

「何かあったの？」

「ううん。ちょっと調子悪いから病院へ検査に行こうと思って」

「また彼に言ってないんだ？」

「そういうこと…」

睡眠時間もままなら無いほど、多忙な彼の言えない事情を話した。

「いよいよ、ユイも分からない女ね」

「そう？」

「そんなことも気軽に言えないなんて、おかしいと思わない？」

「今みたいな時期じゃなかったら話してたよ」

「そうかしら？」

「たぶんね」

母の言い分は、十分分かる。

ただ私は、彼の足手まといになりたくなかった。

「彼は仕事に対して、ストイック過ぎるのね」

「大きな仕事をやり遂げようとしているのよ」

「母としては、娘の心配をするわよ」

「どんな？」

「ユイに何かあったときに、彼が仕事だったらどうするの？」

「必ず掛け付けてくれるわよ」

「だといいけどね」

「それは信頼関係あるもん」

「気を遣い合うのもいいけど、その辺はハッキリさせとかないと」

「何かテレパシーみたいな感じるから大丈夫」

「キリのいいところで、ご飯でも食べに行こうか」

母と行き付けのお寿司屋さんに行った。

私とは母は、少しお酒を飲んでしばらくすると帰宅した。

「はい…」

「ユイ!ごめん、寝てたの?」

「今から寝ようとしてた」

「もうホテルなんだ。こっちはこれからお通夜なの」

「喪服持って行ったっけ?」

「ううん。母親に持ってきてもらったから。眠そうだからまた電話するね」

「あいよ。またな」

アリバイ工作ではないが、彼に連絡を入れておいた。

彼がこの時間に寝ようとするのは、おかしい時間帯だ。

やはり疲労が蓄積されているのだろう。

私も明日は、人間ドックだ。

早めに休むことにした。

私は朝早くから、病院へと向かった。

精密検査を受ければ、何らかの疾患や臓器の異常や健康度などを把握できる。

異常が無かったとしても、概ねの健康問題について助言、指導を受けられる。

人間とは不思議なもので、関係の無い人間に大丈夫だと言われても

信じない。

しかし専門知識を持っている人間に説明されると納得する。今の私が欲しいのは、医者から大丈夫という一言が欲しいのだ。

病院から勧められたコースは、半日で終わるコースだった。

検査項目の多くは、その日の内に結果が出るものが多い。

専門機関に移行する項目は、数日から1週間を要するという。

問診をするのに、看護婦がやって来た。

「食事を最後に摂ったのは、何時間前ですか？」

「30分くらい前です」

「え？あ…はい。起床されてからお茶やコーヒー等は飲まれましたか？」

「はい。先ほど受付で待っているときに」

「えっと…人間ドックは初めてですか？」

「そうですね」

看護婦は困っている表情だった。

通常、前日の21時くらいから胃の中は、空にしないといけないらしい。

またコーヒーも糖の値が正常に出ないようにとのことだった。

食事を摂って、コーヒーを飲むと調べるのに別料金を要すると説明された。

「構いませので、お願いします」

指定された番号に沿って、順番に回っていく。

身長体重は、学生時代から変わらず、150センチ、37キロだった。

血圧はいつも通り低く、70の30で低血圧と診断された。

その後、尿検査、採血や心電図、レントゲンに胃カメラの順番に回

った。

最後に診察を受けると、現状での色々な点を注意された。今何か合ってもおかしくない、血圧の低さ。シヨック死しそうなほど、低いと言われた。水商売という職業柄、不規則な食事と内容も注意された。しばらくして尿検査や採血の結果が送られてくるという話だった。

何だかんだで病院を出たとき、辺りが暗くなっていた。

「ただいま」

「おかえり」

「お母さん、お腹空いた」

「何か食べに行く？」

「お母さんって、全然料理しなくなったね」

「私独りしかいないんだもん。全然しないよ」

結局、私と母は2日連続で同じ店に行った。

「どっか悪いところ出てきた？」

「血圧が低過ぎるって。あと体重も少な過ぎるってさ」

「よく食べる子だったんだけどね」

「太らない性質なのよ」

「前日夜に、食事してお酒飲んだのも、朝コーヒー飲んだも怒られちゃった」

「何で？」

「普通は絶食するんだって」

「お腹空いちやうじゃんね」

私も母も知らなかった。

「普通はそうなんだよ」

店の大将や職人が話に参加してきた。

「会社勤めしてれば、健康診断とかでそう言われますよ」
「そうなんだ」

父は私が小さな頃に他界していた。
サラリーマン家庭であれば、このようなことは知っているのだろう。
常識と言わんばかりのそのセリフに寂しさを感じた。

「じゃお会計して。大将またね」
母が会計を済ませると帰宅した。

「ユイ」

「何？」

「さっきの気にしてる？」

「ああ、あのセリフね。ちょっとムカついた」

「やっぱりね。表情にすぐ出るんだから」

「彼に電話しよつと」

元私の部屋に向かった。

「もしもし」

「ずいぶん静かなとこに居るじゃない」

「疲れたから帰ってきた」

「まだ24時前なの？」

「イシハラとコマツはもう1軒行くつてさ。ランパブに」

「あはは、で1人大人しく帰ってきたの？」

「そうだよ」

「エライね。明日は？」

「コマツの話だとキタに行くつて」

「大阪駅の方だね。あんまり飲み過ぎないでね」

「ああ。また電話するよ」

彼の言うランパブとは、ランジェリーパブのことだ。
接客する女の子が、下着姿だということらしい。

私を気遣ってか、彼は1人帰って来たという。
それが相当な疲れが溜まっているか。

「お母さん」

「寝てなかったの？」

「明日、墓参り行くのよ」

「お父さんの？いいわよ」

「じゃ、寝るね」

「何時頃、起きる予定？」

「適当」

「お母さんの方が早かったら、起こすね」

「うん、分かった」

明日は、父の墓参りにでも行くの。

寿司屋での話が気になっていたのは確かだ。

彼と一緒にいながら、こんな長い時間離れていたことがない。
寂しさを感じる前に寝てしまおうと思った。

彼が大阪に出張に行っている間に、病院で検査を受けた。

昨夜、早く寝た私はマンションへ帰ることにした。

鍵を開けると、彼の居ない部屋がやけに広く感じた。

仕事帰り、私が先に帰ることは多々あるが、今日も彼は帰らない。掃除、洗濯を済ませると、帰ってこない彼を待つようにドアを見つめていた。

「2日も逢わないと結構寂しいかも……」
ソファの上で膝を抱えた。

静寂の中、携帯が鳴る。

「もしもし？」

「ユイ、どこ？」

「何だ、ユミさんか……。マンションに居るよ。どうしたの？」

「暇なんでしょ？」

「暇だけど？」

「マナブが大阪に行っちゃってるんだって？」

「何で知ってるの？」

「あはは。私の情報網をナメるな。ランチ行くよー！」

孤独で時間を持て余していたところだった。

もちろん拒否することもなく、快諾した。

外は雨が降っていた。

私は彼が雨降りの日のドライブが好きだと聞いた。

それ以来、私も雨の日に車に乗るのが好きになっていった。
ラジオも聞かず、CDも聞かず。

ただ車に当たる雨の音を聞く。
彼の真似をしていた。

信号待ちで停まっていると、急にエアコンの調子が悪くなった。

「え？何？」

窓ガラスがみるみる曇っていく。

少しだけ窓を開けて、曇りを取る。

待ち合わせの場所に行くと、ユミさんがすでに来ていた。

ユミさんは私の車を見つけると、小走りでやってきた。

「予報じゃ降るなんて言っただけだったのにな！」

「そうなの？」

「ちよつとユイ！エアコン効いてくない？」

「1分前に壊れたっばい……」

「ちよつとー！」

バケツを引っくり返したような雨があがると、太陽が日差しを取り戻した。

「ユイ、ちよつと暑いよ！」

「困っちゃったね。どうしよう？」

「修理入れるところ、知ってるの？」

「分かんない」

「とりあえずご飯先に行くか……」

「雨あがったから、窓開けようよ」

「そだね」

車を走らせること、30分。

ユミさん推奨のイタリア料理屋に到着した。

「最悪なドライブだったですね」

「私が車出せば良かったと公開してるよ」

2人で小言を言いながら、店内に入った。

「どうも。2人で予約しといたんだけど？」

「ユミさん、どうもです…？い、いらっしゃいませ…」

「どうしたの？」

「あ、いや…」

キャッシャーの店員が笑いを堪えているのか、びっくりしているのか。

微妙な表情で出迎えた。

「ユミさん！ちょっと！」

店員の表情の意味するものが、ユミさんを見て分かった。

「何よ、ユイ…」

雨上がりの晴天で、湿気と汗が主因だろう。

ユミさんの化粧は剥がれ、ピエロのようになっていた。

アイラインは流れ落ち、黒い涙を流していた。

髪もおでこ全開で、長い髪は右から左へと台風でも通り過ぎたかのようだ。

「あはは！」

「ユミさん、鏡見てきてよ」

「何！」

慌ててトイレに行ったユミさんの大爆笑する声が聞こえた。

「ちょっと待ってて下さいね」

「うゆっくり」

ユミさんの慌て振りに、さすがに店員から笑みがこぼれる。

トイレに入るとユミさんが化粧直ししていた。

「ユイの車のせいよ！」

「ごめんね。ユミさん…」

「鏡見てびっくりよ。自分の姿を見て、怪獣かと思ったわよ」

「夢に見ちゃうね」

「本当に怖いわ…ってコラ！」

「あはは。お腹痛い！」

かなりの時間を掛けて、ボサボサの髪と雪崩が発生したような化粧を直した。

やつのことで、私達は席に着いた。

「ユミさん、仕事はしてないの？」

「貯蓄があるし、今の彼が会社社長だからね」

「悠々自適なんだ」

「まあね。マナブの店の方は進んでんの？」

「もうちょっとでオープンだね」

「いよいよか。しかし早かったな。あの子と逢ってまだ2年経ってないよ」

「すごいよね」

ユミさんは高校の先輩でもあり、私の数少ない、良き理解者。

彼のことも弟のように想ってくれており、早くから彼の大器を見抜いていた。

私と彼の付き合いも常に応援してくれていた。

何より、私達のキューピット的存在でもあった。

「みんなの前で付き合い合っちゃったんだよね」

「あの日…付き合い合ったって何となく思ってた」

「へえ」

「付き合いおう、振らないでねってセリフに失神しそうになったよ」

「失禁すれば良かったのに…」

「ヤダー！汚いな」

それからユミさんは、彼と付き合いまでの心境を、根掘り葉掘り聞いてきた。

「初めて逢ったときはどうだった？」

「真つ赤になつて何も話せなかつたの」

「あはは。接客中だったんじゃないの？ちゃんと仕事しろよ」

「本当だよな」

「確か：あの子、連絡先を聞かなかつたんだよね？」

「そう。その日の遅くにユミさんに連絡したの」

「ああ、覚えてるよ。あの日だったのか」

「ユミさんの最後の営業日だつて、すごい緊張した」

ユミさんのイベントという大義名分があつて、彼に逢いに行ける。

私にとっては、この上ないラッキーだつた。

有頂天だつたのが、ユミさんにだけはバレていた。

その営業も一緒に行つたチハルとの話はうわの空。

彼を目で追つていたのは言うまでもない。

「仕事してる姿見て、惚れ直したというか……」

「始まつても無い頃に、直すつて意味が分かんないよ」

「あはは。ですよな」

「ユイは日本語がままならないからな」

「でもね、そのときも話せなくて、私なんか興味無いのになつて思つたの」

「マナブは営業中でしょ？しょうがないよ」

2人で同時のことを振り返りながら、笑つて話した。

「飲みに誘うときも勇気だしたもん」

「そうだったの？」

「チハルにも上出来、立派だつたつて言われた」

泣きそうなくらい緊張していた。

顔や耳が赤くなつていたかも知れない。

それほど彼に声を掛けるのは、一大決心だつたのだ。

女から誘うなんてことを彼が嫌だつたらどうしよう。

誘って断られたらどうしよう。

水商売で稼げるようになったという、その気になっていたプライドは、微塵もなかった。

「アンタ…確かに変わったよ」

「そう?」

「可愛くなったよ」

「彼だけに可愛いって言われればいい」

「そういうところが変わったよ」

人目を気にし、プライドが高く、人を信じない。
そんな生き方をしていたのだ。

ユイ34

ユミさんと2人で昔話に花を咲かせていた。

「何だか、つい先日の話みたい」

「まだそんな新鮮なんだ？」

「うーん：新鮮なようで懐かしくもあり、不思議な感じかな」

「将来は結婚するの？」

「私は今すぐにもお嫁さんにして欲しいよ。彼の子供を産んで育てるのが夢かな」

「ユイの夢は、意外と平凡なんだね」

「当たり前のことを結果に出すことって難しいよね」

「そうだね」

「ああ、よく喋ったな。行っここか」

「ですね」

「ベントツどうすんの？修理出すの？」

「どこか知ってる？」

「同級生が修理工場やってるよ。そこ行ってみる？」

「うん」

「あ、アタシ出掛けるんだったわ：連絡入れといてあげるよ」

「一緒に行ってくれないの？」

「地図書いてあげるから。マスター、チェックしてくれる？」

私が財布を開けて払おうとした。

「アンタに出してもらおうほど、老け込んでないわよ」

「ありがとう。ごちそうになります」

店を出るとタクシーが停まっていた。

「彼のところに直接行っちゃうから、ここで」

「うん、分かった。ありがとう」

「またね」

「はい」

ユミさんは、颯爽とタクシーに乗り込んでいった。

私はユミさんに教えてもらった修理工場へと向かった。書かれている場所は、私が通った中学校の近所だった。車を走らせる時間が長くなるにつれ、懐かしい景色が目映った。そこは、中学校から少し離れた場所にあった。

「すみません。修理をお願いしたいんですが」

「ユミさんの友人の方ね。聞いてま…ユイ？ユイか？」

「シユウ…？」

シユウとは、私が初めて付き合った男だった。

「久しぶりだな。いつ以来だ？」

「もう数年経つね」

「ベンツなんて乗ってんか。仕事何やってんだ？」

「無職」

「まさか、どっかの社長の愛人でもやってんじゃないだろうな」

「そんな訳無いでしょ」

「とりあえず、修理しちゃうよ。事務所でコーヒーでも出すから分かった」

シユウは、ユミさんの高校時代の同級生だった。

私が入学した頃には、学校を辞めていたそうだった。

私と付き合い合っていた頃、シユウは無茶苦茶だった。

今思えば、最低な男だった。

一緒にシンナーをやらされたり、集会に連れて行かれたり。ヤキモチや束縛は、半端じゃなかった。

自分は浮気をする男というのは、女の浮気は絶対に許せない。男友達ですら、ヤキモチを焼かれた。だらしのない男だが、私も若かったせいかそれが当たり前と思っていた。

ただ唯一の共通点は、孤独で寂しがりだった。

暴走族の総長という地元でしか通用しないネームバリューがあった。告白され、興味本位で付き合った。

感情が一時的に高ぶっていただけの付き合いだ。

次第にシユウから逃げるようになり、逢わなくなった。

そして高校に行きたくなかった私は、シユウと別れたのだった。

「ほい、コーヒー」

「ありがとう」

「良い女になったな」

「今の彼にそうしてもらったの」

「お前がそう言うなんて、よっぽどなんだな」

「私の全てよ」

「淡々と話す口調は変わってないけど、話す内容が変わったな」

「そうね」

どうして男というのは、昔の女を今でも自分の女のように話し掛けるのだろうか。

分かったような口振りだが、分かっているから別れているのだ。

偶然に再会したことを契機に、隙在らばとも思っているのだろうか。

「どれくらいで修理終わる？」

「よくある修理だから、部品のストックがある。もう20分くらいかな」

「そう」

私がタバコに火を点けるとシユウもタバコを燻らせた。

「お前、セブンスターなんて吸ってんのか。キツイだろう？」

「彼が吸ってるから、同じの吸いたいだけ」

「彼、彼って…俺のときもそういうのあった？」

「無いね」

さすがにイライラしてきた。

シユウが何が言いたいのか、分かってきたからだ。

事務所の奥のドアから、別の従業員が入ってきた。

「お待たせしました。修理完了です」

「分かった。車を事務所前に出しといてくれ」

「はい」

「おいくらですか？」

「いいよ」

「そういう訳にもいかないでしょ。いくら？」

「昔のよしみだよ」

「商売やってんだからダメだよ。借りも作りたくない」

「そんな冷たいこと言うなよ」

「いいから早く」

「じゃ9000円でいいよ」

「はい」

「もう帰るのか？事務所閉めるから飯でもどっだ？」

やっぱりそう来たかという感じだった。

私は失意混じりの溜息をついた。

「ねえ、私に何か求めてる？」

「あ、いや…別に」

「悪いけど今後、アンタとは何も無いからね？」

「そういう意味じゃねえよ」

「あっそう。はい、お釣りいらない」

事務所を出て、車に乗り込むとシユウが追い掛けてきた。

「悪かった。機嫌直して飯付き合ってくれよ」

「昔にそういうことが言えてればね。でも無理」

「ちよっとくらい時間無いか？話もあるし」

「私は話すことない。さつきも言ったでしょ？彼が私の全てなの。じゃあね」

強引にドアを閉めるとエンジンを掛けた。

かなり気分が悪かった。

信号待ちで停まったとき、彼が同じ立場ならどういうリアクションをするだろう。

「別れる訳無いか…」

まだ信号が青にならない内に、後方からクラクシオンを鳴らされた。シユウが運転席に座っているのがバックミラーで確認出来た。

ハザードを点灯させ、車を寄せた。

「何なのよ！」

「ユイ！再会して思った。やっぱりお前が好きだ！やり直してくれ」
シユウは私を車から引きずり降ろすと自分の車に乗せた。

「やっぱり昔のスタイルか…」

「何！」

「アンタにどうこうされるなら、舌噛み切ってやるわよ！」
シユウは私の覚悟に、車を走り出させることは出来なかった。

「嫉妬するよ。ユイにそこまで想われてる男がこの世に居るなんて」
「彼に何かあれば、刺し違えても彼を守るわ。それほどの男よ」
車を降りると自分の車に乗った。

みんな人なんて、大事なものは失わないと気がつかないもの。
気がつかないのは、思いやりが足りないから。

私と彼に失うという言葉は無い。

マンションへと戻る道中、携帯が鳴った。

「ユイ、今どこ？」

彼の声が聞こえた。

「どしたの？今移動中だけど」

「羽田に帰ってきたんだけど、拾いに来てくれよ」

「分かった。すぐ行くから待っててね」

有頂天だった。

信号無視を繰り返して、彼に逢いに行った。

偶然、ユミさんに紹介してもらった修理工場で『元彼』のシユウと再会した。

確かに付き合っていたこともあり、他の男とは目線が違った。しかし彼と比べると、何てちっぽけな男なんだろうと冷静で居られた。

思いも寄らぬ日時に彼から、迎えの電話が入った。

彼に逢いたくて、さながらF1レーサーのように飛ばした。

空港に着くとバス、タクシー乗り場から少し離れたところに彼は居た。

「今日も泊まって来る予定だったんじゃないの？」

「そうだったんだけど、いろいろアイデアが浮かんでね。早く帰りたくなった」

「大阪は参考になったの？」

「そうだね」

「コンセプトがだいたい出来上がったよ。トランク開けて彼はトランクに荷物を乗せると車に乗った。」

「あー疲れた。ただいま」

「おかえり。ダーリン！」

「寂しかったる？」

「当たり前じゃない！毎晩泣いてたよ」

「俺と一緒に……」

「あはは。ねえ、疲れてるところ悪いんだけど運転替わって」

「いいよ。どうした？」

「手を繋ぎたいから」

「ユイの片手運転じゃ、危険極まりないからな」

「そういうこと」

彼は信号待ちの度にキスをしてくれた。

マンションに戻ると2人でお風呂に入った。

今夜は、彼に怒られても思いつ切り甘えようと思った。

ベッドでは、私から彼を求めた。

彼は受け入れてくれ、私は何度も絶頂を迎えた。

彼が帰ってきて、ほんの数時間。

その夜は、とても幸せな夜だった。

私は彼の腕の中で安堵感に包まれ、深い眠りについた。

翌朝から彼は再び、仕事モード全開になっていた。

「おし、飯食ってから店行くか」

「うん」

「ユイ、それ忘れちゃまずいんじゃないの？」

私は彼から頼まれていた、デザイン画を完成させていた。

「あ、ぶていっくんも来るんだったね」

「ボス、おはようございます」

「おはよう」

「ボス、ぶていっくんがお待ちです」

「ユイ」

「はい」

「ボス、おはようございます」

「どうも。ドレスを40着ずつ2セット頼みたいと思ってたところなんだよ。ユイ！」

「おはよ、ぶていっくん。これで試作品作ってみて」

私はスケッチしたデザイン画を手渡した。

「なかなか良いじゃないですか。早速、着手します。ユイちゃんにモデルになってもらって」

採寸したいんですが、よろしいですか？もちろん弊社の女性が行きます」

「うん」

「じゃ今、連絡を入れておきますので1階の店に行ってください」

「イシハラ、コマツ！ちつと来い」

「はい！」

「うっす！」

「ねえ、採寸行ってくるね」

「分かった」

彼は2人と打合せした後、指示を出していた。

私はぶていっくんとエレベーターを降り、店に向かった。

「そう言えば、私なんかで採寸しちゃっていいのかな？」

「どうしてですか？」

「私みたいな小さいのでいいのかなって」

「試作品を作るだけですよ」

「それならいつか」

「ボスって男から見てもワクワクするような人ですよね」

「うん。うちの人は異性、同性問わずに魅力を感じさせるのよ」

「夢を見させてくれるというか、夢中にさせてくれますよね」

「彼に関わる人はみんなそうじゃないかな？」

「イシハラさんとかコマツもそうですよね」

「あはは。そうですね」

「私もそうです。何か協力出来ればと思います」

「彼の女で幸せですよ」

「カリスマですね」

会社登記、内装、システム、制服の発注、許可関係は上手く事が進んでいた。

彼達は約1ヶ月半、ほとんど休まず、開店準備に取り掛かっていた。イシハラくんは、スカウトを中心に。

コマツくんは会社登記、許可関連を。

私と彼は、内装、システム、制服の発注に追われていた。

今日も気がつくくと22時を回っていた。

「イシハラ、飯食いに行くから戻れ」

「コマツどこだ？」

「店戻つてくれ」

彼は矢継ぎ早に連絡を取った。

「ユイ、何食べたい？」

「何でもいいけど」

「まだこの時間だから何でも行けると思っけど？」

「お好み焼き食べに行こうよ」

「おお！ナイス意見だな」

イシハラくん、コマツくんが戻ると自由が丘にあるお店に向かった。

「お疲れさん」

「お疲れ様でした」

彼が乾杯の音頭を取った。

「みんな、しばらくご苦労さんだったな」

「御無体な……」

「イシハラくん……言葉の使い方間違ってるよ？」

「ですか？」

「バカはほつといて……。明日の日曜日は完全にオフにするから」

「ボス、どうかされましたか？」

「いや、ある程度のスケジュールが立ってきたからな」

「そういうことですね」

「ゆっくり休んで鋭気を養ってくれ」

「はい」

「うつす！とりあえず、食い物の注文しましょうよ」

「お好み焼きは俺に任せとけ。大阪出身だからな」

「え！」

彼の一言に一同が驚いた。

「あ？知らなかったか？」

「俺達が知らないのはいいとして、ユイさんも知らなかったっばいですよ？」

「初めて聞いたよ」

「イントネーションが完全に標準語ですね」

「ああ。俺以外の家族含め、親戚も江戸っ子だからな」

「マナブくんだけなの？」

「そういうことだよ」

私達は、避けている訳ではないが、過去の話をおあまりしない。生い立ちや育った環境、昔話。

彼のポジティブシンキングには必要無い。

「イシハラ、コラコラ！勝手に触るな」

「いいじゃないすか」

「ダメだ。俺が仕切る！」

「ボスは鍋將軍ならぬ、お好み焼き將軍ですね」

「だーから！イシハラ触るな！」

「あはは！コント見てるみたい」

この後、悪ふざけが過ぎたイシハラくんは、熱せられたコテで頭を叩かれていた。

「ユイは明日、何かあんの？」

「あってもダーリンに合わせるに決まってるでしょ」

「そっか」

「どこか行くの？疲れてるんでしょ？」

「正直、疲れてる」

「だよ。ビデオでも借りて、コロコロしてる？」

「いいかも」

私は彼と一緒にならどこで何をしてもいい。

彼女になって、初めて離れた2日間で強くそう思った。

日付が変わる頃になって、店を出た。

「じゃ明日はゆっくりさせてもらいますね」

「おう」

「俺も家で寝てるっす」

「そうだな。じゃここで解散するぞ」

「お疲れ様でした」

駅でタクシーを拾うとマンションへ向かった。

「どうする？ビデオ借りに行く？」

「面倒だから明日でいいや」

「じゃ帰ろ」

「疲れたから風呂入って寝る」

「うん」

マンションに着くなり、彼はそのまま寝に入ってしまった。

何年か水商売をやっていると昼夜が完全に逆転する。

冬は生活している時間の中で、陽の光を見ることは全く無い。

私達の言う朝は夕方であり、その時間が暗いとまず陽に当たらない。まだ初夏のこの時期は、辛うじて夕日が見える。

彼より早く起きた私は、顔を洗って歯を磨いていた。

「もうそろそろ7月か…ん！」

急いでうがいをする。

明日、彼の誕生日だった。

店の段取りに忙殺され、すっかり忘れていたのだった。

前日に思い出したの幸いだった。

ベッドに戻ると彼にイタズラをした。

キスしたり、頬を突いたり、抱きついたり。

これだけ執拗にすると、否が応でも目を覚ます。

「ん？おはよ」

「おはよ」

彼がテレビをつけると、私も彼の横に転がった。

寝起きが悪い彼は、起きてからしばらくはまどろむ。

しかし今日に限って、何か違う。

彼の表情や仕草にいつもと違うものを感じていた。

「ねえ。今日何かあるの？」

「ん？特に無いよ。何かあんの？」

「ううん。女の勘ってやつかな」

もちろん彼の全てを知っている訳ではない。

誰もが気がつかない微妙な違いに気がついた。

「どっか行くか？」

「キレイな夜景でも見たいな」

「夜景つて、まだ昼だよ？暗くなるまで何するよ？」

「うーん…ゴロゴロ」

ベッドの中で2人は布団に包まった。

2人はいちゃいちゃしながら案の定、えっちへと移行した。

私の場合、彼と他愛ない絡みが大好きだ。

その多くは、私から彼を求めてしまう。

今からセックスをするぞというシチュエーションではない。

何となくその延長線にセックスがあるというのが好きだった。

その日は完全オフということもあり、事は2回戦に及んだ。

いつの間にか寝てしまった私達が起きたのは、夕方だった。

「おはよ。寝ちゃったね」

「風呂入って出掛けるか」

「一緒に入っちゃおう」

「風呂で始まつちやうんじやないの？」

お風呂が3回戦目の会場だった。

車に乗り込んだ私達は、行き先を決めていなかった。

「夜景のキレイなところつてどこ？横浜辺りか？山下か桜木町とか」

「たまにはあっち方面も良いね。ご飯は中華街でも行こう」

横浜へ向かう道中、彼はよく横浜で遊んでいたことを話してくれた。

「横浜Mでも行こうか」

「ディスコ？踊れないよ」

「飯を食いにね。俺あの店大好きなんだよ」

関内で車を止めると、相生通りにあるビルの6階に横浜Mへ行った。

私はディスコに来るのは初めてだった。
階を登って行く毎に音楽が聞こえて来た。

「ここから音が聞こえるんだ」

「ホールはすごい大音量だよ」

エレベーターを降りるとフロントの黒服が立っていた。

「マイカワさん？久しぶりじゃないですか！」

「お久しぶりです。VIP空いてます？」

「1組も居ません。今案内します」

彼は何度も来ていたような感じの扱われ方だった。

ホテルマンのような男に連れられて行くと、大理石の廊下が広がった。

絢爛な内装が視界に入るとそこにダンスホールがあった。

「……！ユイ！ユイ！」

「あ、ごめん。聞こえなかった」

「こっちだよ」

その空間に広がる別世界に圧倒されていた。

私は彼の手を握って後を歩いた。

黒服の男がドアを開けると、私達はガラス張りのVIPルームに入った。

「ユイ、うちの店のVIPルームはこの作りをヒントにしてるんだよ」

「本当だ。少し似てるね」

「支配人、おはよう」

「マイカワさん、すごく出世されたようで。キムラさんとコダマさんに聞きましたよ」

「まだオープンはしてないけどね。オープンしたらお知らせしますよ」

彼が勧めてくれたカクテルとフードメニューは絶賛だった。

「ユイ、少し踊るか？」

「踊ったことないよ」

「いいから来てごらん」

彼が私の手を引くとダンスホールに向かった。

ライブホール並みの贅沢な音響効果に特殊照明。

まさにカルチャーショックだった。

ユーロービートに聞き覚えがあつたが、ここまで良い音で聞いたのは初めてだ。

彼のリードもあり、自然と体を動かすことが出来た。

スローバラードの曲になると、VIPルームへと戻った。

「お疲れ様です」

「ありがとうございます」

支配人がオシボリを持って出迎えた。

「男子スタッフの制服の色が何種類かあつたのに気がついた？」

「そうなの？」

実は楽しくて周囲が見えていなかった。

ここでは黒服が従業員の最上級職であり、以降、赤服、緑服、青服だという。

彼はイシハラくんやコマツくん、その他のスタッフに着せるといふ。

「良いかもね。いろんなところでアイディアを集めてくるね」

「今はオーナーとなつた目線で、また何か得られるかなつて思つて来てみたのよ」

「マイカワさんの観察力は半端じゃないですからね」

「支配人、ありがとう」

彼と出会う前の彼を知る支配人が、彼の昔話をしてくれた。

刺繍がバリバリ入ったスーツを着ていたこと。

来る度に連れてくる女の子が違つていたこと。

黒服が真つ青になるくらいお酒が強いこと。

酔うと彼とコダマくんとキムラくんの内の2人がケンカしだすこと。

腕時計を何度か見ていた彼がチエツクをする。

「支配人また来ますよ」

「連絡絶対下さいね。店としても義理欠くことは出来ませんから」

「分かりましたよ」

エレベーターまで黒服が見送りに来た。

ドアが閉まるまでお辞儀をしていた。

「接客も良い勉強になるだろ？」

「なるほどねって感じ」

実際のところは、接客に感心するより耳鳴りの方が気になった。

あれだけの大音量のところ居たのだ。

『キーン』という音がしばらく耳から離れなかったのは言うまでもない。

「楽しかった？」

「うん！すごく楽しかった。また連れて来て」

「あはは。相当楽しかったみたいだな」

車に乗ると、彼は夜景が見に行きたいというセリフを覚えていくれた。

「とりあえず桜木町でも行くか」

「まだ24時前なんだね」

彼に誘導され、ランドマークタワーが見えるところで車を停めた。

「ここだと夜景が良く見えるね」

「ちよつとFMつけて」

ラジオから音楽が流れる。

彼はタバコに火を着け、燻らせた。

私はこの後、人生で最高の瞬間を迎えることになる。

彼の言うとおりラジオをオンにすると、チャンネルは彼が合わせた。

(そろそろ時刻は午前0時を迎えようとしています。それではここで、お便りをご紹介したい

と思います。東京都から。今、彼の隣でラジオを聴いているユイちゃんへ。今から

午前0時を過ぎると俺は18歳になる)

「ユイちゃんだって。奇遇だね」

彼は黙って、タバコの煙を吐いた。

(知り合って、付き合って、同棲して。いつの間にか一年半以上になるよね。ケンカした

こともあったけど、いつも側で支えていてくれて感謝している)

「ん?」

(心からありがとうと感謝の気持ちを込めて後部座席に置いてあるプレゼントを渡したい)

「ええ!何?」

彼は人差し指立ててを口に当てていた。

信じられない表情で振り返ると小さな箱が置いてあった。

(ラジオを聴いているユイちゃん。プレゼントは確認出来たかな?それでは開けてみて!)

彼からの言葉を待ってください。ラジオをお聴きのみなさんはここまでです）

「えええ！」

箱を開けるとそこに指輪が入っていた。

呼吸が止まった。

時間も止まった。

周囲の雑踏も聞こえなくなった。

しばらくして、ラジオから流れる音が少しずつ聞こえてきた。

（ユイちゃんの返事また送ってね！時刻は午前0時になります。プ、プ、プ、ピー！）

「ユイ、結婚しよう！」

彼の言葉に私は震えが止まらなかった。

嬉しさのあまり、涙がこぼれた。

「一生…あなたの側で添い遂げます」

（現在の時刻は午前0時を3分程、過ぎたところです。それでは次のお便りを紹介します…）

彼はラジオを切った。

「もうこんなに誰かを好きになって、大切に思うこと」

「はい」

「その人から俺と同じ気持ちで愛されることは2度とないだろう」

「私が最後の女になる！」

「あはは。なつてもらわなきゃ困るよ」

「うん！私の今日の勤が当たった！」

「そう言えばそんなこと言ってたね」

「ちよつと外に出ようよ」

「いいよ」

車の外は、少し風が強かった。

私よりかなり背が高い、彼に抱きついた。

「不束者ですが、どうぞ宜しくお願いします」

「ああ。頼むよ」

いつか、この日が来ると信じていた。

うっかり忘れていた、付き合っていた期間も彼は覚えていた。

感動させられる演出にも、彼を喜ばせる、気の利いた返事が出なかった。

人間というのは、大きな感動に直面すると1つしか言葉が出ないという。

ストレートに出てくる言葉。

私の場合は、そばに添い遂げさせて欲しいという一言だった。

強く抱きしめると、同じ強さで彼が抱きしめてくれた。

それは心地良い強さであり、心地良い痛みだった。

「ねえ、指輪をはめて」

「ああ、いいよ」

彼は私の左手を持ち上げた。

私は薬指だけを差し出すことが出来ず、指が迷子のようになっていた。

「あはは。何やってんだよユイ」

「私、不器用なのかな」

彼が左手の薬指に指輪をはめてくれると、指にキスをしてくれた。

私は左手の掌を夜空に向けて、輝いている指輪を見た。

「ビデオでも撮っておけばよかったね」

「よせよ。恥ずかしいっての！」

「何年経ってもそのビデオ見てニヤニヤしたりしてさ」

「何だかな」

「私の夢の半分が叶ったの」

「半分？」

「うん」

私は彼のお嫁さんになることと彼の子供を産むことが夢だと説明した。

「普通だと思ってる幸せを継続していくは難しいことだよ」

「うん」

「早くユイの夢が叶うようにしないと」

「帰ったらえっちしよう」

「あはは」

マンションへ帰る道中、このサプライズについて聞いた。

「いつから仕込んだの？」

「そいつのを聞くのは野暮だろ」

「聞きたい」

私と彼は帰宅すると、まず貴金属を外し、所定の場所の箱の中に入る。

いくつかある中、その日の気分で選ぶ。

中にはしばらく身に付けない物もある。

彼はそれを持って、私の指のサイズを調べてくれた。

決してマメではない彼が、そのような行動をしてくれたことに感激した。

ラジオについては、横浜Mをアレンジしたものだという。

仲間内で誕生日の日にバースデーナンバーをリクエストしていた。

通常のリクエストナンバーではなく、照明もBGMも変わる。するとDJがお祝いのコメントを添えるのだ。ダンスホール全てが祝福してくれる。当の本人にとっては、サプライズだろう。

「正直なところ、段取りしてる途中は面白かったよ」

「私がどんな顔するか？」

「それもあるけどね。やっぱりイメージをするのって面白いよ」

「店作りに共通してるよ」

「こそ」

「私は心臓が止まるかと思ったよ」

「あはは。そうか」

「サプライズされる側は、心の準備も何も無いからね」

「だからサプライズなんだってば」

「だよ。すごく感動した」

私は、とある分岐のところで彼に提案した。

「実家に行ってもいい？」

「もちろんいいよ。挨拶しなきゃな」

「ありがとう」

彼の答えをもらうと母に電話を入れた。

「ユイ、旦那連れて行くから。30分くらいで行く」

電話を切ると彼がビツクリしていた。

「ずいぶん簡単なやり取りだな」

「そんな電話が来ると思ってるような感じだったよ」

「俺のこと知ってるの？」

「ご存知よ」

実家に着くと、母が行きつけの寿司屋から出前を取ってくれていた。

「いらっしゃい。マナブくんね？」

「突然すいません」
「どうぞどうぞ」

私達は、リビングに通された。

「こんなものしか用意出来なくてすいませんね」

「いえ、ありがとうございます」

「ユイ、冷蔵庫にある瓶ビールとコップ持ってきて」

「はい」

母はビールおろか、お酒を飲まない。

30分の間に用意してくれたのだった。

栓抜きが見付からず、母を呼んだ。

「お母さん、栓抜きどこ？」

母はキッチンの引き出しの中から、栓抜きを取り出した。

「病院で診てもらったこと話したの？」

「大丈夫そうだから、まだ言っていない」

「ささ、どうぞ」

「頂きます」

「堅苦しい挨拶は抜きね。娘を幸せにしてやって下さい」

「必ず幸せになります」

「『します』って言わないところが良いわね」

「自分が幸せじゃなきゃ、ユイも幸せではありませんから」

「2人で幸せになるんだもん」

「そうね。早く孫を見せてくださいな。私はそれだけで十分」

「分かりました」

母は気を使っただけ、彼にあまり話させないようにしていた。

その夜は3人で遅くまで話していた。

彼と付き合ってから永いようで短くもあったが、プロポーズされた。それは私にとって、感動の夜だった。

翌日、すでに合格していた彼の車の免許交付と婚姻届を提出しに役所へ行った。

出店準備で忙しい最中、彼の18歳の誕生日に合わせてくれたこと。プロポーズにいろいろサプライズをしてくれたことが感動を増幅させた。

しかし翌日から浮かれることも出来ず、彼は出店準備へと切り替えていた。

「イシハラ、スカウトの調子はどう？」

「いわゆるプロって言うタイプは居ません。現在のところ20人ほどストックはあります」

「コマツは？」

「私の方もド素人が10人ほどです。私もイシハラさんも主婦、学生が多いですね」

「リーダー的存在は居ないってことか」

「私の友達でも連れてこようか？」

「いや、それはいいや」

以前にも彼は言っていた。

スタッフ以外は、全て新しいものにこだわりたいと。

あくまでこだわりであり、否定をしている訳ではないとも話していた。

私が彼の性格を察するに、社長に義理立てをしているのだろうと思っただ。

「ボス、ちよつといいつすか？」

「どうした？」

「マコがうちに来たいって言ってるんっすよ」

「マコが？」

「ジャック辞めて1ヶ月経っているんですが。同じ時期に辞めたりナと2人で来たいって」

「1ヶ月経ってれば大丈夫か」

「って言うか今日来てるんですが、いいですか？」

「そうなの？いいよ」

マコ、リナ。

私の中学生の頃と同級生に居た名前と同じだった。

「今呼びますね」

「私、ジュースでも買ってくるね」

「ユイさん、私が」

「いいのいいの。コマツくん座ってて」

イシハラくんの彼女は、彼の元カノ。

彼からイシハラくんに彼女が出来たときに聞いた。

気分が優れなかった。

自分の器量の無さに嫌気が差す。

せめて笑顔だけでも取り繕う。

「ほーい！みなさんお茶の時間ですよ」

「ユイちゃん…？」

「マコちゃんとリナちゃん？久しぶり！」

さっき彼達から聞いた2人の名は、私の友達で合っていたのだ。

「ここでお世話になることになったの。ユイちゃんはどっしてここに？」

「主人が店のオーナーなの」

「ええ！マナブ？ユイちゃんといつ結婚したの？」

「つい最近ね」

「マコちゃんとりなちゃんが働くなら私も働こうかな。いい？」

「別に拒否する理由は無いけど？」

「じゃ働くことにした！」

「コマツ」

「はい」

彼はコマツくん到店のシステムを私達に教えるように指示をした。

「イシハラ、スカウト出るぞ。ユイ、あと頼む。」

「うっす！」

「はい」

コマツくんから、ギャラ形態やシステムについて説明があった。

「そこまで決まってたんだね」

「99%がボスの案です」

「この短期間でここまでコンセプトを明確にするとはね」

「ボスならこれくらい朝飯前ですよ」

マコちゃんやりなちゃんは、頷くしかなかった。

「ユイちゃん。彼：私から言うのも何だけど、立派になったね」

「初めて見たときから、他の男の子達と違うものはあったけどね」

「そうなんだ。私はすごいところしか見てないから」

「暑くない？」

「ああ、ユイちゃん達がね」

「ちよつとー！」

「それでは私もスカウトに出てきますので」

「はい。いつてらっしゃい」

2人に逢ったのは、本当に久しぶりだった。

「最後に逢ったのいつくらいだったけ？」

「一緒によく遊んだ訳じゃなかったからね」

「私、中学、高校って友達居なかったからさ」

「孤高な存在だったんだよね。ちよつと近寄り難いみたいなの…」

「同級生とは思えないくらい、大人のオーラ持ってたよ?」

「そんなことないよ」

「ユイちゃんのアナログクラブもあったしね」

「うんうん」

「ウツソ?」

「地元でも超有名人とばっかり付き合い合ってたりしたしね」

「さつきもね、2人で話してたんだけど…」

「ユイちゃん、キレイなのは変わらないんだけど、可愛くなったね
つて」

「ありがと」

「すごい話し易いし」

「そんな笑ったところ見たことなかったから」

「旦那に逢ってからかな…」

「マナブ?」

「そう」

「不思議な魅力と力を持つてるよ」

「リナもそう思う? 私も」

「そうだね。私の場合は、人生が変わったというか、生き方を教えてもらったみたいなの」

「大袈裟じゃないと思うよ。私もマナブと逢って良い女になったと思うもん」

「マコちゃんにしか、言えないセリフだ。」

「彼と付き合い合っていたのだから。」

「ここは敢えて、知らない振りをした。」

「ユイちゃん、結婚したんだから言っね」

「ちよつとマコ!」

「アタシ、マナブと付き合い合ってたことがあるの」

「このカミングアウトには、正直、面喰らった。」

「もう数年前の話なんだけどね…」
さすがにリナちゃんは場都合が悪そうに話した。
「いいよ。もう過去の話だから気にしない」
「仕事が1番だつて。私、振られたの」
「そうだつたんだ」
「振られたときも彼と付き合つときも、優しく応援してくれたの」
「うちの旦那はそういう人よ」
「イシハラくんもマコとマナブのことを知った上で付き合つて」
「イシハラくんも良い男になったよね」
「ユイちゃん、ありがと。でもね、いつもボスがボスがつて」
「あはは。仕事離れてもそうなんだ」
「私がマコの家遊びに行つてもそうだよ」
「あはは」
マコちゃんのカミングアウトの後は、女の井戸端会議をしていた。
同級生の誰が誰と付き合つていたとか、誰々が結婚したとか。
それはまるで同窓会のようだった。

「ねね。ちょっと聞きたいんだけど？」
「リナ、どしたの？」
「彼や旦那と同じ店に居てさ、男も女も嫉妬とかしない？」
「彼はしないかな」
「うちも旦那の方はしないはず」
「2人は？」
「営業中は、プロ意識を持ってって言われてるから気にならないね」
「私もかな」
「営業以外は？例えば、今2人ともスカウト出てるじゃない？」
「そうだね」
「うんうん」
「親しそうに話しながら、そのエレベーターから知らない女と降りてきたら？」

リナちゃんはそう言いながら、エントランスを指差した。

「ごめ。私…ヤキモチ焼くかも」

「私もユイちゃんと同じかな」

良過ぎるタイミングで、エレベーターのドアが開いた。

「まだ工事中なんだけど、ここが店なんですよ」

『げっ!』と思った。

うちの旦那がスタイルも良く、すごく美人な女と親しそうに話をしていた。

「ユイちゃん、まさにこんな感じのとき」

「びつくり…タイミング良過ぎ…」

マコちゃんが何とも言えない顔で、私の表情を伺った。

同級生で女同士での井戸端会議。

彼や亭主と同じ箱内で働くのに支障あるのかないのか。

私とマコちゃんは、嫌悪感が若干あるとし、リナちゃんは抵抗無いと話した。

そこへタイミング良く、彼がスカウトしたと思われる女の子と入ってきた。

「びつくり…タイミング良過ぎ…」

「まだ工事中なんだけど、ここが店なんですよ」

「キレイな店ですね。あの女の人達は？」

「うちで働く女の子達ですよ」

「おーい！ちよつと来て」

彼に呼ばれ、店のシステムなどを話した。

「ちよつといいかな？」

「はい」

「良い人達ですね」

「うん。前の職場で一緒だったんですよ」

彼女は、彼に呼ばれた。

「美人なのに、性格も良さそうだね」

「う、うん…」

私は彼女に不思議な感覚を持った。

彼を取られそうな予感が下のにもかかわらず、嫌な気分ではなかったのだ。

彼女を受け入れようとしているのだろうか。

その不思議な感情の真意が分からなかった。
その女はシズカと名乗った。

その翌日、シズカと名乗った女は、母親を伴って彼に逢いに来た。
彼と3人でしばらくの間、話すと帰っていった。

「イシハラ」

「はい」

「さっきの子、シズカで登録しといてくれ」

「分かりました」

彼がシズカに付きっ切りなのことに嫉妬した。

「ボスもボスだよな」

「確かにシズカちゃんを特別視してる感じがする」

「彼には何か考えがあるのかも…」

「ユイちゃん、冷静だね」

「そうでもないのよ？実はね」

確かに冷静を装っていた。

この場面での嫉妬は、彼が最も嫌う部分だと思ったからだ。

「おう！飯食いに行くぞ」

彼やスタッフ、私やマコちゃん、リナちゃんが出掛けた。

「あー疲れたな。イシハラ、ビール！」

「うっす！」

「コマツ、適当に食い物頼んで」

「はい」

22時過ぎ、いつものように打ち上げが始まった。

「ボス、シズカみたいな美人、よくスカウト出来ましたね」

「美容師ってのがポイントだったかもしれんな」

「以前にヘアメイクがどうのって言ってましたね」

「ああ。美容院については、いつ手放しても構わん。あの子がキラキラして見えたんだよ」

正直、彼の発言は私を嫉妬させた。

「ユイちゃん、顔に出てるよ」

「仕事の話だから、我慢して」

「そうだね。でも私の前で言わなくても…」

彼やイシハラくん、コマツくん達は、私達の内緒話を他所に続けた。

「ボスは以前から、水商売だけでは終わりたくないって言ってましたよね？」

「ああ。まずは社内部署からスタートして、分社化する」

「ベンチャーですね」

「各店舗毎に経営者を立てる。お前らがそれだ」

「なるほど」

「グループを形成して、その中で利益を共有する。これが目指すところだな」

「壮大な計画っすね」

「水商売はキツカケにしか過ぎない。これからだ」

「ワクワクしますね」

「業種も問わずだ。グループ内で回せばいい」

「それに対する許可や資格は随時つてことでももんね」

「そういうことだ。目標として5年の間に5業種をやって行きたいな」

「1年に1つ、新規事業ですね」

完全に私の勇み足だった。

彼はあくまで仕事上の対応をしていただけだった。

女というのは、つくづく損な性格をしている生き物だ。

彼のことを信じているのに、心配をしてしまう。

私は小さな小さな器の持ち主なのだろう。

新しい店では、男の子や女の子の総称を統一することにした。
男の子はスタッフ、女の子はキャスト。
それは、コマツくんの提案が通った形だった。

「もしもし…おはよう。今から？店に居るからおいで」
「どしたの？」
「シズカが友達を紹介したいって」
「へえ」

しばらくするとシズカちゃんが女の子2人を連れてやってきた。

「ボス、おはようございます」
顔、スタイルの良い美人の女の子達だった。

シズカちゃんの美容院の客であり、友人でもあるという。
さらに彼女達は、事務所に所属しているタレントということだった。
「オープンするまであそこの変な男から、連絡くるかもしれないけど電話出てやってよ」

「変な男って俺ですか？」

彼は面接を済ませ、イシハラくんに任せると出掛けた。

「ただいま戻りました」
「コマツさん、お疲れ様」
「コマツくん、お疲れ」
「イシハラさん。シズカ効果があってスカウトが捗ってますよ」
「ん？ヘアメイクのこと？」
「そうです。メイクやヘアメイクが2000円じゃないですか？しかもプロ並の美容師にやってもらって。反響がいいですよ」
「プロ並っていうか、プロでしょ」

イシハラくん達が集めたキャストは80名以上になっていた。全ては彼の思惑通りに、事が進んでいたのだった。

20時を過ぎた辺りで、今日の仕事が一段落した。

「お邪魔！」

「おお！」

キムラさんとコダマくんがやってきた。

「表敬訪問だよ」

「マナブは？」

「今、出てます。連絡取りますよ」

「ああ、頼むよ」

イシハラくんの電話から、10分ほどで彼は帰ってきた。

「お疲れ様。どう調子は？」

「おお！久しぶりだな」

「ボス、お腹空いたー！」

「ユイちゃんに賛成！」

マコちゃんとりなちゃんも賛同し、挙手している。

「じゃ俺も」

「じゃ私も」

「じゃキムラとコダマも来てくれてるし、みんなでパッと行くか」

店が入っているテナントビルの向かいにある居酒屋「酒乃蔵」にみんなで行く事にした。

店内は若いカップルや学生と思われる団体や、老夫婦、サラリーマンで混雑していた。

「いらっしやい！」

「8人入れる？」

「奥の座敷どうぞ」

「とりあえず生ビール8つ下さい」

「あいよ！」

しばらく彼達は、キングやジャックの話をしていた。

「失礼します！こちらはうちの大将からです」

店の若い男が焼酎の一升瓶を持って、彼に差し出した。

彼はマスターにお礼を言いに行った。

「親分からだつてさ」

「例の？」

「近いうちに俺が来るって話してたそうだ」

「御代は親分持ちだつたりして？」

「そういうこと。あの人はこの辺りではずいぶん慕われてるな」

酒乃蔵。

これから、ほぼ毎日のように通う店となるのだった。

キムラくん、コダマくんが尋ねて来た夜。
私達は、酒乃蔵に来ていた。

シズカちゃん絡みでヤキモチを焼いた私だったが、表面に出なくて良かった。

全ては彼のイメージの中であり、それらが結果となり、成果を挙げていたのだった。

「キムラさんやコダマさんは、ボスが籍入れたの聞いてます？」

「聞いたよ、電話でな。式とかはやらねえの？」

「今こんな状態だから、予定出来ないよ。ユイはやりたいの？」

「そりゃ、女の子から言わせるとやりたいけど、2回目だからね」

「ええ！ユイちゃんってバツイチなの？」

もちろんここに居る彼以外には、一切この手の話はしていない。

「俺も付き合った日に聞いたのよ。聞いた次の日には、離婚してたけどね」

「謎めいててカッコいいでしょ？」

昔の私なら、黙っていただろう。

もちろん彼に言うこともしなかったはず。

みんなの前でこのようにふざけるなんてことは絶対にしなかった。

彼に逢ってから、自分のウィークポイントをさらけ出すようにした。それは彼が私に対して、正直にしてきた行動だからだ。それまでは、親密な関係、助け合って愛情を深めるなんて思っていた。

敵心的に尽くすことだけで、私は十分なのだ。

多少の嫉妬はするが。

「マナブ、ちょっといいか？」

みんなが談笑する中、コダマくんが彼を店の外へ呼んだ。続いて、キムラくんも外へと出て行ったのだった。

しばらくすると3人は戻ってきた。

彼達は、戻ると何事も無かったかのように飲んでいた。

「ねえ？ 雰囲気変わったけど何かあった？」

「隠してもしようがないだろう。キング時代に世話になった社長が入院してるらしいんだ」

「え！ そうなの？」

彼はみんなに聞かれないうちに耳打ちしてきた。

キャストである女の子が看護婦で、院内で社長を見掛けたという。

病気については、緘口令が出ている為、2人は確かめることは出来ない。

そこで今や部外者となった彼に、確認して欲しいとのことだった。

「それなら明日、行ってくれば？ こっちは何とかしとくから」

「明日、許可関係で店内をチェックしに来るんだよ。それには俺が居なきゃいけない」

彼は今にでも飛んで行って、駆けつけたい気分だろう。

その夜、彼はしばらく寝付けないでいたようだった。

「起きて。検査官が店に来るんでしょ？」

「ああ…今起きる」

8時には、彼を店に連れて行かなくてはいけなかった。彼の睡眠が少ないことは明らかだった。

店に到着したのは、8時を少し回った頃だった。

「よう！ 暴れん坊、元気か？」

「おはようございます!」

初めて逢う人だったが、彼の様子から『社長』であることはすぐに分かった。

「何だお前のそのシケた面は? どうせ噂でも聞きつけたんだろう? 俺が病気なんかに負ける

と思ってるのか?」

「いえ! 思ってるま…せん」

「何だ?」

「正直: 心配はしますよ! 俺の社長がです。社長が入院したって聞けばそりゃ…」

「例えばこれが不治の病だったとしても諦めんよ。お前が成功する日まではな」

「ありがとうございます」

「だからと言って急ぐなよ」

「適当にやっつて成功するのを日延ばししますんで」

「あはは。俺はお前やキムラ、コダマという希望を持って生きている。大丈夫だよ」

男同士というのは、本当に面白い。

自分は病気で入院しているのだ。

心配掛けまいとして、勇気付ける言葉を掛ける。

彼は涙ぐみ、それを見て社長は抱擁した。

「店、見せてくれよ」

しばらく2人は店内で話し合っていた。

内容は全て仕事の話で、社長が全項目に感心していたのが印象に残る。

社長は、彼の成長を親のように喜んでるように見えた。

「こんにちわ。マイカワ社長いらっしやいますか?」

「はい」

検査官達が来た。

「じゃ俺は帰るぞ」

「もう帰るんですか？」

「俺はこれでも病人なんだ。オープンの日が決まったら連絡をくれ」

「分かりました」

「今、抗がん剤を打っている。しばらくの間は入院だ。見舞いなんで気を使うなよ」

「どれくらいですか？期間は？」

「3日間くらいだと思っぞ。今頃は俺が居なくて病院は大騒ぎだろうな」

「抜け出してきたんですか？」

「ああ。いい歳こいて脱走だ」

「あはは」

「マイカワ、紹介しろよ」

「あ、はい。妻のユイです」

「いつもマイカワがお世話になっております」

「2人ともいい目をしているな。じゃあな」

社長は手を上げると、振り向かずにエレベーターに乗り込んだ。

「あの人は全然、諦めていなかったな」

「マナブくんのが可愛くてしょうがないって感じに見えたよ」

その社長は元ユミさんの彼。

ファイのボーカル、圭介に妊娠させられたときに保証人になってくれた人だ。

まさかこんなところで逢うとは、思ってもいなかった。

社長はそのことを知らないのだろうか。

全くその素振りはしなかった。

まだ彼が入社したばかりの頃、部長にキレて追い掛け回したことがあったという。

結果的には、部長ではなく、酔っ払いを殴ったとのことだった。彼達の前に社長が急に現れると、寿司屋に連れて行ってくれたという。

そこではただ飲んで食べてただけだった。

社長は仕事の事、俺の右手のケガの事、何も話しはしなかったし、聞きもしなかった。

店から出たときに言った社長の言葉が、彼は今でも忘れられないという。

『お前達は俺の後継者なんだからな。頑張れよ』

彼は社長の言葉を糧に、出世街道を突き進む。

結果として、入社してから2年余りで退職、独立ということになるのだった。

「何か良いね。男同士って」

「ああ」

キムラくんやコダマくんのような友情もある。

社長のような付き合いもあれば、イシハラくんやコマツくんのような付き合いもある。

「男同士の付き合いってのは、無償だよ」

「私もそうだけど？」

「そうだな。俺もユイには無償だ」

彼は同性にもよくモテる。

年上ばかりだが、本人は年下だと思われていない。

自慢の旦那は、今後、事業で飛躍的に結果を出すことになる。

いよいよ店の準備は内装工事が完了し、事務所も機能を始めた。開店までは秒読み段階となり、レセプションの挨拶回りも行くようになった。

ミーティングと称した酒乃蔵での飲み会で、店内での役職が決定した。

店長はイシハラくん、コマツくんが主任となった。

キャストでは、私がフロアマネージャーとなった。

マコちゃんトリナちゃんは、私を補佐するフロアリーダーとなった。彼はオーナーで表舞台からは、名を隠すようにした。

店内では、スタッフミーティングが繰り返し行われた。

キャストへの最終意思確認は、私達3人が連絡を取った。

女の子達は100名中、90名が働く意向だということだった。

「イシハラくん、これがリストね」

「ありがとうございます」

「ボス、リスト上がりました」

「おう、コマツもちよつと来い」

「はい」

「スタッフ増員の件なんだけど…」

私達は、一仕事を終え、休憩していた。

「さすがに3人で100人に電話入れるのは大変だったね」

「確かに…」

「私、耳痛いよ」

初期の頃、スカウトした女の子は約1ヶ月前。

それでも働く気があるというのがほとんどだった。
これはイシハラくん、コマツくんが、マメに連絡を取っていた成果
だった。

「ねね、ユイちゃん」

「ん？」

「フロアマネージャーとかリーダーって何をすればいいの？」

「ボスが言うにはね、絶対に派閥を作らせるなって」

「派閥？あージャックにもあつたよ」

「やっぱりうちにもあつたよ」

「ほとんどは、古株の人間のところが、最大派閥なんだよね」

彼曰く、人間というのは3人居れば、最大で3つの派閥が出来る。

現在、キャストの人数は90人。

この人数に対して、派閥を作らないというのは、いささか困難では
ある。

「ボスはね、たかが人間関係で人が去っていくのは、見たくないん
だって」

日々出勤する予定の40人は、派閥を形成してくれるなどお達しが
出ている。

「派閥があるとね、いくつもの考えや主張が出てきちゃうんだって」

「やがてそれが対立するようになる？」

「そういうことだと思っよ」

「派閥の主導権争いに負けたら、店辞めるしかないもんね」

「そうそう。それが店に貢献してるしてないは関係無くな」

「居場所が無くなるってことか…」

いわゆる人間関係だ。

彼は、この人間関係をかなり重視している。

考えとしてはこうだ。

会社の頂点が彼だとすると、次の段がイシハラくんとコマツくん。

さらにその次の段は、フラットだという。

そこに力関係が加わると、団体、組織としては機能しない。

とにかく、働きやすい環境と稼げる環境を提供する必要があるとのことだった。

「ボスってすごいね！そんなことまで考えるもんなんだ？」

「昔から只者じゃないと思ってたけど、想像のさらに上に居るよ」

「情報の吸収力と観察力は、半端じゃないからね」

『ボス』を『ボーイ』時代から知る、この2人も驚かされるばかりだという。

「ユイ」

「はい！」

完成したばかりのVIPルームに呼ばれた。

「ナイレポのソメヤって覚えてるか？」

「覚えてない。っていうか知らないかも」

ナイレポは覚えていた。

彼と最初で最後のプチケンカをした原因の1つだった。

ソメヤとはナイレポの編集長だという。

私の場合、取材を受けただけで、編集長とは面識が無かった。

「夕方、来るってさ」

「そうなんだ。取材？」

「一面に載せてもらうかな」

「良い宣伝効果になればいいね」

「ああ」

「ボス！」

「こつち。VIPだ」

コマツくんが血相を変えてエレベーターを降りてきた。

「ボス！今、ルミとヨウコから連絡があっただんですが」

「ルミ、ヨウコ？誰だっけ？」

私が覚えているくらいなのに、彼はキョトンとした表情だった。この表情をするときの彼は、本当に覚えていない。

「例のタレントの子達ですよ。シズカが紹介してくれた」

「あー！どうした？」

私の知っている彼は、この時点で50%も思い出していない。

話の内容、相手の表情から徐々に思い出すのだ。

悪気は無いのだが、彼は物忘れが酷い。

「たまたまタウン情報誌を2人が見ていたらしいんですが」

「フリーマガジンみたいなの？」

「はい。目黒区のラブホテルがVIPルームっていうのがあるらしいんです」

「コンプライアンス上は？」

「おそらく無いと思いますが、同類項として思われるとイメージが悪いですよね」

「営業許可関連は？」

「それは変更は可能です」

「看板も発注し直さなきゃいけないよな？どうすつか…」

イメージが先行するこの業界では、店名というのはそれらを決定付ける。

店名というのは、雰囲気にあった名前を付ける。

その店名が商売内容やカラーをイメージさせると言っても過言ではない。

ソーブランドと同じ名前では、内容を履き違えて来店されても困る。

「店名を差し替えよう。コマツ、急いで発注し直してくれ」

「店名はどうしますか？」

「大阪で感じた空気、エナジーを感じた。その上のハイエナジーで変更してくれ」

「良いですね。では変更を掛けます。あと名刺発注も変更してきま

す」

場末のラブホテルと同じ名前では、悪いイメージが先行してしまう。類似店名が無いか調べるのと共に、変更手配を掛けた。

「ルミとヨウコのファインプレーだな」

彼の言葉に何も言えなかった。

私思うに、全ては彼のファインプレーと思う。

ルミちゃんとヨウコちゃんを連れてきたシズカちゃん。

そのシズカちゃんをスカウトしてきた彼。

それに対して、小さなこだわりを持って意固地になっていた私。

せめて彼の幸運を私が落とす事の無いようにせねば。

みんなも知っている。

彼には、幸運の女神が付いて回っていることを。

迅速な判断と陣頭指揮で、店名騒ぎは一件落着となった。

夕方になった頃、コマツくんから連絡があり、全ての変更手続きをしたとのことだった。

「もしもし…分かりました」

彼に掛かってきた電話は手短に終わっていた。

「イシハラ、ソメヤさん迎えに行ってくれよ。覚えてるだろ？」

「はい！」

すぐにイシハラくんは、ソメヤさんを伴ってに戻ってきた。

「マイカワさん！ご無沙汰です。立派な店じゃないですか」

「ありがとうございます。いろんなお店の良いトコ取りですけどね」

「素晴らしい！さすがですよ」

「どうぞこちらへ」

彼が店内へと案内しようとしたとき、私と目が合った。

「あれ？どっかで逢いましたっけ？」

「いえ」

「ソメヤさん、どしたの？」

「彼女は、店の？」

「女房ですよ」

「そうですか。ナイレポのソメヤと…ああ！」

「はい？」

「六本木のユイちゃん？」

「ユイです。マイカワがお世話になっております」

「うちの表紙出たよね？」

「はい」

「マイカワさんの奥さんでしたか…ビックカップルですな」
カップルとは何時の時代の言葉だろうか。

ここは、営業スマイルで切り抜けることに成功した。

「マイカワさん、写真いいですかね？」

「構いませんけど？」

「ユイちゃんもいいですか？取材の帰りで、一緒にカメラマンも来てるんですよ」

「いいですよ。彼女達もいいですか？」

私は、マコちゃんトリナちゃんも呼んだ。

「いいですよ。フィルムとか買出しに行かせてたんで、今呼びますね」

カメラマンが来ると、いきなりソメヤさんの取材が始まった。

「今回、お店作りのコンセプトはなんですか？」

矢継ぎ早にいくつもの質問を彼に投げ掛ける。

「オーナーは18歳ということですが、迷いはありませんでしたか？」

それらの質問に臆することも無く、自信を持って答える彼もすごい。

「最後に何かアピールは？」

「当店では一切、宣伝活動は致しません。ご来店頂いて当店の営業を感じてください」

「ありがとうございます」

一線級の2人のやり取りが終わると、やっと周囲の人間も大きく息が吸えた。

「キングと比べるのも何ですが、今回のキャストはかなり自信を持ってます」

「ほう。相変わらず強きですね」

「同業のお店が駅の反対側に多いのに対し、こちら側で出店するのも自信の表れと取って」

「頂いて構いませんよ」

「マイカワさんの強きは裏付けがありますからね。期待してますよ」
「十二分に！」

「また校正を持ってきますので、目を通してください」
「分かりました」

数日後には、ソメヤさんは校正をFAXで送るという話で店を跡にした。

帰宅すると、彼はすぐに床に就いた。

やはり、疲れが溜まっているのだろう。

彼を起こさないように、私も寝る準備をした。

携帯のランプが光っていることに気がついた。

「不在着信：お母さんからだ」
留守電が入っていた。

『病院の検査結果が届いてたわよ。気が向いたら取りにきなさい』
母が気が向いたらと言っていた。

気が向いたら、その内取りに行くことにしよう。

「ボス、今日辺りスタッフの面接いいですか？」

「おお、悪い。忘れてたな。呼んでくれよ」

ここ数日、何度もイシハラくんからそのセリフを聞いていた。
ずっと近くで待たせてあるようなことを聞いた。

しばらくするとイシハラくんの後輩達がやってきた。

「ボス。右からオオシマ、ハラダ、オオハシです」

「よろしく願います！」

「よろしくな。身分証明書のコピーと履歴書書いてもらってくれ」

「はい」

「俺から事務的なこととボスの性格を話しておきました」

「俺の性格？」

「サディステイックで怖くて、一生着いていきたい親方だって」

「お前、極端なところしか話してねえじゃねえか」

「イシハラさんがキングに入社してから、ずっとボスのことをお伺いしてましたので、心の

準備は出来てます」

「何だ？心の準備って」

「お前ら！もう1人重要なお方を紹介するのを忘れてた」

「忘れるくらいの人なんすか？」

「バカ野郎！黙って聞け。こちらにいらっしやるのがユイさんだ」

「みんなよろしくね」

「よろしく願います！」

「みんな若そうだね。いくつなの？」

「18つす！」

イシハラくんは、いきなり後輩の頭を叩いた。

「18ですだろうが！」

「あはは！イシハラくんの言葉遣いと、そんな差はないよ？」

「そうっすか？違いますよ」

「何だ、お前ら18か？」

「はい。ボスと同年のはずです。イシハラさんから聞いていましたから」

「イシハラはいくつになったんだ？」

「俺、20っすよ」

「コマツは？」

「私は24です」

「ふーん」

彼の得意技、『振り逃げ』だ。

最初は、興味をそそられて話に入ってくる。

イシハラくんに聞いた時点で、もうたくさんだと思っただけ。
コマツくんに聞いたときは、完全に『ついで』だ。

「よし！今日はこれで締めて蔵でも行くか」

「うつつ！」

「頂きます！」

こういうときのイシハラくんの仕事は、目を見張るくらい早い。
いや、早くなつたと言つべきだろう。

これも彼の教えなのだ。

「社長、いらつしやい。良い芋焼酎が入ってるよ」

「大将、奥の座敷いい？」

「あいよ！お座敷用意して！」

何も注文をしていないのに、ロックグラスと一升瓶を持って、マスタ―が来た。

「とりあえず、ロックで一杯飲んでみてよ」

「香りも良いね。芋ってこんなのもあるんだ？一本ちようだい」

「あいよ！」

グラスが行き届くと、イシハラ隊長が仕切りだした。

「お前ら、ボスは酒癖悪いの嫌いなんだから緊張してるよ」

「ボス、頂きます！」

「ユイさんにも気を遣えよ」

「はい！」

「私は、ボスが居ればいいわよ」

「ユイにはいいよ。お前らは俺の若い衆であつて、ユイのではないからな」

「ありがたいセリフだ！心しろ！」

「うつつ！」

「イシハラくん…うるさいよ」

「ユイさん、やっぱり最初が肝心っすから」

しばらくすると当の本人でもある、イシハラくんが酔っ払いモードに入った。

「ボスは殿でユイさんが奥方。コマツさんが軍師で俺が幕僚だ！」

「イシハラさん、俺らは？」

「足軽だろ！」

「あはは」

イシハラくんの後輩達3人が加わったチームマイカワ。
これからがスタートだ。

ユイ43

イシハラくんの後輩3人がスタッフで加わった。
レセプションの招待状を配るのも残り僅かとなった。

「ユイさん…」

「ユイさん!」

「どしたの?」

「しっ!」

振り向くとイシハラくんが人差し指を口に当てていた。

「明日の13時、寿司春に集合です」

「あ、いいけど何?」

「ボスには内緒です。詳しくはそこで」

「う、うん」

寿司春の場所を聞いた。

自由が丘の商店街の入り口にあるという。

翌日、イシハラくんの言うとおり、彼にバレないように寿司春に向かった。

店の前まで来ると暖簾は掛かっておらず、店内に人影が見えた。

「こんにちはわ」

店内に入るとイシハラくんだけではなく、みんな居た。

「ユイさん、おはようございます」

「ユイちゃん、おはよう」

気がつけば、彼以外の人間がここに居た。

「何?どうしたの?」

「じゃそれは俺から…」

イシハラくんがみんなを制すると静かに口を開いた。

「実は結婚披露宴をしようと思ひまして」

「誰の？」

「ボスとユイさんのに決まってるじゃないすか」

「ええ！」

イシハラくんが私の天然ボケにも挫けず続けた。

「実は招待客ももう集まってるんです」

「ウソ！」

「レセプションの当日にサプライズでやるうかと」

「アラヤダ」

「ユイちゃん、今のおばさんみたいよ……」

ビツクリして素直に出た言葉に、マコちゃんからツッコミが入った。

スケジュールとしては、こうだ。

まず当日、ぶていっくんが打合せと称して、彼を連れ出す。

難癖つけて、彼にタキシードを着させるという話だ。

「そこが難しいんですけどね。ボスは警戒心が強いっすから」

店内では、彼が入ってくるのを待つて、披露宴がスタートする。

スタッフ、マコちゃんやリナちゃんが裏方に回ってくれるという。

「だからユイちゃんがボスに黙っててくれないと、計画が水の泡になっちゃうのね」

「ありがとう。彼には何があっても内緒にしとくね」

「ユイさん、当日はお願いしますね」

「分かった」

「じゃユイちゃん、ドレスのサイズ取りに行こう」

私は、マコちゃんとリナちゃんと寿司春を跡にし、車で出掛けた。

しばらく車を走らせると、港区にある貸衣装屋に着いた。

「ここね、私の友達が居るんだ」

「へえ」

体の数箇所の寸法を計った。

するとベースとなるドレスを持ってきてくれた。

「足元、気をつけてどうぞ」

ドレスの背中の部分から足を入れて着てみた。

ずいぶん大きい。

「ユイちゃん、小さくて可愛い！」

「七五三みたい？」

「そう言われると見えちゃうってば」

貸衣装とは良く出来たもので、ここから微調整が効くようになって
いる。

店員が手際よく、色んな場所を詰めていくと丁度良い大きさになっ
た。

「きつくないですか？」

「ありがとうございます。ピッタリです」

「ユイちゃん、ウエスト細いね」

「ガリガリだから、彼に色気が無いって言われるの」

「羨ましいよ」

「オツパイ小さいとも言われる」

「あはは」

私は鏡に映るウェディングドレス姿を見て、大きな溜息をひとつし
た。

「ユイちゃん、苦しい？」

「ううん。彼と結婚したんだなって実感が湧いてきたかなって」

「バツイチ発言には、驚いたけどね」

「あれは私にとって、本当の自分じゃなかったときだから」

「今が真正正銘のユイちゃんなんだ？」

「そうだね」

「私の夢が1つ叶った」

「いくつかあるの？」

「もう1つだけ。彼の子供を産みたい」

リナちゃんが私の一言に微笑した。

「意外と質素なんだね」

間髪容れず、マコちゃんが口にした。

「リナちゃん、女ってそんなもんだよ」

「これでサイズ調整しておきますね」

「はい」

「ユイちゃん、次行こう」

貸衣装屋を出た私達は、再び車で移動した。

「マコちゃん、ここじゃない？」

同じ港区内で、コインパーキングで車が停まった。

「リナちゃんとユイちゃん、先に行つてて」

「どこ行くの？」

「美容院だよ。ちょっとした打ち合わせ」

決して目立たない佇みの店がそこにあった。

「おはよ」

「あ、おはようございます」

そこに居たのは、シズカちゃんだった。

なぜか私は、彼女の姿を確認したときに胸騒ぎがした。

「明日ヘアメイクをすることで、今日少しカットしましょうか」

「そうだね」

「え？ナニナニ？」

私の知らない間に話が進んでいた。

「じゃユイさん、こちらへどうぞ」

シズカちゃんに促された私は、椅子に腰掛けた。

するとマコちゃんが、カタログを持ってきた。

「こんな感じにしてもらおうからね」

「う、うん」

私にとつても全てサプライズ。
いろんなことがマコちゃんトリナちゃん主導で進んでいった。

「ユイさんの髪って、細くてサラサラですね」

「そう?」

「すごくキレイな髪してますよ」

「ありがと、シズカちゃん」

鏡に映る、私とシズカちゃん。

胸騒ぎは、彼がスカウトした彼女に対するヤキモチだろうか。
何か変な感じがした。

「シズカちゃん、ロングヘアはキープしてね」

「ボスは長い髪が好きだから、切り過ぎないでね」

「何で2人が彼の好み知ってるのよ」

私はマコちゃんトリナちゃんの発言に笑みがこぼれた。

「分かりました」

カットは、すぐに終わった。

毛先を揃えたり、ヘアメイクしやすい状態にしただけのことだった。
た。

「シズカちゃん、ありがと」

「明日よろしくね」

「はい、分かりました。それではユイさん、また明日よろしくお願
いします」

「あ、はい」

「じゃボスに気付かれない内に店に戻るっか」

「そだね」

彼にバレないように、急いで店に向かった。

「ユイちゃんさ」

「ん？」

「間違つてたらそれでいいんだけど」

「どしたの？」

「シズカちゃんと何かあった？」

「ううん、特に無いよ。初めて店に来たとき以来、あんまり話してないよ」

「何か様子が変わったから」

「そう？ヤキモチってこと？」

「う、うん。そんな感じ」

「違和感が無いと言ったら嘘になるけど、そんな感じじゃないかも」

「複雑な心境なんだ？」

「そだね」

シズカちゃんに対する感情は、うまく表現できなかった。

嫌な感じじゃないのは、確かだと思う。

何か彼女には、特別な何かを感じた。

そんな話をしている内に、私達は店に戻った。

店に戻るとエレベーターホールで、みんなと偶然合流した。

「お疲れ。マコ、万事オツケーか？」

「もちろん！」

「じゃすつ呆けて店に戻るか」

「自然に振舞わないとね」

「ちよつと待てよ…ユイさん達は時間ずらしてもらえませんか？」

「うん？いいよ」

「相手は難攻不落のボスつす。念には念を」

「そうだね。って言うか私だけずれるよ。マコちゃん達はイシハラ

くんと」

「らじゃ」

「じゃ私も時間をずらします」

「コマツさん、そっちのがいいね」

「分かりました」

私は時間つぶしの為、自由が丘の商店街へと向かった。

この辺りは、古い町並みと新しいビル郡が同居している。

古き良き下町を感じさせる情景だ。

彼がこの街を選んだ特別な理由はない。

景観がどうだとか、町並みがどうだとかはないはずだ。

確かに商戦的には、いろいろな情報を集めたかもしれない。

私は独り、ウィンドウショッピングではなく商店街の町並みを楽しんだ。

商店街の端から端を歩いた。

もうそろそろいい時間だろう。

彼の携帯に連絡を入れた。

「ユイ！もう店閉めちゃった？」

「おお！どこ居る？まだ何人が残ってるけどもう閉めるってよ。蔵に居るぞ」

「分かった！」

彼との電話の後、すぐにマコちゃんから連絡があった。

「蔵に居るって」

「何か言われた？」

「ううん」

「問題は今晚、ユイちゃんが帰宅してからだね」

「大丈夫。彼は私のこと信じてるから」

「おおお、カッコ良いセリフだわ」

私達がちょうど酒乃蔵に着くと、コマツくんもやって来た。

「すいません、遅くなっちゃって」

「こんな時間までやらなきゃいけない仕事があんの？忙しいのか？」

「スタッフのみんなに仕事の説明をしました」

「マコやリナも？」

「そうですね？」

「ふーん」

彼は腑に落ちない表情を見せた。

私達の微妙な変化を察知しているのだろう。

観察力の鋭い、彼ならではの読みだ。

「おつかれさま、ダーリン」

「どこ行ってた？」

「仕事に決まってるでしょ」

鋭い彼は、何かに気が着いている。

嘘や隠し事することに少し後ろめたさがあった。

帰宅後は、私の方が意識してしまっていたかもしれない。

「ユイ」

「ん？」

「何かあったか？」

「何かあって？」

「様子がいつもと違うだろ？」

「ユイが？」

「そう。俺が思うにみんなで何か企んでるように見えたぞ？」

「みんなで？気にし過ぎじゃない？」

「そっか」

彼がそれ以降、問い詰めてくることはなかった。

翌日、昼頃に店に集合した。

「じゃボス、俺達は残りの招待状を渡しに行つて来ますね」

「おう」

「私は許可関連を回ってきます」

「おう」

「私達は制服のチェックをしに行つて来るね」

「ぶていっくんのところ？」

「うん。系列店の原宿だつて言つてたよ」

「分かつた」

「ボス、ぶていっくんが店に来て欲しいと連絡がありました」

「ユイ達と一緒に話じゃないの？」

「はい。修正は原宿の店の方みたいです」

「分かつた。1階でいいんだな」

それぞれが仕事と称して、店を出て行つた。

正確に言つと出て行くフリをした。

彼はうまく誘導され、ぶていっくんの店に向かつた。

「おし！急いで準備に取り掛かつぞ！」
「うつす！」

「じゃ私達はユイちゃん連れて行くね」

「マコ、頼んだぞ」

「あいよ」

「イシハラさん、1人手伝ってください」

「あ、いいよ」

「オードブル、寿司がたくさんあるんですよ」

「ハラダ！コマツさんとこ手伝え」

「うつす」

イシハラさんの号令の下、一斉に支度に取り掛かった。

私達はシズカちゃんの美容院へ向かった。

わざわざ店休日にシズカちゃんが出てきてくれた。

「おはよう。シズカちゃんよろしくね」

「おはようございます。もう段取りは出来ていますよ」

「時間無いからお願いね」

さすがプロの手付きだ。

シズカちゃんは手際良くヘアメイクをしていく。

イシハラさんの予想で、タイムリミットは2時間半から3時間。

それ以上、ぶていっくんが彼を連れ回せる訳がないと判断していた。

イシハラくんが描いた作戦はこうだ。

ぶていっくんがわざわざ、少し離れたところまでご飯を誘う。

ここでぶていっくんが、彼を少し酔わせる必要がある。

しばらく飲み食いをしてから、自由が丘に戻る。

ここからが問題だ。

彼にタキシードを着せなくてはいけない。

ぶていっくんの店で難癖付けて、タキシードを着せる。

その時点でぶていっくんから、イシハラくんへ連絡が入る。

そこへイシハラくんが彼にトラブルの連絡を入れるという段取りだ。この間に出席してくれるみんなを案内し、店内の準備を整える。

「こんな感じでいかがですか？」

「良いね」

「ユイちゃんキレイだよ」

「ヘアメイクの腕が良いからでしょ」

「いやいや…」

マコちゃんとりなちゃんが驚いていた。

「ユイさん、素敵ですよ」

「ありがとうございます」

「ユイさん、お時間がありません。私も店へ向かいます」

美容院を跡にした私達は、貸衣装屋へと向かった。

「お待ちしました。こちらへどうぞ」

ここでもすでに私を待ち構えていた。

店内に入ると、係りの人が2人でドレスを着させてくれた。

「おおお！」

「ユイちゃん、すごいキレイだよ」

ヘアメイクをバッチリ決めて、ウェイディングドレスを着た。

鏡に映るその姿を見た私は、自然と涙がこぼれた。

「ユイちゃん…」

「あはは、ごめんね。今から泣いちゃったらしょうがないよね」

私の涙にマコちゃんとりなちゃんがもらい泣きしていた。

「さあ時間が無いから急ごう」

マコちゃんの運転する車は、急いで自由が丘に向かっていた。

駅の近所まで来ると渋滞に巻き込まれてしまった。

「嫌だ…急いでるのに」

「マコ、時間は？」

「今まですんなり来たから、少しは余裕あるけど」

「ボスがどういう動きするか分かんないからね」

その後10分を経過しても、数メートルしか前に進まなかった。

「作戦が失敗したら困る」

「ユイちゃん…走ろう！」

「えええ！この格好で？」

リナちゃんに手を引っ張られると車から降ろされた。

「ユイちゃん、スカート持って。行くよ！」

白昼にウエディングドレスを着て、自由が丘の駅前を走った。

「あはは！ユイちゃん、ドラマみたいだね」

「笑いごとじゃないよ。すごい恥ずかしい」

幸せと続く道を走っているような気分だった。

ユイ45

ドラマ風に自由が丘の街を疾走した私は、やっとのことで店に着いた。

エレベーターを降りると事務所へと連れて行かれた。

「ユイちゃん、とりあえずメイク直そう」

「私も少し手を入れさせてください」

化粧を直してる間、シズカちゃんがへアメイクを直してくれた。

「リナ、呼んできて」

「イシハラくん、マコがオツケーだって」

リナちゃんがイシハラくんにサインを出すと店内が暗くなった。

「それでは定刻となりましたので、新婦の入場となります」

「ユイちゃん行こう」

マコちゃんに誘導され、エントランスへと向かった。

「それでは盛大な拍手でお出迎えください」

スポットライトに照らされた。

店内は招待客で埋め尽くされていた。

学生時代の友達やユミさん、ユカさんの顔も見えた。

VIPルームまでの道程で、大きな拍手に迎えられた。

「それではユイさん、ご着席ください」

イシハラくんが今回の主旨を説明する。

このパーティは、イシハラくん以下、スタッフやキャストで企画したこと。

彼は何もこのことを知らないこと。

「ボスは間もなく、何も知らないまま、この携帯が鳴ると1分ほどで到着します」

店内は、大爆笑に包まれた。

次の瞬間、イシハラくんの携帯が鳴った。

「はい。オツケーです」

携帯を切ったイシハラくんの顔がニヤついた。

「ボスが参りますので照明を」

照明が真っ暗になると、店内のザワメキがなくなり静かになった。

『ウーーン』

エレベーターのドアが開いた音が聞こえた。

「イシハラ！」

そう叫んだ瞬間、エントランスのダウンライトが彼を照らす。

状況を把握していない彼の表情が見えた。

店内では、みんな手を叩いて大爆笑していた。

「新郎のご入場です。みなさん盛大な拍手でお迎えください」

拍手の渦の中、フロアのライトが少しずつ明るくなる。

「ボス、こちらへ」

ハラダくんが彼を誘導する。

相変わらずキョトンとした表情の彼が歩を進める。

「ボス、そこで止まってください」

「それでは新婦のお披露目です。みなさまVIPルームをご覧ください
さい」

イシハラくんの合図で立ち上がる。

VIPルームの照明がゆっくりと明るくなった。

「それでは新郎は、新婦の隣へお座りください」

VIPルームへと続く階段を彼はゆっくり登り、私の隣へ座った。

「最近、みんながソワソワしてたのはこれだったのか」

「驚かせたくてね。イシハラくんがサプライズしたいって企画してくれたの」

やっと自体を把握したのか、彼に笑顔が戻った。

「主役が揃いましたので、乾杯の音頭をキング店コダマ店長、お願いします」

「ただいまご紹介に預かりましたキング店々長の兎玉でございます。僭越ながら乾杯の音頭

を取らせて頂きます。お手元のグラスをお持ちの上、ご起立の程、お願いします」

「新郎、新婦の末長いお幸せと、ならびにご臨席のみなさまのご多幸とご繁栄、ご発展を

お祈り致しまして、乾杯！」

「乾杯！」

乾杯の唱和の後、盛大な拍手に包まれた。

「それではしばらくご歓談ください」

イシハラくんの仕切りに彼が大爆笑していた。

「ぶっ！いきなり放置プレイかよ」

「あはは」

「そういえば、うちもそうだけどお母さんは呼んでないの？」

「イシハラくん曰く、今日はそういう堅苦しいのは無しで、仲間内のパーティなんだって」

「そっか。でも良いタイミングだな。みんなに店を見てもらえた」
「そうだね」

イシハラくんが企画してくれたサプライズ披露宴。

彼にとっても店を披露するいい機会となった。

「ボス、店長がここにマイクを持っていけとのことなので置いてお

きますね」

ハラダくんが、彼にマイクを持ってきた。

「それではスピーチなんて堅苦しい事は致しません。私がランダムに選んで、マイクを渡し

ますので、主役と会話を楽しんでください」

「イシハラくんさ、もう酔ってるよね」

「完全に酔っ払いだ。あいつに任せてると大変なことになるぞ」

「では最初にボス！お願いします」

「ほらな」

「あはは」

彼は仕方なさそうにマイクを取って、立ち上がった。

「本日は何にも聞いてなくてみんなに驚かされたんですが、方々ご多忙の中、私達に為に

お集まり頂き、ありがとうございます。そしてこのイシハラのおサイブライズにご協力して

くださったみなさま、高いところからではありますが、ありがとうございます」

私も立ち上がり、彼と2人でお辞儀をした。

「ボス、そろそろ時間です。ご着席ください。それでは、しばしご歓談ください」

彼の言うとおり、傍若無人の仕切りにフロアが大爆笑だ。

彼の恩師でもある、社長がVIPルームへと上がって来た。

「マイカワおめでとう！イシハラもお前の為にこの場を用意するなんて良い男になったな」

「ありがとうございます。ハチャメチャですけど可愛くてしょうがないですよ」

「お前の若い頃にちよつと似てきたかな。あいつも将来楽しみだよ」
社長は私達にビールを注いでくれると、彼と握手をして戻って行った。

久しぶりに逢う、アサミ達が来た。

「ユイおめでとう！ボスお久しぶりです」

「ありがとう？誰だっけ？」

「やだな、アサミです。スキー旅行も一緒に行つたじゃないですか」

「あ、木村の！」

他の女の子達も紹介され、ビールを注いでくれた。

「ちよつと待つてね」

彼はマイクを取って立ち上がった。

「イシハラ、こういうときってバケツとか俺の足元に置いとかなく
ていいものなの？」

「え？すみません、電波が悪くてあんまり聞き取れません。続いて

リナさんから一言！」

「ええ！」

リナちゃんもびっくりしていた。

横で大笑いしているマコちゃんに促されるとマイクを持った。

「ボス、この度はおはようございます」

「おはよう？ん？」

「すみません、緊張しちゃってます。明日は何時集合ですか？」

「1日オフにして、明後日のレセプションに備えるようにしてくれ」

すかさず、イシハラくんがりナちゃんからマイクを取り上げた。

「ボス、リナちゃん…。業務連絡は後でお願いできますか？」

キレの良い、イシハラくんのツツコミに店内が笑いの渦と化する。

「それでは乾杯の音頭を取って頂いた児玉店長！」

また俺かよといった表情で、渋谷コダマくんが立ち上がる。

「…の隣でアサミちゃんといちゃついているキムラさん！一言お願いします」

イシハラくんに中指を立てながら、コダマくんは席に付いた。

「イシハラ、飲んでる方がトークにキレがあるな」
やり取りの一部始終を見ていた彼も大笑いしていた。

イシハラくん達が企画してくれたサプライズ披露宴。

キムラくんから、若かりし頃の彼のエピソードが飛び出した。

コダマくんは、彼とキムラくんと寮で共同生活していた。

そのときの話をしてくれた。

「マナブおめでとう！今日は俺の靴下履いてないか？」

「ごめん！履いてるわ。俺の片方どこいったか知ってる？」

「コダマが履いてるみたいだわ」

共同で生活していた為、よく靴下が行方不明になったという。

「いよいよ盛り上がって参りました！新婦の友人は名前が分からないので適当に…あなた！」

イシハラくんにマイクを手渡されたのは、メグミだった。

メグミは口に含んだモノを急いで飲み込んでいた。

「怒ると怖いユイの同級生でメグミです。ユイは昔から美人タイプで後輩の男の子達の

中でファンクラブもあつたくらいでした。そんな状況を同性から見ると近寄り難く、

嫌味の1つでも出るはずなんですが、ユイはみなさんも知ってる通りひょうきんで

天然で、ちよつと抜けているところもあります」

「ちよつとメグ！余計な事は言わないでよ？」

天然さでは、メグミも負けていない。

空気を読めないようなコメントをしないか、心配になった。

「見た目とは裏腹にユイはざつくばらんで、私には自分のこともよく話してくれました。」

小さい頃、喘息で入退院を繰り返し、友達がなかなか出来ずに家

に帰っても一人っ子の

ユイはいつも1人で遊んでいたと。その頃にお父さんが他界してしまつて、事実を受け

止められなかつたユイはお父さんを探しに、東京から横浜の実家までお父さんを探し

に行つたことも話してくれたりもしました」

私はメグミの言葉に、父を思い出していた。

今でも覚えてる。

1人、父を探しに祖母が居る横浜まで行つたことを。

胸が熱くなつた。

晴れ姿を見せたかつた。

今の私を見て欲しかつた。

父は、私の姿を見て、何と声を掛けてくれるのだろう。

涙がこぼれた。

「ボス、ユイは寂しがり屋です。これから長い人生ずっと傍に置いてあげて下さい。本日は

おめでとございます。心より祝福致します」

メグミのスピーチにフロア中が拍手に包まれた。

「メグミさん…心温まるエピソードを…ありがとございました」

「イシハラ、泣き過ぎだろ」

彼のツツコミに店内は大爆笑だつた。

その後、イシハラくんが泥酔してしまつた為、スピーチだらけになつた。

ユミさんやユカさんは、私達2人の共通の友人として話をしてくれました。

「そろそろ時間ありませんので、最後に社長から一言頂きたいと思ひます」

「マイカワがうちのグループに来たのは2年くらい前になります。まだヤンチャ坊主っ気が抜けなくて、すぐに怒ったり…かと思うと泣きムシだったり。しかしすぐに自分の居場所を見付け、仲間と助け合い、切磋琢磨して仕事を頑張っていました」

「いろんな可能性を秘め、これから光り輝こうとする力は群を抜いていました。壁に当たり立ち止まってる時も、少し背中を押してやれば、必ず壁を越えてきた男です」

「兄貴と慕う人間の突然の死にも彼は、必死に涙を流さず、乗り越えてきました」

「私はそれが可愛くてしょうがなかった。そして成長すると今度は俺の方がマイカワに夢を見るようになりました。これから人生の伴侶と、またたくさん仲間と共に夢の続きを

見せてくれることを信じています。2人とも結婚、おめでとう！社長から送られた言葉に彼は、涙ぐんでいた。

「それでは最後に、ボスからご来場のみなさまへ一言お願いします。彼がそつと私の手を握った。

私は彼と一緒に立ち上がる。

「みなさん、本日はご多忙の中、私達の為にお越し頂き、誠にありがとうございます」

来てくれたみんなに2人はお辞儀をした。

「私にとってユイは最後の女で、ユイにとっても私が最後の男で居

たいと思います」

「明後日、いよいよレセプションを開催致します。ここまでこれたのもみなさんのおかげで

私の力はまだまだ微力です。今後とも私達へご指導ご鞭撻を宜しくお願い致します」

「そして最後にこのような場を企画してくれたイシハラ！どうもありがとう。そして裏方に

回ってくれたスタッフやキャストのみんな、お疲れさん！」

「高いところからではございますが、お越し頂いた皆様、本当にありがとうございました」

フロア中がスタンディングオベーションとなり、拍手の渦となった。

「せっかく締めてもらったところですが…」

「何だよイシハラ？」

「みなさん、新郎新婦のキスを見てないですよね？」

「コラコラ」

居合わせた人みんなで『キス』のシユプレヒコールが起こったのは言うまでもない。

「カメラをお持ちのみなさま、どうぞ前へ前へ」

私は彼の首に手を巻きつけ、目を瞑った。

彼は少し背伸びした私にキスをした。

「いやーおめでとうございますー！」

眩いばかりのフラッシュの中、再び盛大な拍手に包まれた。

「新郎新婦の2人はこちらへ」

私達は、エントランスへと誘導された。

「それでは、三本締めで本日は御開きにしたいと思います。キムラさんいいですか？」

イシハラくんは、千鳥足でマイクを手渡しに行った。

「皆さん、お2人のご結婚のご多幸を祈念して三本締めを致します。お手を拝借！」

オオハシくんがキムラくんのマイクを持って、スタンドとなる。

「よゝお！」

三三七拍子が3度行われた。

「ありがとうございます！」

2人でエントランスで来てくれた方々のお見送りをした。

私の友達は抱きついて、祝福をしてくれた。

彼は1人1人と確かめるように握手をしていた。

全ての見送ったときには、夜になっていた。

大切な彼との結婚。

彼を慕う仲間が用意してくれたパーティ。

出逢う前の彼のエピソード。

数年振りに逢えた旧友。

イシハラくんのハチャメチャな仕切り。

忘れられない1日となった。

母が居たら間違いなく、泣いていただろう。

仲間内のパーティだと言ったイシハラくんに感謝をした。

「イシハラ、最後に残ってるみんなで写真撮らないか？」

「イシハラさん！」

「何だ寝てんのか？コマツ、その写真も数枚撮ってやれ」

「あはは！分かりました」

スタッフが片付け終わった頃、イシハラくんがむくつと目を覚ました。

もちろん顔には、落書き多数してあった。

イシハラくんを何とか彼の横に座らせると、コマツくんがファインダーを覗いた。

「イシハラさん、傾いてますよ」

「俺が後ろから支えるようにします」

「じゃオオシマくん頼んだよ。5秒後に行きます。はい！」
フラッシュが心地良い眩しさだった。

自然に笑顔が膨らむ。

忘れられない大切な1日となった。

「ボスちよつとよろしいですか？」

イシハラくんがVIPルームへと彼を呼んだ。

「私、着替えちゃうね」

「あいよ」

「ユイちゃん、一人で脱げる？」

「分かんない」

マコちゃんが事務所に来てくれた。

「マコちゃん、今日はどうもありがとう」

「うちのバカは、超酔っ払いだっただけどね」

「彼も今日のことは感謝してたよ」

「喜んでもらえれば幸いだよ」

「嬉しかった。それより楽しかったかな」

「あはは。じゃホールで待ってるね」

ドレスを脱がせてくれると、マコちゃんは事務所を出て行った。

「リナちゃんも今日はありがとうね」

事務所を出るとマコちゃんとリナちゃんの目が点になっていた。

「ユイちゃんジャージって…」

「だって楽しじゃない？」

「まだ夜は終わんないよ？これ！私達からの」

2人は大きな箱を渡してきた。

「え？何？」

「早く開けて見てよ」

箱を開けると純白のイブニングドレスが入っていた。

「わあ…ありがとう！」

「良いホテル泊まるんだから、それに着替えて」

「ホテル？」

マコちゃんとりなちゃんが、彼と話すイシハラくん達を指差した。

「それはイシハラくんから、ボスへプレゼントする予定なの」

「今日、来てくれたみなさんから祝儀を頂いています。これは予想出来たので、記帳簿を

用意しておきましたので、お返しをこちらから発送という形で行います」

「何から何まで悪いな」

「社長からは伝言を預かっておりまして、離婚をしたらタダじゃないぞ、オープンして

しばらくして落ち着いたら、新婚旅行でも行って来いと」

「何だこれ、祝儀袋が立つちゃってるよ」

「帯付きです。くれぐれもお返しをするなどキツく言われました」
コマツくんがイシハラくんに続く。

「お返しは半額返しで、選べるギフトブックみたいな感じでよろしいですか？」

「何か俺達に縁のあるものを添えたいな」

「写真をボーイ達に撮らせてあります。ベストショットを選んで、それを添えるように

しましょうか？」

「そうしてくれるか」

「会計報告は別途、報告します。詳細は前後しますが、祝儀の残りはこちらです」

イシハラくんが祝儀袋を彼に手渡した。

「それと最後にこれは俺からです」

ホテルのカードキーのようなものを手渡していた。

「今晚くらいは、夫婦でゆっくりしてください。赤坂にスイーツを取りました」

「ありがとうな」

「ボス、ハラダを車で待たせてます。ホテルまで送りますよ」
「悪いな、イシハラ。甘えさせてもらっわ」

「え？ホテルって？」

「予約してたよ。俺はこれくらいしか出来ないって」

「ユイちゃん、イシハラくんってどんどんボスに似てきてるよね」

「男らしくていいじゃない。ね？マコちゃん」

「どうだか…。ほらユイちゃん、ボス行っちゃっよ」

「ボス、待つて！ユイちゃん着替えるから」

「あ？ジャージに着替えてんじゃねえか」

「いいからちよつと待つてて」

再び、事務所でドレスに着替えた。

「ユイちゃんいい？」

「いいよ」

マコちゃんとりなちゃんがドアを開けてくれた。

「じゃーん！ボス、ユイちゃんどう？」

「ああ、シビれるね」

「よかったよかった」

「じゃ下まで送るね」

ハラダくんの車で赤坂のホテルへと向かった。

イシハラくんがロビーで受付をしてほしいとのことだった。

「マイカワですが」

「イシハラ様よりお伺いしております。今、係の者が案内致します」

ロビー横にあるエレベーターで最上階へ向かった。

「こちらでございます」

両開きのドアを開けてもらつと見たこともない豪華な部屋だった。

「ただいまシャンパンとオードブルをお持ち致します」

「イシハラは奴、無理しやがって」

「最高の1日だったね」

「みんなには感謝だな」

インターホンが鳴る。

「あ、俺が出るよ」

アイスペールに入ったシャンパンとオードブルが運び込まれた。

「ドンペリか」

「3万くらいするんじゃないの？」

「こついうところだから、もう少しするかもな」

「オードブルもいいところ揃えてるね」

「これとドンペリで5万くらいするんじゃないか？」

「そうかもね」

「イシハラからのプレゼントだから、値段を詮索しないであり難く頂くとするか」

「バルコニーに行こうよ。せっかく用意してくれたんだから」

「ちよつと飲み過ぎだけど、夜景でも見ながら飲むか」

ここは最上階で雑踏も乾いた風にかき消されて聞こえなかった。

建物から漏れ出る光や広告照明、街頭の光がキレイに見えた。

少しずつだけ注いだシャンパンで、彼と私は乾杯した。

「最高に気持ち良くて、最高の気分だな」

「うん。最高だね。マイカワユイです。不束者ですがそばに添い遂げさせてください」

「俺からもよろしく頼むよ」

背伸びしてカッコばかりつけて、スレていた私。

素直になれず、孤独だと思っていた私。

愛すること、信じることを教えてくれた彼。

そしてその彼との結婚。

彼を慕う仲間が用意してくれたパーティとホテル。

私の人生の中でも大切な1日になったことは間違いない。

付き合ってから、彼と一緒に居ない時間の方が少なかった。食べ物の好き嫌い、趣味嗜好、クセまで彼色に染まった。言葉で表現しなくても、お互いに気持ちを通じる。お互いのことを第六感で感じる事ができる。

世の中にこんな男と出逢うチャンスは二度とないだろう。大切に想う人のそばで、添い遂げる。私の夢の1つが叶った。

私のもう1つの夢。
彼の子供を産み、育てたい。
彼も子供は好きだと言っていた。
私が妊娠するのは、時間の問題だと思っていた。

しかし私はそのとき、病気が進行していることに気がついていなかった。
あのとき、実家に届いた病院の通知をちゃんと見ていれば……。

イシハラくん達が企画してくれたサプライズ披露宴。彼にバレることもなく、無事に成功した。

感動的なプロポーズを受け、婚姻届を出した。

披露宴やパーティをし、みんなに妻として紹介された。それもまたマイカワマナブの妻として意識させられた。

彼のマンションの固定電話。

『マイカワです』と電話に出ると、私は赤面した。

嬉しくもあり、照れもあり、1人顔を赤らめた。

郵便物等の受取りで配達員に『奥さん』と呼ばれるのも嬉しかった。

「お母さん！」

「はいはい。いつもアンタが帰ってくるときは唐突だね」

パーティの写真が出来上がり、母に見せる為、帰宅していた

「この前ね、オープン前の店でパーティしたの」

「開店前のやつね」

「うっん。彼の従業員が内緒で企画してくれたの」

母に披露宴パーティの経緯を話した。

「彼はずいぶん良い仲間に囲まれてるのね」

「違うわよ。彼の下についてから、みんな真面目になったの」

「そうなの？」

「私もそうでしょ？」

「そうね」

「彼は、今の仕事に出逢ってから変わったみたい」

「それまではヤンチャ坊主だったの？」

「かなりね。でも今は『男は仕事だろ』って感じになってる」

「ストイックなまでの仕事への情熱が見えるわね」
「お母さんもそう感じた？」
「仕事には厳しいような感じがしたわ」
「それより、写真持ってきたよ」
引き伸ばして額に入れた、ツーショット写真。
彼はタキシード、もちろん私はウェディングドレス姿だ。
パーティー内でのスナップを数十枚と集合写真を渡した。

「アンタ、良い顔してるじゃない。こっぴつ表情が出せるようになってたんだね」

「旦那に愛されてるからね」

「ユイは？」

「もちろん愛してるよ」

「お母さんは、出戻りさえしなきゃいいわよ」

「前回と今回は、全く別物」

「ユイの顔見れば分かるけどね。写真は飾るようにしとくよ」

「旦那はね、親を呼ばなくていいのかって話してたの」

「彼の方は？」

「来てないよ。仲間内のパーティーにしようって企画した人が提案したの」

「ちゃんと気を回してくれてたのね」

「あくまで彼をビックリさせようって企画だったから」

「はいはい。分かっていますよ」

その日がチャンスだったのだ。

実家に帰ってきており、病院からの通知に気が着くチャンス。私は披露宴のことで、体調のことなんて思っていなかった。もちろん体調はすこぶる良かったからだ。

20時頃になって、店の方へと戻った。

「ただいま。あれ、みんなは？」

「上ったよ」
「仕事残ってたんの？」
「今、終わったとこだよ。腹は？」
「お腹空いた。どっか行く？」
「蔵でも行くか」
「そうだね。店内の電気とか消してくる」
「ああ。こっちも締めちゃうよ」

久しぶりに2人でご飯に行った。
いつも彼の取り巻きが居るからだ。
「ボス、いらつしゃい！今日は？」
「女房と2人。カウンターでいいや」
「暇だから奥の座敷使っていいよ」
「ありがとう」
「はい、座敷に2名様！」
酒乃蔵のマスターがお勧めの肴を数品持ってきてくれた。

「ユイ」
「ん？」
「フロアのこと頼んだぞ」
「マコちゃんもリナちゃんも居るから大丈夫だよ」
「特にユイってのは、オーナーの女だって目線で見られるからさ」
「分かってるよ。何事も見本になるようにするよ」
「俺がプライベートでフォーローするから」
「頑張っちゃおうつと」
「マコとリナも態度次第では、辞めてもらうかもしれないからな」
「厳しいね」
「マコは自覚があるだろう。リナは気分屋なところがあるからな」
「そうだね」
「あと会社組織としては専務にするけど、何もなくていいから」

「うん」

「俺らも詳しいこと分かんないから、コマツにやらせるよ」

「元銀行マンだっけ。コマツくんが居て助かったね」

「まさに適材適所だ」

「いろいろ大変だとは思うけど、頑張ってくれ」

「うん、分かった!」

「辞めたくなくなったら早めに言ってな」

「妊娠したら辞める」

「そっか。早く出来るといいな」

私が子供を欲しがっていることは知っている。

彼もそれを望んでいてくれている。

本当はもう少し、2人っきりの時間も欲しい。

しかし私が彼の子供を産むことは夢なのだ。

「ちょっと明日、出掛けて来るね」

「あいよ」

「朝、出掛けて昼には戻るから」

「こっちは大丈夫だ。時間は焦らなくていいから」

「うん、ありがと」

翌日、1人出掛けたのは、水子の供養に出掛ける為だった。

彼との子作りは、幾度と無く行っていた。

だが今のところ、子宝に恵まれていない。

ネガティブな私が思いついたのは、中絶のせいではないのかと。

もうかなりの年月が経っているが、供養はしていなかった。

以前、ユミさんやユカさんに聞いたことがあった。

赤坂に水子供養が有名なところがあると。

供養の方法などは、全く分からなかった。

私は、現地に着くと水子地蔵を水で洗った。

そして今後、生まれてくるであろう子供の無事を祈った。

『あのときはごめんなさい』

『供養するのが遅くなってごめんなさい』

『あなたの分まで、愛情を込めて注ぐから許してね』
念じるように私は謝罪した。

当時の私は、中絶するしかなかった。

母となるはずだった、私に抱かれることもなかった。

もちろん父からの慈愛に触れることもない。

遺骨の遺品も無ければ、名前すら無いのだ。

もう2度と同じ過ちを犯さないよう供養した。

自由が丘への道中。

これで気分が晴れた訳ではない。

勝手な判断だが、謝れたことにほっとした。

事実を放置せず、祈りを捧げられたことで前向きになろうと思った。

その夜、帰宅してから彼にこの事実を話した。

隠している、嘘をついている相手が彼だというのが嫌だった。

彼はよくぞ話したと優しく抱いてくれた。

私は涙が止まらなかった。

亡くしてしまった命のこと。

受け入れてくれた彼の優しさに涙が止まらなかった。

『若気の至り』では、済まされないことは多々ある。

「ユイ、もう泣かなくていいんだよ」

「うん…」

「その子の為にもこれからが大事だ」

これからは、彼と生きていく。

そして生まれてくるであろう子供と一緒に。

それが私の夢。

ずっと3人で手を繋いで歩いて行きたい。
ずっと…。

いよいよハイエナジーのレセプション当日となった。

彼を含むスタッフは、早い時間から店に出勤していった。

夕方になって、マコちゃんとリナちゃんが迎えに来てくれた。

「おはよう」

「おはよ」

「ユイちゃん、いよいよだね」

「そうだね」

「アタシ緊張する……」

「リナっぽくないからやめて！ 伝染っちゃうから」

「あはは……」

「リナちゃん、ガチガチだね」

店に着くとキャストと思われる、数人の女の子が居た。

「ユイさん、おはようございます」

「おはよう、シズカちゃん」

「緊張しますね」

「私とマコちゃんは大丈夫だけど、リナちゃんがね……」

「あはは。リナさん、挙動不審ですよ？」

「オハヨ……シズカちゃん」

「リナ、ロボットみたいだった」

リナちゃんは、ボスをボーイ時代から知っている。

僅か数年後に自分の店を持つことになった。

オープンを感慨深く捉え、併せて緊張しているとのことだった。

「私、ヘアメイクがあるので更衣室に行きますね」

「いつてらっしゅい」

「ユイさん、おはようございます!」

「イシハラくん、おはよう」

「ちよつといいですか。マコとリナもちよつといいか?」

「はいはい」

「あいよ」

イシハラくんとコマツくんが私達3人をVIPルームへと呼んだ。

「キャスト全員に店のコンセプトやビジョンは叩き込んであります」
「うん」

「ボスイズムね」

「それ以外でのフォローをして頂ければと」

「ボスからも言われてる。大丈夫よ」

「派閥を作ろうとする人間が居たら、すぐに教えてください。こちらで対応します」

「私達3人もあまり固まり過ぎないようにするよ」

「はい、お願いします」

「キャストは何人くらい出勤するの?」

「出勤率の良い順番で45です。今日は顔見せなんで多めです」

「すごい数だね」

「ほとんどが素人です」

「あはは。プロは私達くらいか」

その間、店内にはたくさんの花が届いていた。

店長にイシハラくん。

以下、コマツ主任、スタッフメンバーにオオハシくん、ハラダくん、オオシマくん。

その他、アルバイト2名にキッチン専門に1人。

スタッフはボスを含め、8人体制でレセプションを迎えるとのことだった。

「ボス、おめでとう！」

聞き覚えのある、ガラガラ声だ。

「大将、ありがとう！」

「悪いんだけどさ、こっちも営業だから顔出せないのよ。だからこれだけ」

「大将すいませんね。ありがたく頂きます」

酒乃蔵のマスターが祝儀袋を持って、顔を出してくれた。

その後、絶え間なく届けられる生花や花輪。

「ボス！花輪の置くところがありません」

「兄ちゃん！俺の店の前も置いていいぞ。出入り口だけ開けとけばいいから」

「大将、それは申し訳ないよ」

「いいんだよ。1週間くらいしか出さないんだろ？近所なんだから、気なんか使っちゃって」

「お言葉に甘えます」

「大将がそういうならうちの前にも置かせないとね」

「ぶていっくん！」

「昼間のうちはさすがにどけてもらっちゃうようになるけど、夜のうちはいいよ」

「ありがとう。イシハラ」

「はい」

「そういうことだ。置かせてもらおう」

「あざっす！」

シズカちゃんから遅れること20分。

お母さんもやってきた。

「ユイさん、開店おめでとう。ボスは？」

「お母さん、ありがとう。ボスはあっち」

「ボス、おめでとうございます。これは少ないんですけど、お祝いです」

「お母さんいいのに。…すいません、頂きます」

「それではヘアメイクのスタンバイをさせていただきますので」

「今日は何人くらい予約入ってるの?」

「いきなり20人以上入ってますよ。恐縮です。ありがとうございます」

「今日はレセプションでわざと出勤も多めにしてあるからね。時間は間に合うの?」

「ギリギリですね」

シズカちゃんとお母さんは一気に4人をセットしていた。

私のヘアメイクをしてくれたときも、素早く仕上げてくれた。さすがプロの技だと感心した。

スタッフが店内のスタンバイを終える頃、キャストが続々と出勤してきた。

このような店には、個性豊かで自己主張の強い女の子が集まる。キャストはイシハラくんを中心に纏まっているとは言いが。

それらを纏めるのは、容易ではないはずだ。

私やマコちゃん、リナちゃんでも纏めなくてはいけない。

またキャストがエレベーターを降りてきたとき、他のキャストがざわめいた。

「おはようございまーす」

ルミちゃんとヨウコちゃんだった。

雑誌のモデルやタレント活動をしており、何人が知っていた。

私服のセンスやスタイルは抜群。

みんながどよめくのも分かる気がする。

「ユイさん、おはようございます!」

なぜかこの2人は、私になついていた。

私と彼女達の身長差は、20センチくらい。

なつくのはいいが、並ばれるといい気がしなかった。

「おはよ。2人とモスタイルが良くてカッコいいね」

「美人レベルはユイさんに負けますよ」

「とりあえず、見上げるの疲れるから座ろうよ」

「あはは。そうですね」

私達は、ソファに座って談笑していた。

「ねえ：2人つてたまに雑誌とかに出たりしてない？」

「あんまり仕事ないんだけどね」

「見たことあるよ！」

「ありがと。また何かに出るとき教えるから見てね」

2人の気さくで飾らない性格が、他のキャストとの距離を縮めた。

予約をした全てのキャストのヘアメイクが終わった。

「おはようございます！」

「おはようございます」

イシハラくんが取り仕切る朝礼が始まった。

「いよいよハイエナジー店のグランドオープンの日となりました。

みんなで協力し合って、

今日の目を迎えることが出来てスタッフ一同、本当に感謝しております」

簡単な業務連絡が終わると、私とマコちゃんが紹介された。

「こちらユイさんです。フロアマネージャーをお願いしております。

それから隣のマコさん

はフロアリーダー。このお2人に分からないことがあったら聞くようにしてください」

「みなさん、力を合わせて頑張りましょう。よろしく申し上げます」

私が代表して、簡単な挨拶をした。

「それではボス、お願いします」

さすがに一国の主となった彼は、緊張しているように見えた。

レセプションの当日。

イシハラくんの大きな挨拶で朝礼が始まった。

イシハラくんに促され、いよいよ彼の挨拶だ。

「みんな、おはよう！」

「おはようございます！」

「本日は招待客のみが来店するレセプションです。1日だけなんだけど、営業になれる

ように頑張ってください。この中では誰一人、嫌な思いをさせたくないからみんなで

仲良く、そしてプロの高い意識を持って協力し合おう。そして、みんなで稼ごう！」

再びイシハラくんが、フロア中央にやってきた。

「それでは本日もラストまでよろしくお願いします！」

「お願いします」

以前、働いていた、彼と出逢った店。

ユミさんのラスト営業日に行ったキング。

彼と遊びに行った、ディスコ横浜M。

店の営業風景というのは、3通りしか知らない。

BGMはゆったりと静かに流れていた。

フロアの照明は、キャバクラとは異なり、少し明るめのセッティングとなっていた。

VIPルームが1段高い位置にあり、照明のセッティングも異なる。長い時間居ても、心地良い空間に仕上がっていた。

スタッフは、それぞれインカムの設定の確認をしていた。

20時を過ぎるのを待っていたのか、すぐに招待客がやってきた。

「ボス、おめでとうございます！」

「あ、どうも！」

店に出店する準備で協力業者の面々が多数、来てくれていた。

彼は自らエスコートし、リストに居るイシハラくんへ指示を仰いでいた。

その後、立て続けに招待客が来店する。

キムラくんやコダマくん、社長も来店した。

自由が丘に来てから、彼が世話になっている親分も来てくれたようだ。

ナイレポの編集長で、彼の友人でもあるソメヤさんの姿も見えた。

フロアで縦横無尽に立ち回る彼の姿を目で追っていた。

短い間ではあるが、招待客へは笑顔を絶やさなっていた。

スタッフへは、短い言葉で的確に指示を出していた。

気が着くと店内は、満卓になっていた。

私やマコちゃん、リナちゃんはテーブル移動を繰り返していた。

この業界、素人が受けが良いとしても最低限のマナーは必要だ。

イシハラくんが準備期間に教育していた成果が出ており、まずまずの接客だった。

別のテーブルでは、シズカちゃん、ルミちゃん、ヨウコちゃんの受けが良かった。

全てがスカウトで入店した経緯もあり、かなりハイレベルな接客に見えた。

招待客のほとんどが水商売絡みで遅くなれば、遅くなるほど客が来た。

彼の計らいで、商店街で仲良くなった店主達も招待状無しで入店した。

ほんの数時間だが、彼の作る店作りに感心したのが、正直な感想だ。

私が以前、働いていた店は、個々が強力な個性を持っていた。

簡単に表現すれば『私が1番』という感じだ。

他人に協力もしなければ、もちろん協調性も無い。

男子スタッフも向上心の欠片も感じられない。

女が多い職場というのは、恐ろしいものだ。

いつも派閥争いや学生のようなイジメも存在していた。

特定の実力があるキャストで、店が保っていたようなものだった。

しかしハイエナジーは、単なる個々の集合体。

みんなの方向性が同じである。

店のメリットは、個人のメリットとして捉える。

彼のポリシーがスタッフに浸透しており、キャストにも浸透している。

和を重んじているのだ。

必然的に店内の雰囲気は、穏やかで和やか。

働きやすい環境であるということは、キャストがスタッフに協力的となる。

クオリティの高いキャストの出勤数が多くなる。

キャストが多ければ、口コミで客に広がる。

彼は宣伝を一切しないという方針。

その絶対的な自信が分かる気がする。

ハイエナジーはこの時点でコスト削減となっている。

まずスカウトのみでの入店。

雰囲気の良いから、低い退店率。
安定した出勤率ということになる。

これは人材を募集や補充する為の経費が掛かっていない。
このような背景から、宣伝費にも全くコストを掛けない。
自信が無いと出来ない賭けとなる。

彼は店作りをする上で、当初からここまで読んでいた。

招待客の120名の内、出席をもらっていた90名。

結果的には、都合を付けてくれた100名を超える招待客が来店した。

さらに近所付き合いを重んじる彼。

酒乃蔵を始め、数店舗の店主が掛け付けてくれた。

オードブルは賄い分を含めて多く頼んでいたが、最終的には底を付いた。

製氷機ではアイスが追いつかず、スタッフがコンビニへ走った。

お酒も在庫が全部、消費されてしまった感じだった。

「本日はラストまでお疲れ様でした」

終礼を取り仕切るのには、主任のコマツくんだった。

周囲は、まだ慣れていないキャスト、スタッフが一様に疲れた表情をしていた。

「送りが必要な人と日払い希望の人は、店長までお願いします」

簡単な業務連絡が終わると、イシハラくんに繋いだ。

「みなさん、お疲れ様でした！」

「お疲れ様でした」

「みんなの協力のおかげで、素晴らしいレセプションになりました」
イシハラくんがキャストを労っていた。

「シフトは、それではボス、お願いします」

「みんなお疲れ様！」

「お疲れ様でした」

「どうかな？みんな疲れたかな？」

「大丈夫です」

少し酔った、ルミちゃんとヨウコちゃんが元気に答えた。

「あはは、そうか」

ボスの立場としても、キャストを労った。

レセプションの内容に、非常に満足していることも伝えた。

そしてこれから長い時間、ここで営業していく旨、キャストに伝えた。

全てが大成功に終わったレセプションが幕を閉じた。

彼がイシハラくんを集計を教えている間、私と数名のキャストが待っていた。

残ったスタッフやアルバイトが、店内の清掃と発注をしていた。

すると続々と送り部隊が店に戻ってきた。

「戻りました」

「お疲れさん。あとは誰だ？」

「ハラダですね」

「じゃあいつが帰って来るまで待ってる」

「はい」

集計が終わったイシハラくんがこちらへ来た。

「賄いが無くなっちゃったから、ボスが飯食わしてくれるってよ」

「マジっすか？」

「ハラダが戻るまで、ミスが無いかもう一回チェックでもしてるよ」

「うっす！」

「私達は今日はこれで上っちゃっね」

「ユイさん、帰っちゃうんですか？」

「今晚は、男同士、スタッフだけで盛り上がって」

ハラダさんの帰りは、予想より遅かった。

「蔵でも行ってるか」

順調にスタートを切れたかと思われたが、この後、トラブルに遭遇する。

レセプションが終わり、私達は先に退店した。

女同士でご飯を食べに行くことにしたのだった。

メンバーは、マコちゃん、リナちゃん、ルミちゃんとヨウコちゃん。自由が丘の商店街にある、イタリアンレストランに来ていた。

「ユイちゃん、カツコ良かったですね」

「え？何が？」

「今日は男同士で楽しんできてって」

「ああ。そうかな？」

「私だったら、旦那が終わるのを待たたりしますけどね」

「ヨウコちゃん。それはユイちゃんがボスの立場を考慮してだと思っよ」

「ボス？」

「従業員がまだ仕事してるのに、自分は女房と先に帰れないじゃない？」

「あ、なるほど！」

「その内、2人が先に帰るようになったとしても、今日は初日だからね」

「以心伝心ですね」

「ボスとユイちゃんは、そんな感じよ？」

ルミちゃんとヨウコちゃんがマコちゃんの言葉に感心する。

「ボスの妻って難しいのよ」

「テレパシーで会話してるみたい…」

マコちゃんの判断は合っていた。

私の立場は、あくまで前に出過ぎずなのだ。

その日は、女同士で朝まで話していた。

6時くらいに帰宅したが、彼は帰っていないかった。
レセプションの成果を喜んでいるのだろう。
私は敢えて彼に連絡を取らず、先に休みことにした。

どれくらい眠っていただろうか。

雑踏の音で目が覚めた。

すでに外は明るくなっていた。

ベッドに彼の姿は無い。

「どこかで寝入っちゃったのかな…」

時刻は午前9時。

堪らず彼に連絡を入れた。

携帯電話は留守番電話になった。

イシハラくんやコマツくんに連絡を入れたが、誰も連絡がつかなかった。

女でも買いに行つて、バツが悪いから電話に出ないのか。

私はいつもこのようなネガティブな考えを持ってしまう。

ヤキモチのような可愛いものではないと自分でも思う。

彼から連絡があつたのは、16時だった。

「オネエちゃんのところでも行つてたの？」

「バカ！手短に話すぞ」

店で別れた後、ハラダくんが事故を起こした。

相手はお婆ちゃん、搬送先の病院で逝ったそうだ。

事故現場に彼達が掛け付けると、ハラダくんは連行されて行つたという。

ハラダくんは、手錠こそされなかった。

彼はパトカーで連行されて行く姿を哀れんだという。

ハラダくんを信じ、何とか罪を軽減出来ないかと行動していたらし

い。

彼自ら陣頭指揮を執った。

『目撃者を探せ！この時間帯に辺りで活動していると思われる人間全てだ。タクシー会社や

運送屋、新聞配達、夜間工事作業員、考えられるものは全て聞いて来い！』

探し回った結果、なんと目撃者を見つけ、警察へ証言して欲しいと頼むことに成功した。

事故の数時間後には、被害者宅へ筋を通しに行った。

ハラダさんの拘留から12時間後、不起訴となって釈放された。

そして連絡をくれた今、彼は一旦、帰宅するという話だった。

「ただいま」

「おかえり。大変だったね」

「ああ。さすがに疲れた。風呂やって」

「はい」

ハラダさんは、彼の社員で仲間。

独り、冷たい檻の中に入れておく訳にはいかないと必死になったという。

被害者の寿命を縮めてしまったことには変わりない。

月命日毎に現場へ花を手向けると話したという。

これから仕事に精を出して、故人に報いるような男になれと話すと涙したという。

「釈放は異例の早さだったんだね」

「証言がかなり集まったみたいだからな」

「さすがボスだね」

「俺もさすがに今回のことは勉強になったよ」

彼は風呂に入り、身支度を整えると、いつも通り出勤して行った。追っ掛け、私も早めに店に行くことにした。

店に到着すると、スタッフ全員が彼に呼ばれ、VIPルームに集まるところだった。

「ユイさん、おはようございます」

「おはよう」

「ユイ？もう来たのか。ユイもちよつとこつち来てくれ」

「はい」

全員がVIPルームに入ると、彼がドアを閉めさせた。

「知っている者と知らない者が居ると思うが、全員に連絡しておく昨日、ハラダくんが起こしてしまった事故を話し出した。

「付帯業務も帰宅するまでが仕事だと思え。そして今回のような件が二度と起こらぬよう

遵守するように。これは命令だ。繰り返す、これは命令だ」

「はい！分かりました！」

「続けて、人員配置を発表する」

営業の要、リストはコマツ主任を。

イシハラ店長はリストをサポートしながら、フロア兼VIPルームフロアにはメンバーオオハシ、アルバイトのイワイとセンチ。

フロントにオオシマくんを配置した。

カウンターはハラダくんとアキノくん。

ハラダくんは当初、彼にフロア業務をすと言ったらしい。

「シケた面して、フロアに居ても困る。今晚だけはカウンターに居る」

彼はこのようにハラダくんを説得した。

「イシハラ、頼んだぞ」

「おつす！各自、インカムの周波数の確認をしておくように」

「イシハラ」

「はい」

「客のエスコートの際は、必ずVIPとシステム料金の説明をするようにしてくれ。おそらく」

客は40分制もVIPルームも初めてだろうからな」

「私の方からもキャストに説明させるように言っておくよ」

「分かりました」

「じゃ今日は景気付けにノルマでも設けるか」

「ペナルティとご褒美の2つがあるんですね？」

「そういうことだ。その前に目標売上は200万を設定する」

「200！」

「計算上、実売上が182万をクリアすれば、TAXで200万オーバーだな」

「マジっすか！」

「イシハラくん、それってすごいことなの？」

この数字の重みは、イシハラくんしか分からない。

神懸りのな売上を記録したキングの最終日でも121万だったという。

「倍近いんだね」

「ユイ、これくらい高い目標持ってやらないとダメだぞ」

「う、うん」

「キャストもトップクラスには、月に100万以上は取ってもらっ」

「ええ！」

これも私にしか分からない話だった。

以前、働いていた店では、どんなに頑張っても70万くらいだ。

私を含めた、スタッフ一同はボスの掲げる高い目標に一丸となった。

「未達成時のペナルティは、ユイの車の洗車と車内清掃、ワックス

「掛けな？」

「地味にやりたくない罰ですね」

「達成賞は営業終了後、早朝スープでどうだ？」

「おおー！」

一番盛り上がったのは、イシハラくんだった。

「ちよつとー！」

「ユイさん、これは男の仕事ですよー！」

「マコちゃんにバレても知らないから…」

「ユイ、まだ達成するとは分らん。明日、車がピカピカになる可能性もある」

「あはは。そうだね」

彼なりのやり方で、スタッフを鼓舞する。

大事なことは、結果として売上を出すことなのだ。

レセプションから、オープンの日に掛けて大きな事件が起こった。若い衆を何とかしてやりたいという彼の想いが、予定通りオープンという形となった。

VIPルームで『秘密の会談』が終わると、スタッフ達は仕事に戻って行った。

「ボス、ユイさん、おはようございます」

「おはよう！」

シズカちゃんとお母さんだ。

「今日は何人くらいなの？」

「18人です」

「そうか。結構、稼いでるね」

「おかげさまで」

ヘアメイクや準備が全て終わった。

「コマツ、朝礼だ」

「はい、かしこまりました」

一列に並んで座るキヤスト。

コマツくんは一歩前に出た。

「それではみなさん、ご起立お願いします」

突然、彼の携帯が鳴る。

「悪い、続けてくれ」

彼はエントランスの方へと姿を消した。

「それではみなさん、おはようございます！」

「おはようございます」

「年月日、記念すべきハイエナジーの最初の朝礼を始め……」

「コマツ！」

「はい」

「主任、朝礼閉めちゃってくれ。オオシマは下に12名居るから案内してくれ」

「それでは、本日もよろしくお願いします！」

「お願いします」

「はい、12名様！」

「いらつしやいませ」

親分を先頭に意外とガラの悪くない団体が入ってきた。

「いらつしやいませ。親分、フロアとVIPルームはどちらに？」

「俺らみたいなのは隔離した方がいいだろう。VIPでいいよ」

「ありがとうございます。12名様、VIPルームへ案内して！」

彼の言葉が発せられると、スタッフが一斉にイヤホンを聞き入った。

その10分も満たない間に、続々と2組が来店した。

私や経験者がバラけて、接客する。

さらに客が来店し、8時半を過ぎた頃には店内が満卓になった。

初めての満卓は、フロア34人、VIP12人で想定よりオーバーだった。

キャストは、マイナス6となっていた。

「ユイさん、お願いします」

「お邪魔しました」

スタッフに呼ばれ、テーブル間移動する。

「ユイさん、VIPへお願いします」

「親分のところね」

「はい」

オオシマくんがVIPルームのドアを開けてくれ、私をエスコートした。

「こちらユイさんです。よろしく願いします」

「親分、いらつしやいませ」

「おお、女房か。人妻じゃ口説けないな」

「あはは」

相席になっっているキャストを見る。

みんなちゃんと接客出来ているようだ。

間違いなく、親分一派はヤクザだ。

しかしトップ以下、堅気衆に迷惑を掛けないように教育されていた。

以前の店では、かなりこのような類の人間は敬遠されていた。

同じ空間に存在するだけで、他の客が威圧されてしまうのだ。

ヤクザが1人店内に居ると、10人の客が遠ざかる。

これは彼が言っていた言葉だ。

大きな声を出されて、イレズミを見せられたら堪ったものじゃない。

彼はこの親分とは、良い付き合いをしている。

彼の下には、良い人が集まるようになっていたのだ。

しばらくすると親分が彼を呼んでくれという。

「嫁！会計してくれ。待つてる客が居たら入れないだろう」

「親分、店内で嫁って言うのはやめて」

「あはは。そうだったな。商売上よろしくないよな」

「店長、ボス呼んで」

「かしこまりました」

イシハラくんが無線で彼を呼んだ。

「親分、もうお帰りですか？」

「忙しいみたいだからな。俺達が居ると他の客が入れないだろう」

「お気遣いありがとうございます。こちらでお願いします」

「おう！また来るよ」

親分達がチェックすると10分も経過しないうちにVIPが満卓になった。

更衣室でメイク直しをしていると、マコちゃんが入ってきた。

「すごいね。毎日こんな忙しいのが続くと、ぞっとするよ」

「宣伝もしていない店なのにな」

「ボスの先を見る戦略は大したものだよ」

「キャスト達はどうか？」

「意外としっかりやってるね。下準備が良かったのかな」

スカウト当初に内偵していた女の子達は、かなり情報の落とし込みが出来た。

「店長もなかなかじゃない？」

「あはは。ありがと」

本来、彼は店内での恋愛を嫌う。

仕事と割切れないと全体に対して悪影響なのだ。

常々、プロフェッショナルで居ると彼は言う。

他のキャストは否が応でも、違った目線で見てしまうのだ。

私はオーナーの女、マコちゃんは店長の女なのだ。

もちろんスタッフからもそのような目線で見られる。

言葉遣いや言動内容、行動も注意をしなくてはいけない。

とにかく『らしく』振舞うことが大事なのだ。

私達が優遇されていると思われてしまっても、それはしょうがないこと。

そう思われない為にも、より一層の努力が必要なのだ。

私やマコちゃんには、その気持ちはある。

しかしリナちゃんが、私達と温度差があるように見える。

私の直感だが、リナちゃんはボスから厳しい注意を近い将来受けるだろう。

「じゃ戻りますか」

「ほい、行かれますか」

フロアに戻ると依然、満卓状態が続いていた。

「マコさん、17番シートお願いします」

「はい」

「ユイさんはVIPへお願いします」

「はい」

「お願いします!」

「はい、少々!」

「お願いします」

「はい、ただいま!」

フロアでは、所狭しとスタッフが動き回っていた。

VIPルームには、ナイレポのソメヤさんが来ていた。

「失礼します。ユイさんお邪魔します」

「ソメヤさん、いらっしやいませ」

「おお、ユイちゃん」

「あれ?ユイちゃんとソメヤさんって顔見知り?」

ルミちゃんが不思議そうに聞いた。

「ユイちゃんと俺は、もう数年前からの顔見知りなんだよ」

「そうなりますよね」

「へえ」

ルミちゃんの接客技術は高かった。

加えて、モデルでこの容姿と飾り気の無い性格。

客はおるか、キャストやスタッフにも受けは良かった。

それはヨウコちゃんにも同じことが言えた。

中でもシズカちゃんの人気は高かった。

清楚でいて、容姿端麗、眉目秀麗。

世間知らずなのか、話が噛みあわないことが多く、天然だと思われる。

美容院と兼務している為、12時には早退する。

それが彼女のレア度を高める結果となっていた。

結局、早い時間に満卓になった店内は、閉店まで満卓が続いた。

初の本営業。

大盛況のうちに閉店となった。

私の目線としては、ほぼ完璧なスタートと思えた。

初の本営業が終わり、店長が仕切る終礼が始まった。

「本日もラストまで、お疲れ様でした」

「お疲れ様でした」

「本営業は、いかがでしたでしょうか？」

楽しかったという意見が多かった。

キャストのみんなは、まだまだ行けそうなテンションだった。

その反面、スタッフには疲れの表情が色濃く見えた。

「お前ら、ビシツとしろ！」

「はい！」

店長のゲキが飛ぶ。

「日払いが必要な方は、今日はボスまで。送りが必要な方は終礼後、私まで」

「はい」

「それではボス、何かありますか？」

「みなさん、お疲れ様でした」

「お疲れ様でした」

ボスから放たれた言葉は、私は衝撃的だった。

私がいメージする水商売とは、一部だけの閉鎖された環境。

それを覆す発言をしたのだ。

「みんなはこの仕事を生活基盤としてる人や余力として考える人、それぞれでしょう」

彼は続けた。

会社としては、水商売一本で勝負はしない。

ハイエナジーを基点として、様々な職種に進出する。

退店しても、働き口を確保できるよう成長を続けたいと。

基盤となる、ハイエナジーを磐石にしたいと話した。

ビジョンを分かち合う為にも、ルールを守って店に貢献して欲しいと。

「イシハラ、締めて」

「はい」

終礼が終わると更衣室が朝の山の手線並みに混雑した。

「ユイ、マコ、リナ」

「はい」

「急いでないだろ？最後に着替えて、更衣室の掃除してやってくれよ」

「はい」

ボスがみんなの前で、私達に言い放つ。

このセリフを聞いて、誰が整理しないで更衣室を出るだろう。

結局、私達が更衣室に入ったときには、ちゃんと整理整頓されていた。

しかしボスのセリフに困惑な表情をしたのが、リナちゃんだった。

その場では、誰も何も言わなかったが、ボスが気が着いていない訳がなかった。

更衣室を出ると、ちょうど集計が終わった彼がリストから出てきた。

「ユイ、蔵行く？」

「行くー。スタッフのみんなは？」

「掃除と仕入れと送りが終わったら来るように言っよ」

「マコちゃんとかもいい？」

「とか？」

「ルミちゃんとヨウコちゃんもいい？」

「連れて来てもいいよ。じゃ行くうか。店長、閉めたらみんな連れて蔵に来いよ」

「分かりました。すぐ終わります」

エレベーターを降りるとオオハシくんが花輪を片付けていた。そこは商店街の店主達が、好意で提供してくれた場所だった。

「オオシマ、終わったら蔵に来いよ」

「はい！これ終わったら参ります」

5mほど先にある、酒乃蔵の暖簾をくぐった。

「いらつしやい！ボス何人？」

「分かんない。いっぱい居るから座敷いい？」

「あいよ！」

しばらくするとスタッフが全員、酒乃蔵に集合した。

「今日はオープン初日でお疲れさん。知名度や宣伝もしないで結構な客入りだったと思う。」

明日はナイレポの1面に掲載される。これで一気に名前も売れるだろう。これからもみんな

力を合わせて頑張ってくれ。じゃお疲れさん！」

みんなでグラスを合わせて乾杯をした。

「ルミヤヨウコはどうだ？2日間しかまだ営業してないけど慣れたか？」

「そうですね。ユイさんとマコさんにいろいろ教えてもらったので。何より女の子同士が

すごく仲が良いので働きやすい環境ですね」

「そうか。2人が感じたことを周りの女の子達も同じ思いが出来るようにしてやってくれ」

「はい」

イシハラくんがこそつと彼に耳打ちした。

「ボス…ところで今日の最終は？」

「残念ながら実売が179万で最終196.9万だ」

「ああ…197万ですか」

スタッフ一同が落胆し、一斉に溜息をついた。

「どうしたのみんな？良い数字じゃないの？」

マコちゃんがスタッフの表情に驚いていた。

イシハラくんが自嘲気味に笑う。

「俺達さ…ボスと賭けをしてた訳よ。目標に達しなかったのでペナルティなんだよ」

「みんながそんなにへこむなんて、どんなペナルティなの？」

私は、事の顛末を知っていた。

ペナルティが惜しい訳ではない。

お風呂遊びを彼に出してもらえないのが悔しかったのだ。

「マコさん。ペナはユイさんの車の洗車と車内清掃とワックス掛けです」

「そうなんだ？あはは！」

彼が仕事の話に戻る。

「でも店長どうだ？あんなもんで200万をちよつと下回るくらいだぞ」

「大箱を実感してますね。あとシステム料金が2段階あるってのも大きいです」

「そうだろ？まだまだ上積みが出るってことだ」

「そういうことですね」

「ボスと店長の話ですと今日のハイエナジーはまだまだってことですか？」

「主任はキングの営業を見てたろ？今日なんかあれには及ばないよ」彼の言葉には、コマツくん同様、私も驚いた。

「そう言えばそうですね。スタッフが不慣れな分、多忙に見えただけかもしれない」

イシハラくんは彼の部下として、コマツくんは客としてキングの営業を見ている。

「そういえばボス、集計に入ったってことは細かいデータを見たか

「つたんでしょ？」

「ああ。客単価、指名とフリーの割合、キャスト係数、延長割合を見たくてな」

「抜かりないですね」

「ああ。今日の指名本数は、ユイとマコで約7割」

「おお！」

私とマコちゃんがニヤついていたのは、言うまでもない。

「以下、リナ、ルミ、ヨウコ、シズカといった感じだな」

「ユイさん、マコさん。さすがっすね」

「まずは私達が頑張らないとね」

「そういうことだ。ユイ達のような人間がまず、スタートダッシュに点火させるんだ」

「はい」

しばらく彼以下、スタッフは仕事の話に華が咲いた。

「明日に備えて、そろそろ解散するか」

「はい、ごちそう様でした」

帰宅すると、私の仕事について話し出した。

「やつぱ、ユイは大したもんだな」

「そう？」

「客呼んでた？」

「支障が無い人で数人くらいだよ」

「その他は新規の指名だろ？」

「そうだね」

「でも自分の女房の接客つてのは、案外見たくないもんだな」

「そういう風には見えなかったけど」

「みんなの前で表情に出せないから、こうして話してる」

「ヤキモチ焼くものなの？」

「ストレートに言えばそうなるな」

「仕事には本当にストイックだね」

「その内、営業出るの辞めよう」

「あはは」

「あいつらに任せて、他の業種に進出する」

「私もそれまでに子供仕込んでもらおうと」

「あはは。そうだな」

彼の素直な気持ちは嬉しかった。

そして私の素直な気持ちも彼は受け止めてくれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3924h/>

ずっと外伝 ユイ

2010年12月10日14時13分発行